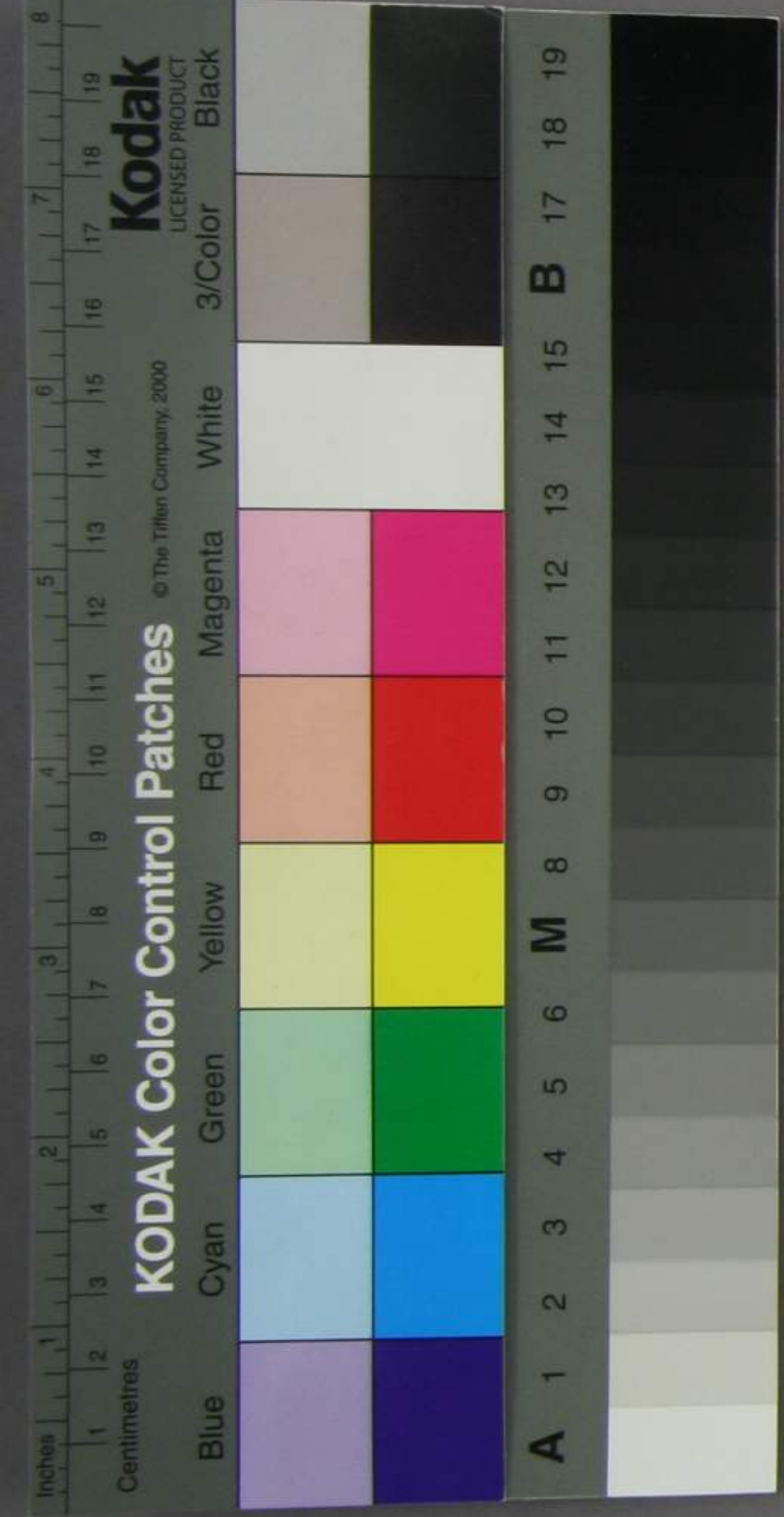


No. 2.

東京裁判所審問
英商カヤルゲンマセソン
後藤象二郎ニ對スル
高崑石炭坑一件口供

1296



414
A2741
2

東京裁判所
第一八七十九年一月廿一日對審
ヤルゲンマゼリン會社ヨリ後藤象二郎ニ

大正十一年四月
大隈侯爵御時

對スル事件

法廷、証拠トシテカルクワード氏ヨリ差出
ル証拠書類ノ本旨ヲ差出バク命令ニタリ
星氏ハ日本語ヲ以テ訴訟入費請求ノ願ヲ為シ
タリ法廷ハ他日熟考ノ上該事ヲ判決スベシト
言渡セリ
カルクワード氏ハ該判決前ニ於テ該事ニ付陳
述セシト欲スルカ故ニ御許可マラシメテ願フ
カルクワード氏ハエービーデー号ノ書類
ヲ差出スルニエフバ記号ヲ付スベキ五号六号
ハ既ニ法廷ニマリ余ハ今ビ一号ヲ差出ス

予ノ記号ヲ付スベキ八号ヲ被告ヨリ差出サシ
ムルヲ願フ十号ハ法院ニマリ之ヲマイ号ト
記号スベシ

カルクウード氏問

被告人ハ今昏類ヲ差出テ為シ居ル哉

日本語ヲ以テ星氏答弁ヲ為セリ

カルクウード氏曰ク

余ニ於テ此訴訟ノ原因タル一切ノ事實ヲ今縷
述スルハ余ノ存意ニマラス何トナレハ如此陳
述ハ訴訟ヲ無益ニ延延スルノミナラス如此事
實ハ今余カ法院ニ陳述為サントスル才一ノ論
点ニ現時關係ナキモノト思考スレバナリ
第一原告人ニ於テ被告人ヨリ金額百二十万弗

余ノ拙方ヲ請求ス蓋シ決金額ハ被告人ニ於テ
原告ヘ償却スヘキ金額ナリ

才二原告ト取結ヒタル契約ヲ被告ニ於テ実践
スバニ命令ゼラルヘキ

才三換契約ヲ被告ニ於テ破約セサル様禁止セ
ラレシ

才一論述并ニ証拠ハ負債ノ論点ニノミ止マラ
ハ換訴処分ニ付キ非常ノ減縮マラシト思者
ハ換負債ノ高ハ原告人并エドワルトウナツト
ル氏ナル被告代理人ノ近頃調整ハ實ニ被告人
ニ於テ負擔スヘキモノナルヲ法院ニ陳述ハ
ハ余カ存意ヨリ換調整ニ付被告ニ於テ負擔ス
ヘキトハ被告代理人ニ於テ論議為スヘシト信

ス何トナレハ被告代言人ニ於テ差當願ニ付現
今東京上等裁判所へ控訴中諛事ニ付議論ニ夕
レハナリ然レモ如何ノ結果ニ至ルヤ未夕現出
セス若シ被告人ニ於テ諛負擔ルルニ付代言
人等カ議論スル件ハ其論述并ニ証拠ヲ控訴上
告ニ於テモ同様ノト信ス当法廷ニ差出スニ
非常ナル時日ヲ消費スルマラニ故ニ今余ニ於
テ如此入費並ニ時日ノ消費ヲ省カシカカ爲メ余
ニ於テ若シ被告代言人カ諛計美ヲ二名ノ外國
人〔諛計美ハ西洋文字ニテ記載マルカ故アリ〕ニ
委託シ調査セシムルニ付キ承諾スル件ハウ
井ツトール氏ノ調査ミタル計美ハ被告ニ於テ
負擔スヘキモノナリヲ主張スルノ余カ権理ヲ

放棄セント欲ス然レモ二名ノ仲裁人ニ於テ諛
計美ニ付キ議論別レテ一致セサル片ハ之ヲ判
決センカ爲メ一ツノ判者ヲ任スルハ仲裁人ノ
自由ナルヘキモノニテ此判者及ヒ仲裁人ノ
判決ハ終結ノモノナレハ原被告共之ヲ遵奉セ
サル可カラサルモノナリ若シ又諛仲裁人ニ於
テ判者ヲ任スルニ付キ一致セサル片ハ當裁
判所ノ所長并ニ横濱ノ英國領事トニ於テ之ヲ
任スルノ策アルヘシ若シ又所長并領事ノ間異
論アリテ一致セサル片ハ唯貴廳ニ於テ他ノ善
策ヲ設クノ外此仲裁ノ消滅セントテ苦心ニ余
ニ於テハ此仲裁ノ事ハ他ノ何等ノ策ヨリ最モ
実止ニシテ且ツ道理ニ基クモノト思考ス然レ

トモ若シ此良策ヲ採用セラレサルハ全ク被
告代人ニ於テ之ヲ拒ムカ故ナルヘシト行セ
サルヲ得^付トナレハ被告代人ニ於テ案件
ニ付無限ノ延延ヲ為シ終結ノ裁判ヲシテ可成
速カサラサルヲ希望スルハナリ若シ又被告
代人ニ於テ此策ヲ承諾スルハ余ニ於テモ
前記ノ如ク計美調整確乎タルモノニシテ被告
ニ於テ遵奉セサルヘキヲ主張スルノ余ノ權
理ヲ放棄セント欲スルノミナラズ原告ノ間
ニ於テ計美ニ既ニ承諾シタル精美モ前記ナル
文字ハ法律上ノ意味ニ用ユ亦タ確實ナルモノ
ニシテ被告ニ於テ遵奉セサルヘキヲ主張ス
ルノ權利モ共ニ放棄セント欲ス然レモ被告カ

去ル三月三十一日ニ於テ九十八万の九百十四
弗二十五セントノ金額ハ原告ヨリノ負債ナリ
ト承諾シタル一千八百七十六年六月ノ約条各
面ヲ何等ノ方法ニテモ之ヲ破約セント企ツル
ハ固ヨリ余ノ被告人ニ許サ、ル所ナリ
右ノ権理ヲ偏先^見ナク放棄スルニ付今余カ被告
代人ニ對シ其有意ヲ聞カント欲スルナリ
原告代人日ク被告代人等ハ被告本人後發
象二郎氏ノ代理トシテ左ノ条々ニ基キ液計算
ヲ仲裁人ニ委託シ調査セシムルヲ承諾スル
ヤ否ヤ
才一仲裁人ハ被告本人カ去ル三月三十一日ニ
於テ九十八万の九百十四弗二十五セント

ノ金額ハ原告ヨリノ負債ヲ承諾シタル一
千八百七十六年六月ノ約条各面ヲ破約ス
ル一ヲ企ツ可カラサルモノナリ

才二仲裁人ハ外國人ニシテ双方ヨリ一カヲ撰
任スヘキナリ

才三仲裁人ハ仲裁ヲ為スニ先キ後日ノ異論ノ
点々ヲ判決セシメンカ为メ一ツノ判者ヲ
任用スルノ權ヲ有スルモノナリ

才四若シ仲裁人ニ於テ判者任用ニ付キ異論ア
ルテ一致セサル片ハ当廳ノ所長ト横濱ノ
英國領事トニ於テ之ヲ任用スヘシ然レモ
之ヲ任用スルトセサルトハ所長及ヒ領事
ノ自由タルヘキモノナリ

才五判者及ヒ仲裁人ノ判決ハ不服ヲ以テ控訴
スヘカラサルモノナリ

才六如斯法ヲ以テ液計算ヲ仲裁ノ判決ニ委
托スルニ付キ其方法ニ依リ異論アル片ハ
当廳ノ所長ト横濱ノ英國領事トニ於テ之
レヲ決定シ且ツ兼リノ上當廳ニテ其決定
セシモノヲ規則トシテ採用アルベキモノ
ナリ

如ク余ニ於テ陳述シタル方法ヲ採用セラルハ
井ハ格外ノ勞力及ヒ入費ヲ省クハ其廳ニ於
テ一目瞭然タルベシト信ス然レモ被告代人
ニ於テ必ス此方法ヲ改正スルナラン其廳ニ於
テモ亦其權ヲ以テ之ヲ改正スルナラン然レハ

余ニ於テハ此才ノ改正ヲ正ニ聴聞センコトヲ希
望ス而シテ余ハ被告代リニ於テ此方法ヲ採
用スルヲ承諾スルヤ否ヤハ之ヲ豫定スルヲ能
ハスト虽モ若之ヲ拒ルハ其ハ其應ニ於テ必ス余
ノ方法ノ如キ他ノ方法ヲ設ケ之ヲ採用スルヲ
主張スルノ権理ヲ施行セラルハニ非サレバ實
ニ不正ノ処分ナルヘシト存スレハ余今其應ニ
對シ能ク之ヲ熟考セラレシコトヲ切望ス如何ト
ナレハ此論點ハ大概計算ノコトニ涉ルカ故ニ液
方法ナク之ヲ処分セラルハ其應ニ於テ到底
為ニ得ヘカラスト存スレハナリ然レ氏被告代
リ人ニ於テ如此契約ヲ拒スルカ又其應ニ於
テ如此方法ヲ採用スルヲ拒マレルカ此ノ兩点

ノ場合ニ至レハ余ハ左ノ如キ他ノ方法ヲ施行
セサルヲ得ス
原告人并ニ被告代理人且トワルドウ井トール
氏トノ間ニテ決算シタル調整ハ確守終結ノモ
ノニシテ遵守セサル可ラサルモノナルヲ論弁
ス而シテ此點ノ判決ニ付原被告ノ中一方ニ於
テ不服ナルハ其案件ヲ中止シ其処分前ニ之ヲ
控訴スルコトヲ其應ニ於テ許可アラシムコトヲ願フ
液控訴ヲ為スノ日限ニ付キ一種ノ規則ヲ設置
シ例ヘハ原被告双方ノ中何レノ一方ニ於テモ
控訴ヲ為スルハ十四日間ニ訴状ヲ提供シ此ニ
對スル答弁書モ亦同日同ニ提供スベシ若シ
大審院へ上告スルモ亦該日限ニ準スベシ蓋シ

諛事ヲ施行スルハ容易ナルベシト思考ス余ハ
諛点ニ於テ曲者ト終決セラルルニ至レハ余ノ次
ノ方法ハ一千八百七十七年五月前ノ計算ハ必
ラス調査ス可カラサルモノナリト論弁セン
ト欲セリ何トナレハ諛日限道ハ後後氏ニ於テ
已ニ諛計算ヲ承諾シ而シテ前記ハ一千八百七
十六年六月ノ約定証書ニ對シ被告人ハ破約ス
ルヲ能ハサルモノナレバナリ如キ方法ヲ陳
述シタルハ前記仲裁ノ方策ヲ採用セラレサル
場合ニ至ルハ余ハ之ヲ施行セント欲スルモノ
ナレ氏必ス之ヲ施行スルト云フニ決ス仲裁ノ
身ハ實際行ハレサルモノト表明セラル、ナト
虽モ余ニ於テ何ゾノ方法ヲ施行セント決心ス

ルニ未タ迂ニトスルニアラヌ而シテ余カ茲ニ
陳述セル処ノモノハ則チ仲裁ノ方法ヲ採用セ
ラレサルハ如キ方法ヲ施行セント欲スルト
ノイヲ云フナリ何トナレバ已ニ決算シタル統
精算ヲ再ヒ決算スルニ及ハスカ或ハ再ヒ之ヲ
決算スルヲ要スルト虽氏一ツノ確定ニタル日
限^{日限ハ此方法ニ因}カハ此方法ニ由テ諛兩點ノ内其一點ニ決定ス
ルモノト思考スレバナリ余カ施行セント欲ス
ル如キキ方法ヲ前陳セシ所謂ハ如キキ方法ヲ
施行スルニ至ルヨリ寧ニ仲裁ノ方法ヲ施行ス
ルニ於テハ原告ハ勿論法廷ニ對シテモ實ニ
高七ナル利益ナルヤヲ法廷ニ表明スルハ余カ

任タルヘシト思考ス故ニ余カ方法ニ付キ被告
代人ノ存意并ニ考施ノ御意見ニ付キ余ハ敬
兼センコトヲ希望ス

一千八百七十九年一月廿一日

原告代言人

モンテリグ、カルグワード(自記ス)

被告第壹号

明治十二年一月二十一日

後藤象二郎 代言人

被告 星 亨

デニソン

一 被告代言人申上候只今被告ヨリ差出候願旨
ハ原告カ亦訴ニ付テノ申立ヲ始メ前ニ御
許容被成且ツ原告へ訴訟ノ費トシテ幾許ノ
償金ヲ差出候様御命被下度

一 被告代言人申上候原告代言人ヨリ亦日差出
候証旨ハ証拠トシテ先ツ暫ク被告ニ於テモ
兼知致シ置キ可申然リト虽モ此承知ナルモ
ノハ後日被告カ証証ニ對シテ非難シ得サル
様ニ束縛セラレタルモノニ非レナリ今豫メ

此段申上置候

判事曰差出ス証拠モノ有之ヤ

然リ

被告代言人ハ本訴ニ付差出ス一キ証拠モノハ
数多有之ハ然レ氏其数多ノ証ノ本層ハ被告
ノ申立ラナシ其申立ラ証スル所ニ当リテ差
出可申ハ

判事曰アイ号証層相違無之ヤ

被告代言人申上ハアイ号ナル証層ノ原告ヨ
リ差出ハモノハ被告本人ノ名下ニ印形無之
ハハ共其名ヲ書シタル筆跡ハ被告本人ノ筆
蹟ニ酷ク似テ居リ且ツ被告本人ヨリ如此層
ヲ送リル下有之ヲ故ニ原告ヨリ差出シタル

層ハ本層ノ様ニ思ハレハ

右之通相違不申上候以上

明治十二年一月廿一日 星 亨 印

原第二号

一千八百七十九年二月一日對審

前審問ノ際余カ陳述シタル計美ヲ仲裁ニ委ス
 ルノ方法ニ對シ被告代官人ニ於テ未タ答弁シ
 能ハサルカ故ニ今余ハ被告ノ負債ノ点ニ関セ
 他ノ一点ニ付尚ホ陳述セント欲スルノミナ
 リ即チ原告カ当法廷ニ願ヒタルモノニシテ才
 一原告ノ問ニ答テタル契約ヲ被告ラシテ
 實踐セシムベキ様当法廷ニ於テ命セラレシ
 才ニ該契約期限中被告ニ於テ決シテ破約セサ
 ル様終始禁斷セラレシト是ナリ何トナレハ法
 廷ハ總テ事件ノ施行ヲ禁ズルナリ又ハ事件
 ラ一ツノ特殊ナル方法ニテ實踐スルナラ余ス
 ベキ様^權ヲ法庭ニ於テ有スルト雖モ實際之ヲ余

スルヲ能ハサルヲアリ然レ氏談事件ヲ一ツノ
特殊ナル方法ニテ施行スルヲ禁スルハ法廷
ノ権内ニアレハナリ

決ニ点ノ願ニ付陳述セントスルニ先チ高島嶽
山ニ付原告ノ關係ノ概略及ヒ決嶽山ヲ政府
ヨリ被告ヘ貸与セシ情実并ニ決嶽山ヲ付以前
ヨリ外國人ノ關係セシトホラ付キ法廷ニ陳述
スルハ余ニ於テ要旨ナリト信ス原告ハ法廷
ニテモ承知セラル、通り横濱支那及ヒ香港ニ
於テ商業ヲ営ム商人ナリ被告ハ士族ニシテ當
帝國政府ノ要路ノ職位ヲ占メタルモノナリ故
ニ當法廷ハ之レニ注目シ尚ホ原告ト最初決嶽
嶽ニ關係セシ頃ノ被告ノ職位ニ注目アラレン

ト最緊要ナリトス

被告ハ一千八百七十一年中東京ニ近來設置セ
ラレタル工部省ノ御ニ任セラレ一千八百七十
二年ニ参議トナリ而シテ又正院ニ勤務セラレ
タリ其後達美社銀行ノ社長即チ頭取トナリ夕
リ決社ハ一部分官ノ管轄ニヨリテ設置セシモ
ノナレハ金銀取引キニ付政府ト多クノ關係ヲ
有セシモノナリ一千八百七十五年中被告ハ當
帝國ノ最上ノ議院ナル元老院ノ副議長ニ任セ
ラレ一千八百七十五年ノ末即チ一千八百七十
六年ノ初メ迄決嶽ヲ勤務セリ決嶽期限中決嶽院
ニ於テ被告ハ實際院長タリ何ドナレハ一千八
百七十七年中皇族方栢川宮ノ命セラレシ迄ハ

院長ナケレハナリ古一千八百七十五年ノ頃ハ
一千八百七十五年七月ノ契約ヲ談判中ナリシ
トハ当法廷ニ於テ注自セラレベキモノニシテ
決契約ヲ施行スルニ至リタル決談判ハ一千八
百七十四年十二月中ニ始メタルヲ余カ茲
ニ証明スレハナリ

後藤氏ニ於テ原告ト決契約ヲ取結タル際因氏
ハ皇族ニ由キ当帝國ノ最上ノ地位ヲ占有シ且
ツ皇帝陛下ノ信臣ナリト云ハレタリ
此レヨリ決炭坑并ニ礦山ニ関レ陳述ヲ為サレ
近頃迄獨リ多ク西洋器械并ニ器具ヲ設置シ或
ハ外國管理者ノ手ニ係リ或ハ外國人ノ所有物
トナリタル当帝國ノ一大石炭山ナル決礦山ハ

長壽近隣ノ高島ニ在ルモノナリ

一千八百六十八年ヨリ一千八百七十年迄ノ間
決礦山ハ長壽ニアル英國高會ダローブル社中
ト肥前候トノ間ニ取結タル契約ニ從ヒ決グロ
ーブル社中ニテ決坑ニ稼業シ或ハ管理セラレ
、モノナリ決契約ハ一千八百六十八年六月九
日付ニテ其契約中此契約ノ日限ヨリ向フ七ヶ
年半ノ間夕高島炭坑ヨリ石炭ヲ掘出し之レヲ
賣却スルヲ約諾セリ決契約ニ依レハ双方ニ
於テ器械ヲ同一ニ設置スベキナレドモ豫備金
ノ金額ニ至テハ獨リダローブル社中ニ於テ一
切之ヲ前払スルモノナリ尤モ稼業ノ入費ハ決
礦山ヨリ生セシ石炭ノ利得ヲ以テ払フ可キト

虽モ其純益ハ双方同一ニ配分スベキノ契約ナ
リ
又若シ肥前候ニ於テ該契約期限後再ヒ契約取
結ラ要セスト認メルハ該器械ヲ買價シ以テ
引受ケベキコトヲ約セリ一千八百七十年八月中
グローブル社中ハ身代限リトナレリ其後日本
政府ニ於テ肥前候カ曾テグローブル社中ト取
結タル契約ヲ引受ケラレタリ而シテ一千八百
七十四年中グローブル社中ノ管財人ヨリ日本
政府ニ對シ訴訟ヲ起セシニ付政府ハ彼ト示談
ヲ為シ四十万弗ノ金額ヲ管財人ニ付託シ之カ為
メ高島礮山ニアル炭坑器械并ニ細工場ヲ政府
ヘ引渡ヘキコトニ至ラシメタリ

一千八百七十四年中或ハ其以前項原告ハ被告
ト金銀引引ヲ為シタリ

原告代理人

モンテীগカルクウード(手記)

同法省

カルクウード氏曰ク

若シ被告代言人ニ於テ本訴出訴前ノ事實ニ付
キ原告ニ於テ説明ヲ要スベキ陳述ヲセサル氏
ハ原告ニ於テモ之ニ関シ陳述セス如何トナレ
ハ本件出訴前ノ事實ハ到底原告被告ノ考案ニ関
セサレハナリ

星氏曰ク

原告ニ於テ如斯陳述ヲ為スノ要セス唯被告ノ
考案ニ對シ承諾スルヤ否ヤヲ答フレハ充分ナ
ルヘシ

カルクウード氏判官ニ對シ曰ク

先ツ被告ノ陳述ニ對シ或ル説明ヲ為レタル上
被告ノ考案ニ對シ答弁ヲ為スヘシ

判官之ヲ許ス
カルクウード氏判官ニ曰ク
何日ヨリ被告代理人ニ於テハ計美ヲ精美人ニ
委タルト陳スルヤ
一千八百七十六年六月ノ定約書ニ記載アル千
八百七十六年三月ノ己ニ承諾サレタル九十八
万九百十四弗二十五セシ止ノ負債ハ被告代言
人ニ於テ當時被告ノ負債ト確定スルヤ或ハ
之ニ及シ被告代理人ハ決定約書ヲ正実ナルヲ
拒ミ決日限前ノ計美ヲ再計美ヲ為サント欲ス
ルヤ若シ被告代理人ニ於テ如斯ク為サント欲
セハ如何ナル理由ヲ以テ欲スルヤ兼知イタシ
クシ

精美人ハ正実ナル者ト陳スルヤ

モンテークカルクウード手記

同去首

被 第 二 号

明治十二年二月一日

後藤象二郎 代理人

被告 星 亨

判事曰訴訟入費、儀ニ付本日裁判言渡ニ付
其言可相心得事

被告代理人申上ル判事殿カ只今由命ニ相成リ
タル如ク去廿一日ニ於テ原告ヲ申立ニ對ス
ル被告ノ申立ラナス前ニ過日被告ヨリ願生
シ置キ以テ、訴訟入費預ケ金ニ付テ、由裁
判ヲ受度ハ

被告代理人申上ル原告代理人カ去一月廿一日
ニ於テ申立タル條款ヲ一々熟慮致シ以テ抑

モ原告ノ申立ノケ条ノ如キハ実ニ重大ナル
事柄ヲ付之レヲ考へ而シテ決シテ對スル申
立ヲナスニハ多クノ時日ヲ要シ候モノニシ
テ一朝輕弁ニ着過スヘキ事柄ニ無之仍テ前
日ヨリ熟慮イタシ居ルハ氏未タ完全ナル考
案ヲ考へ終リ不申且ツ被告ニ於テモ多少ノ
考案有之申立テヘキモノ之レアリ而シテ其
考案モ殆ド稿ヲ脱シ可申有様ニ至リ居リ
仍テ次キノ對審マデニハ被告ノ考案ヲ差出
シ以テ當裁判所ノ高覓ニ供スベシ
古ノ訳ケナルヲ以テ原告代理人ハ先ツ本訴
ヲ付其中立ントスル處ノ事ヲ申立テ以テ様致
度

判事曰ク此ノ次ノ對審ニ於テ仲裁ノ儀ニ付ノ
差并ヲ致スヘキヤ

被告代理人申上ル然リ

被告代理人申上ル原告ヨリ被告ノ訴訟入費預
々金願ニ對シ一月二十九日ヲ以テ當裁判所
ヘ差出シタル唇面ノ由ノミナル唇面ヲ本日
被告代理人カ當廳ニ出頭仕ルハ降渡し相成
リタルニ付其唇面ニ對シ被告ニ於テ申立ル
トモ有之候へ共其時間無之ハ尤モ兩三日
猶豫ヲ賜ハリハ原告ノ差出シタル唇面
ニ對シ差并可仕

判事曰今答辯ヲ為ス迄モ無之只今判決スルナ
リ

被告代理人申上ハ然レ氏判事殿ニ於テ己ニ法
裁判相成ト申渡相成リタル上ハ致方ナキ
次第ナリ
右之通相違不申上ハ以上

明治十二年二月一日

右
星 亨 (印)

二月五日系ヒノ陳述

カルウウード氏曰ク
批者ハ此審問ノ延期ニ先キ被告代理人ニ於テ
批者ノ陳述ニタル二名ノ計算人ヲ採用スルノ
考察ヲ採用スルヲ欲セサルヤ且又一千八百七
十六年六月付ノ契約書ノ終尾ナルモノニシテ
遵奉スヘキモノナルヲ爭論セント希望スル也
ヲ聞カンイテ望ム如何トナレハ次ノ對審日逆
ニ判官ヲシテ何ナル考察ヲ採用セントスルノ
勤考ヲ為スニ充分ノ時日ヲ与ヘント欲スレハ
ナリ
デニソン氏曰ク
原告代理人ノ陳述ニタル方法ニ準リ二名ノ計
算人ヲ採用スルノ考察ハ被告代理人ニ於テ更

ニ服セサルナリ且ツ被告代理人ハ前記ノ契約ヲ破毀セント欲ス而シテ此契約ハ被告ニ對シ終尾ノモニアラスニテ決ニテ遵奉スヘキモノニアラサルヲ証明シ得ヘシト信ス然レモ被告代理人ニ於テ原告代理人ノ考察ヲ採用セサル理由ハ次ノ對審日ニ於テ陳述セント欲ス

被第3号

明治十二年二月五日

後藤象二郎代理人

被告

星亨

口供

一 本年一月二十一日ニ於テ原告代理人ハ本訴中計策ノ事ヲ仲裁ニ付サントノヲ申垂タリ依テ被告代理人ハ今日其原告代理人ノ申立ニ答ヘ併テ被告カ考察スル処ヲ申立ツヘシ
抑モ原告代理人カ過日開陳シタル処ノ目論見即チ原被告間ノ勘定ヲ仲裁ニ付スルトノ説ノ如キハ原告カ未タ本訴ヲ起サ、ル前ニ在テ宜シク發言スヘキナリ

然ルニ本件示談中ニ於テ突然訴訟ヲ起シ今
又之レラ裁判外ナル仲裁ニ付センナゾトハ
豈ニ都合ナラスヤ
去ナガラ原告ニ於テ彼ノ卒然起訴シタルト
ノ不都合ナルヲ悔悟シ今此ノ仲裁ニ付スル
ノ裁判ニ勝ルニ心付キ彼ヲ止メテ之レニ
因ラシト望ムナラバ先ツ本訴ヲ願下ケタ
ル上カ又ハ裁判所以外ニ於テ被告ニ直ニ
談判ニ及フヘキナリ然レハ被告亦或ハ耳ヲ
傾ケ聞ク所アラシ
然レ氏原告カ右ノ兩様ヲ取ラサレハ被告ハ
只裁判ノ進行ニ任スルノコ
一 右ノ如クナルニ付被告ハ原告ノ目論見ニ同

意スルヲ能ハサルナリ
然レ氏被告ハ斯ク原告代理人カ目論見タル
仲裁ノ議ニ同意スルヲ欲セザルト雖モ被
告カ利益ニ害ナキニ於テハ彼ノ裁判上ノ時
間ヲ省キ且少裁判所ノ手數ヲ減スルニ付
テハ被告モ亦原告ト同レク熱望スル処ナリ
故ニ試ニ被告代理人ハ本訴計案ノ一ニ付其
考案スル所ヲ陳フヘシ
抑モ原告カ調製シタル計案ノ不止ナルトハ
本訴争点ノ一ニシテ且ツ本訴中一大要部ヲ
占ム初之ナラス計案ノ一タルヤ繁且難ニシ
テ殊ニ精密ヲ要スベキモノナルヲ以テ専門
熟達ノ人ニ非ラサレハ得テ能クスヘキ処ニ

非ラサルナリ素ヨリ如斯繁難且ツ精密要奇キテ裁量望ムヘカラサルナリ
故ニ以下ニ陳フルカ如ク手順ヲ以テ本訴ノ
計算ヲ検査セハ実ニ原被告ガ共ニ欲スル所
ヲナシ得ヘキトト被告ニ於テハ固信ス依テ
被告代官人ハ謹テ我カ考案スル所ノモノヲ
当廳ニ高覧ニ供ス

第一歐米人ナル一名ノ検査人ヲ命シ本訴ニ於テ
原告ノ請求高ヲ結成スル所ノ原被間ニ在ル
一切ノ勘定ヲ検査セシムベシ

第二勘定ハ都テ原告者ノ手ニナリタルモノナル
ヲ以テ該検査人ハ被告ヲ指命スル所ニシテ
當裁判所カ許諾シタル人タル可シ而シテ該
検査人ハ検査ニ従事スルノ間ハ當裁判所ノ

吏員ト見做サ、ルベシ

第三検査人ハ東洋諸國ニ行ハル、商務及ヒ商規
ヲ詳悉シ計美ニ熟達シタル人タルベシ

第四検査人ハ其職務ニ従事スル時ニ方テ其職務
ニ関セル一般ナル指教ヲ當裁判所ヨリ可受
ナリ

第五検査人ハ検査ノ根臺トナルベキハ曾テ原告
カ被告ニ交付シタル勘定帳ヲ以テスベシ

第六検査人カ要之ル所ノ勘定帳及ヒ其計美ニ関
スル書類一切ヲ原告ヨリ検査人ニ供スヘシ
又検査人ヨリ原告者ノ計算者ニ對シテ質問
又ハ報告ヲ要スル所有ルハ原告ハ其計算者
ヲシテ之レニ應セシムヘシ

第七 検査人ニ於テ若シ格別ニ当裁判所ノ指教ヲ受クルラ適當ナリト考フ場合ニ於テハ其指教ヲ乞フヲ得ヘシ又当裁判所ハ時ニ格別ナル指教ヲ検査人ニ与フルコトアルベシ

第八 検査人ノ務メタルヤ既成ノ勘定如何ヲ查明シ原被間ノ勘定ノ有様ヲ明瞭ニ当裁判所ニ報道スルニ止マルモノナリ決シテ一事ヲリトモ取捨ノ權ナシ

第九 検査人ハ又ハ商務商規ニ照シ某シ事ハ公平ナラス又代理人及ヒ本人ノ關係ニ於テ某件ハ不条理ナリト思考スルコトアレハ之レヲ当裁判所ニ報道スベキ務メアリトス

第十 検査人ハ契約ニ依リ原告カ代理人トシテ

得ヘク許サレタル外ニ用違事務ニ関シ原告カ得タル一切ノ利益ヲ檢定シ当裁判所ニ報道スヘシ其一切ノ利益トハ例ヘハ一切ノ周旋料割別キ錢等是ナリ

第十一 当裁判所ハ検査人ノ報道スル処ヲ原被兩造ヲ証拠及ヒ論弁ニ照シ以テ其報道セシ処ノ件ノ當不當ヲ決ス可キナリ

第十二 原被告ハ当裁判所ノ判決ニ服セザルコトアレハ素ヨリ定律ヲ依テ許ルサレタル時間ニ於テ控訴又ハ上告スルコトヲ得ヘシ以上被告カ計畫スル所ハ只被告ノ目論見ノ概略ノミ而シテ当裁判所ハ被告ノ考案ヲ是トシ之レヲ実行セシムルニ當テハ被告ニ於

テ誤検査人カ如何シテ其業ヲ取ルヘキヤノ
細目ニ及ヒ当裁判所カ検査人ニ與フ可キ一
般ノ指放ニ関スル細目ノ如キハ追テ申立ツ
可シ

蓋シ被告ノ此ノ目論見ハ公平ナルモノニシ
テ原被間ニ結ビタル契約（明治六年七月一日
結ビタル用達契
約ヲ中層記ニ照會シ且ツ一般ノ道理ニ照ス
モ背ムク処ナレト信ス故ニ被告ハ之レヲ採
用サルヘク主張スルノ權アリトス又被告ハ
原告モ如斯公平ナル目論見ニ同意スベク否
之レニ同意セザルヲ得サルモノト固信ス
斯ク被告ハ検査人ヲシテ検査セシム可キヲ
主張シ若シ之レヲ実行ニ至ラシムルモ素ヨ

リ被告カ常ニ主張スル所ノ原告カ不正ナル
勘定ヲ成シタルヲ以テ原告カ被告ニ對シテ
契約ヲ破リタル一因ナリト云フヲ放棄シメ
ルニ非ラサルナリ

右之通相違不申上候以上

明治十二年二月五日

右
星 身 印

一 被告ハ被告ノ目論見ニ對シテ原告ノ之レヲ
承知スルヤ否ラ答フルコトヲ要スルノコト原告
カ該目論見ニ付キ議論ヲナスコトヲ要セサル
ナリ故ニ原告ハ被告ノ目論見ハ同意スルヤ
否ラ申立テハ様由指令之レアリタシ

判事

一 過日ノ原告ノ申立ニ對シテノ申立ハ相濟
タルヤ

被告代官人申上候然リ

一 被告ハ原告カ被告ノ目論見ニ對シテ同意不同
意ヲ申立スレテ被告ノ目論見ニ付キ論辯致
シ候丁ハ相拒ニ申上何トナレハ原告カ被告
ノ目論見ニ對シテ同意不同意ヲ申立ルニハ論

辨ノ如キモノハ不用ナレハナリ

判事

此後ノ審問ハ未ル八日午前第九時三十分開
庭ニヘキニ付出頭スヘシ

古之通相違無之候以上

明治十二年二月五日

古

星 亨 (印)

原中三号附属
二月七日原被往復書翰

ニヤルゲン、マゼソン会社ヨリ後茂象二郎ニ對
スル事件ニ付キ去ル五日茂君及ヒ星氏ノ陳述
サレタル考案ニ付キ左ノ点ニ御説明アラシ
イラ望ム

中一茂君ノ説ノ如ク計算人ハ精算ヲ委ヌルニ
付キテハ何年何月後ノ計算ヲ委子ントス
ルノ旨趣ナルヤ

一千八百七十六年三月三十一日ニ於テ後
茂象二郎氏カ記書ヲ以テ九十八万九百十
四弗二十五セントノ原旨ヨリノ負債ヲ兼
括シタル決日限前ノ計算モ共ニ委子ント
スルノ旨趣ナルヤ若シ如斯ナレハ拙者ハ

其君ニ於テ何ナル理由ヲ以テ該証各ノ終
尾ノモノニシテ遵奉スヘキモノニアラス
ト云フヤ其理由ヲ聞カンテ望ム

第二該計算人ハ公平ナルモノニシテ其職ニ任
スル前ニ更ニ原被告共ニ對シ高業上ノ関
係ヲ有セサルモノヲ要スルヤ

其君ハ被告自己ノ存意ニ任シ計算人ヲ撰
用セントスルノ旨趣ナルヤ

計算人ニ給料ヲ払フノ方法ハ如何ナルヤ
第三若シ其君ニ於テ計算人ヲ撰用スルノ權ハ
被告自己ノ有スルモノナリト云ハニ原告
ニ於テ何氏ノ報告書ヲ満足ナルモノトナ
スルハ其報告各ハ被告ニ於テ遵奉スヘキ

モノト云フノ旨趣ナルヤ

右ノ点ニ速ニ御説明アラントテ乞フ

一千八百七十九年

二月七日

モンテীগガルラウード

七十三番住

エツチ、ゲブリユー、デニオン君

ジヤルゲンマセソン會社ヨリ後後象二郎ニ係
ル事件ニ付キ去ル五日余等ノ考案中ノ数点ニ
付キ余ノ説明ヲ御依頼ニ相成タル御答落字
イタシタリ

答弁

中一 被告代言人ニ於テハ被告ノ原告ヨリノ
負債ニ等スル総テ計算ヲ計算人ハ妻子
ニトスルノ旨趣ナリ

被告代言人ニ於テ一千八百七十六年三
月卅一日附ノ証卷ヲ破毀スルノ権理ヲ
有スト信ス如何トナレハ原告人ニ上
等裁判所ニ於テウ井ツトール氏ノ供詞

ニ付キ之ヲ破敗セシナレハナリ尤モ其
他ノ理由アレハ決理由ヲ以テ之ヲ証ス

中二 計 計算人ハ公卒ナルモノヲ要ス

中三 計 計算ヲ^計算スルニ付其入費ノ点ハ今確答

スルヲ能ハサレハ明日之ヲ答フヘシ

中四 計 算人ノ取捨ハ万事計算ノイラ司ルモ

ノナリ其報告ハ法廷ノ判決ノ指^導トナ

ルベキモノニシテ法廷ノ判決ノ一部ヲ

為スルハ原告共之ヲ導奉スヘキモノ

ナリ

一千八百七十九年二月七日

エツチ、カブリユー、デニソシ

横濱廿四番住

モシテীগ、カルクウード君

原告(三多)

二月八日係被陳述

デニソシ氏

既ニ説明セシ調整各ニ一千八百七十六年三月

三十一日迄朗讀セシモノト陳述スベキ筈ナリ

該契約各ニハ更ニ日附ナキモノナリ

カルクウード氏

前審問ノ際当法廷ニ提供セシ被告代言人ノ陳

述ヲ余ハ篤ト熟考セシナレ氏其陳述ノ要旨ニ

付論弁スル前ニ至リ先ツ余カ陳述ヲ被告代言

人ニ於テ抵拒スルニ付陳述スル理由ハ余ニ於

テ些少ノ弁論ヲ要スト信ス

去ル二月中当法廷へ起セシ訴訟ハ原告ノ陳述

スル如ク被告ニ於テ後山及ヒ器械ヲ不正ニ可

有ニ又原告代理者タルノ職任ヲ剝奪セシニ依

リ起リタルモノニシテ今般ノ訴訟ト同一ノ趣
意ナリ
被告ノ熱望ニヨリ該訴訟ハ願下ケタレモ亦談
ノ契約ハ其終満足ナル結局ニ至リ難キ了ニナ
リタリ該事情ニ依リ終ニ今般ノ訴訟ヲ昨年十
一月一日ニ起セリ計等ヲ仲裁ニ委スルハ既
ニ該日限前ニハ起ラサリト陳述スルハ正実
ノモノニ非ス何トヤレバ該事ニ付長等及口横
濱ニテ原告ノ一名ヨリ被告ハ屢談判セシノミ
ナラス實ニ嚴談セシナレハナリ
今余ハ被告代理人ノ陳述ニ付論弁セント欲ス
其陳述ノ要旨タルヤ左ノ件ニ関スルモノト
信ス

第一

該計等調査ノ為メ精算人一名ヲ任シ其報告ヲ
当法廷ニ提供スベキコト

第二

原告ニテ被告ト高務ヲ始メシトキヨリノ総計
算ヲ調査ノ為メ其精算人ニ委子ベキコト

而シテ其他ノ要点ハ全ク詳悉ノ一ニ添リ單ニ
計算ヲ調査シ報告スルノ方法ヲ掲載セシモノノ

ナリ

第一ノ要点ニ付余ハ該訴訟ノ一方ノ者ニ於テ
精算人即チ其精算人ノ計等ニ報告ハ法廷ノ
一助トナシ之ヲ提供スベキモノヲ撰任スルノ
権理ヲ有スルトノ陳述ノ不正ナルヲ眼前明瞭

ナレハ之ニ對シ余ニ於テ論弁ヲ要セス又余ニ
於テ如斯キ陳述ヲ兼諾スルトノ目論見ヲ以テ
被告ニ於テ提供セシモノトハ位スル能ハスシ
カノミナラズ今当法廷ニ提供セシ被告代理人
ト唇面ニテ及令原告ニ於テ計算上被擧任者ノ
報告ヲ正実ノモノトシテ兼諾スルニ関セス諛
報告ハ依リ被告ニ於テ義務ヲ負擔スルコトハ
被告ノ存意ニ非サルコトヲ兼知セシテハ尙茲
ニ諛陳述ニ對シ別ニ論弁スルコトヲ要セス蓋シ
余ニ於テ然然之ニ抵拒スルトノコトヲ茲ニ陳ス
ルノミナリ
被告陳述ノ第一ノ要点モ亦余ノ敢テ之ヲ贊成
スベキモノニ非ス被告代理人ニ於テ一千八百

七十六年三月三十一日以前ノ諛計算ヲ再整ス
ベキ推理ヲ有スルコトヲ陳述セント企望スル所
如斯企望ハ實際成功スベキヤ否ヤ其点ハ信シ
ガタシ何トナレハ一千八百七十六年六月附ノ
証各ニ依リ被告ハ此訴訟狀ノ答弁各ヲ以テ諛
契約各ノ無効ナルコトヲ陳述セサリシ計算ハ結
局調整ニタルコトヲ承諾シ又一千八百七十六年
三月三十一日ニ至リ原告ニ九十八万九百十四
弗二十五セントノ負債タルコトヲ兼諾セリ
被告ノ陳述ノ趣意ハ如何ナルヤ其意ヲ明白ニ
セカ为メ今法廷ニ提供セシ唇面并ニ返答ヲ以
テ被告代行人ト往復セリ而シテ被告ハ一千八
百七十六年三月三十一日以前ニ溯リ計算ヲ为

サント希望スルハ一千八百七十六年六月ノ契約
約層ニ依リ已ニ承諾セシトテ放棄スヘキ理由
ニ基カスシテ唯余カ他ノ法廷ニ於テ列段ノ見
込ヲ以テ一千八百七十六年三月三十一日以前
ノ計算ニ付陳述セシトニ於テ原告ノ返
答ニ於テ兼知セリ
一千八百七十六年三月三十一日以前ノ計算ニ
付余カ陳述セシハ計算ノトニアラスニ亦余
カ願層ヲ補助スル事實ヲ陳述センカ为メナリ
一千八百七十六年六月ノ契約層ハ被告ヘ對シ
確乎動カスヘカウサルモノト主張スト陳述ス
ルハ強ント無用ニ爲ス故ニ余ハ当法廷ニ於テ
該契約層ハ無効ノモノト判決セラルルニ非サ

○ノ計算ヲ精算セントシテ断然抵拒スルナリ

レハ一千八百七十六年三月三十一日以前
被告ノ間ノ取引上ニ付今陳述スルハ必ス要用
ノモノト行ス去テカウ被告ノ負債ヲ証明セン
カ为メニ非ス只余ノ會社ハ契約ノ実践并ニ被
告ノ破約ヲ禁スル为メインジヨンクヲ清願ス
ベキ権ヲ有スルコトヲ証言センカ为メニ高島礦
山ニ付原告ニ於テ一千八百七十六年三月三十
一日以前ノ取引ニ付陳述スルコトハ緊要ト信スル
カ故茲ニ陳述ス
該計算調査ノ点ニ付余ノ見込ニ依ルハ實ニ公
平ナル余ノ考案ヲ被告ニ於テ拒ミタル上ハ左
ノ如キ方法ノ採用アレハ余ニ於テモ之レヲ承
諾スルノミナリ

被計算ヲ調査シ之レヲ報告セシカガメ精算人
二名ヲ撰任スベシ右二名ハ外國人ニシテ双方
ヨリ一名ヲ撰任シ二名共ニ實十ル者ニテ当法
廷ニ於テ允許セシモノタルベシ右二名ノ報告
ハ当法廷ニ提供スバキモノニシテ其二名ノ報
告互ニ符合スルキハ原被双方ニ對シ効アルベ
キモノナリ而シテ若シ符合セサル点アラバ之
レヲ当法廷ニ於テ判決スベキナリ然レハ被精
算人ハ一千八百七十六年三月三十一日以後ノ
計算ノシラ調査スベキ權ヲ有スベシ精算人ニ
於テ被計算ヲ調査シ及ヒ報告スベキ方法并ニ
時時日等ハ詳悉ニ宣リタルモノナレハ被方法
ヲ決定シタル後ニ至リテモ容易ニ確定セラル

ベキモノナリ
被告代亡人ニ於テ此考案ヲ拒ムナレバ被計算
上ノイニ付テハ然ラ多法廷ニ於テ決定セラレ
ヘキモノナリ然レバ余ニ於テ曩ニ陳述セシ
如キ方法ニ依ルバ被告代理人ウ井ツトホ一
ル氏ノ調査シタル計算ハ被告ニ對シ確乎タル
モノニシテ動カスベカラサルモノト信スルカ
故ニ如斯キモノナルヲ余ハ主張スベキ十分
ナル權理ヲ有ス然レモ被告ニ於テ被計算ニ對
シ論弁スルニ至レハ莫大ノ時日ヲ消費スル故
ニ余ニ於テ之シテ主張スベキ權利ヲ放棄スベ
シ又一千八百七十五年七月附ノ契約唇ノ末項
ニ記載アル款条即チ被契約ヨリ生スル原被告

ノ間ノ争点ハ然ラ其際横濱ニアル英國裁判官
ノ裁決ニ委子ヘシト被告自ラ約諾スル処ノモ
ノラ主張スハキ余カ権理モ亦放棄セントス而
シテ当法廷ニ於ラ左ノ方法ヲ以テ計算ヲ可置
スル丁ノ保証アラバ前記ノ二点ニ付主張スベ
キ余カ権理ヲ放棄セント欲ス
該計算ヲ調査スル為メニ当法廷ヨリ精算人ヲ
撰任スベシ然レ凡一千八百七十六年三月三十
一日以後ノ計算ヲ調査スルニ止マルベシ何ト
ナレバ前陳スル如ク一千八百七十六年六月ノ
契約ハ確乎タルモノナル丁ハ当法廷ニ於テ
疑ヲ容ル、能ハサルモノナリ該精算人ハ成可
リ公卒ナル外國人ニテ計算方違人タルベシ而

ニテ前陳ノ一千八百七十五年七月付ノ契約書
ノ款条ニ基キ并該計算人ハ外國人ナレバ其人
ヲ撰任スルニアタリ人物ニ付横濱英國裁判
官ト高議アラシムラ余ハ当法廷ニ上申ス然レ
氏被告代理人ニ於テ一千八百七十六年七月ノ
契約ハ有効ナル丁ニ付論弁シ亦当法廷ニ於
テモ被告代理人ボノ艾論弁ヲ補助スルニ至レ
ハ前陳ノ丁ハ実行シガシ然ルトキハ前文ニ放
棄セント陳述セシ余カ権理ヲ主張スベシ然レ
氏当法廷ニ於テハ該契約ハ関ニ被告ノ論弁
ヲ補助セラレサル丁ト余ニ於テ先見ス故ニ精
算人二名ヲ撰任スル丁ニ付余ノ考案ヲ被告代
言人ニ於テ承諾スル丁ヲ拒ミタル片ハ前陳ノ

如キ方法ハ採用スルニ至当ナルモノト当法廷
ニ現出スルナラン
被事情ニ長ヒ精善ク二名ヲ撰任スルニ付余カ
考察ヲ被告ニ於テ拒ミ争点ヲ起サントスルニ
至ルハハウツトホール氏ノ調査ニタル計善及
テ一千八百七十六年三月三十一日後被告ニ於
テ承諾ニタルハ更ニ問ハズシテ只被告代言
人ハ一千八百七十六年六月附契約各ノ日附以
前ニ溯ルベキ権理ヲ有スルヤ否則テ該契約各
ハ確的ナルモノナルヤ否ヤラ当法廷ニ於テ予
一ニ判決セラル、ナラハ莫大ナル時日ノ消費
ヲ有ラナラン此等論ニ付論弁スルニハ余ハ既
ニ提供シタル契約各ニ於ルベシ而シテ該契約

各ノ無効ナルヲ証明スル途ハ論弁スルヲ
要セサルナリ而シテ該契約ノ効アルハ該証
明ノミニヨリテ自ラ証明セラル、モノナリ
前記ノ次第ニ付中一ニ余カ考察并ニ一千八百
七十六年六月ノ契約各ニ付被告代言人ノ存意
ヲ聞カシテラ希望ス若シ被告代言人ニ於テ拒
ムルハ余カ前陳セシ方法ヲ採用アツテ可ナラ
ニ哉否ヤノ当法廷ノ意見ヲ敬承センテラ希望
ス

一千八百七十九年二月八日原告代言人

モンテドゲカルクワード(手記)

原第四号

一千八百七十九年二月十二日對審各取

ヂヤルゲン、マゼソン會社ヨリ後藤象二郎ニ

對スル事件

カルクワード氏

精美人ノ撰用及其権限ニ付原被双方ニ於テ同
 意スル能ハザルガ故ニ余ハ該事ハ当法庭ニ委
 スル外ナシト信ス被告ニ於テ撰用セシ精美人
 ニ委任ベキ権限ニ付被告ノ陳述ヲ余ニ於テ承
 諾セシト被告代理人ニ於テ論弁セシトハ凶實
 ノモノニアラス該点ハ詳悉ノトニ涉ルモノナ
 レハ精美人ヲ撰用スル方法等ノ確定ニ至リタ
 ル上ニテ之ヲ決定シ得ヘキモノナルトヲ陳述
 セシナリ

原被告ヨリ指名スヘキ精算人二名又ハ一名ヲ
採用スヘキヲ陳ヘタル余ノ心底ハ精算人ノ
計算カ符合スルキハ其報告ハ原被告双方ニテ
動カスヘカラサルモノト爲シテ時日ノ消費ヲ
省カンカ爲メナリ然ル上ハ当法庭ニ於テ精算
人ノ提供セシ報告中差違アル点ニ付テ其判
決ヲ下スノ止ルナリ該報告ハ何様タリトモ
遵奉スベキモノナル下テ被告代官人ニ於
テ承諾スレテ肯シセサレハ精算人ハ法
庭ヘ其採用ヲ乞ノ外ナシ
去ルハ日ニ於テ陳述セシ方法ヲ以テ
採用アラシムルヲ希望スルニ付キツ
法庭ニ於テ採用スルニ適義ナルモノ

ト認メタルモノニシテ且ツ公平
ナル人物ヲ採用スル下ニ原被告
代官人双方ニ於テ同意至ル下ハ亦難
事ニ非ラント信ス法庭ニ於テ採用スル
前ニ精算人ヲ採用スル下ニ要スベキ
余ハ法庭ノ許可ヲ以テ被告代官人ト
之ヲ商議セント欲ス然レ氏法庭ニ於テ
該計算案処分ノ方法ニ付如何様ノ下
命ヲモテ今アラサレバ余ニ於テ徑来該
件ノ方向ヲ定メンカ爲メ法庭ノ意見
ヲ報ゼラレシトテ希望ス
今一千八百七十六年六月付契約書ニ付
聊カ余ハ茲ニ陳セントス該計算案ハ一

千八百七十六年 三月三十一日以後ヨリ起算
シ而シテ法廷ニ於テ撰用シタル公平ナル精
算人ニ依テ計算スルニ至ルナレハ余ニ於
テハ内井ツトール氏ノ供詞ヲ主張スニキ余
ノ権理并ニ一千八百七十六年三月以
後ニ調整承認シタル計算即チ一千八
百七十六年八月及ヒ一千八百七十八年五
月末迄ノ計算ハ遵奉スニキモノナリ
ラ主張スニキ権理ヲモ亦放棄セント欲スル
一ラ既ニ法廷ニ陳述セシナリ
被告代理人ニ於テハ一千八百七十六年六月
付契約旨ニ戻リ同年三月三十一日以前
ニ遡リ計算ヲ為スノ考案ヲ法廷ニ於

テ採用セラルルハ余ニ於テモ亦前ニ放棄
セント陳タル余カ権理ヲ主張スニシ
去ル八日ニ於テ法廷ニ該事件ニ付已ニ
縷述セシナレハ尚亦之ヲ論弁スルニ及ハサ
レ氏被告代理人ニ於テ千八百七十六年
六月付ノ契約旨ニ付論弁シタルハ又之ニ對
シ些少ノ答弁ヲ要ス然レ氏其論弁タルマ
固ヨリ該契約旨ノ有効ナル一ニ付テハ余カ
意見ヲ動カスニ及ラス
被告代理人ハ最初契約旨日付ナレト云フト
虽モ該契約旨ニハ年号アリ又其月日ニ至
リテハ其文意ニテ推知セラル、モノナリ然レ
氏之ヲ証明スルヲ要スルハ余カ所有ノ

数多ノ各類及ヒ口上ヲ以テ之ヲ証明スルヲ
得ベシ此契約各中ニ何日ニ於テ何程ノ金
額カ被告ノ負債タルヲ決定シ且ツ承諾ス
ルニ付該契約各ヲ渡シタル其月日、欠タルハ
別ニ要用ニ非スト信テ該契約各ヲ渡シタル
ハ一千八百七十六年六月ニ於テ礪山ノ器械
運輸ニ関スル契約各ヲ渡シタル後ナルヘキコトヲ
發見ス
該契約各中 第四条ニ於テ該負債ハ確ト
決定サレタルナリ該契約各自己ニヨリ其渡
シタル日ニ付テハ尚ホ其他ノ証拠アリ蓋シ
該契約各、渡シタルハ一千八百七十六年
中ニシテ同年六月中ニ承結タル契約

施行ノ後ニ渡タルモノナリ
去ル三月三十一日ニ於テ被告負債ノ金額ニ付
記載アルト并ニ同事ニ付該契約各中
中ニ案(右ハ去ル三月三十一日ニ負債ノ金額ニ関スル
モノナリ)ニ付其意味ヲ説明スルニ該契約各
外ノ証拠ヲ要セス何トナレハ其契約各中ノ
文意ハ明白ニシテ余カ既ニ陳述シタル三月
トハ一千八百七十六年三月ナルトノ理由ニ於テ
ハ更ニ疑ヲ容ルベキモノニアラス而シテ該日付前
ノ計算ヲ契約各ヲ以テ調整シタルト并ニ
被告負債ノ承諾ニ付僅令余ニ於テ該契
約各ハ一千八百七十六年六月中ニ被告
渡セシモノナルヲ証明スルノ置位ニアリト呈

之レヲ為ニハ全ク要用ナラザルモノト信ス何ト
ナレハ渡事ニ付承諾モラハ其渡シタル月
ハ六月ナリ七月ナリ八月ナリ或ハ同年ノ末月
ナリトモ之ヲ忘スルハ不用ナレハナリ
被告代言人ニ於テ原告ヨリ渡シタル渡契
約各、写中ニ於テ負債ノ金額記載ナシト
云ヘク余ニ於テモ亦其有無ハ知ラズト虽モ到
底如斯クハ要用ナラズト信ス余ノ依ルル契
契約各ニ於テハ該金額ヲ数字ニテ記載ノ
ルノミナラス該契約各中ニケ所ニ於テ二
行余ノ文字ニテ十分其記載アリ
今被告代言人ニ對シ傳ニト欲ス即チ既ニ
上等裁判所ニ於テ該契約各日限前

ノ契約ノイニ付原告代言人ハ証人ヲ審
問シ其証言ヲ得タルカ故ニ現今該契約各
前ニ過ルベキ権理ヲ被告ニ於テ有スト陳
スルト虽モ余ノ當時審問ニ於テ事實ハ今
論点ノ趣意ニ異ナルノミナラス問題モ亦全ク
之ニ異ナリテ只或ル日限ニ於テ後後ノ
負債ヲ証明センカ為メナリ若シ被告代言
人ニ於テウイットル氏ノ供詞ヲ以テ利セント
欲セハ先ウ其有効ナルモノニシテ之ヲ遵奉
スルコトヲ承諾セザルベカラス
被告代言人ハ一呼吸ニ寒暖ヲ共吹スルコト
能ハサルベシ若シ被告代言人ニ於テ該供
詞ヲ以テ義務ヲ負擔スルコトヲ承諾スル

ナラハ余ニ於テ何ノ故障ヲモ述ニ又法
廷ニ於テモ如斯ナラント信ス然レモ若ニ被
告代々人ニ於テ被告本ノ代理者ノ供
詞ヲ全ク遵奉セシテ只其一部ヲ採リ
之ヲ原告ニ對スル証トスルハ原告代言
人ノ強ク抗拒スル如クモナリ
余ハウヰトリル氏供詞中ニ於テ一千八百七
十六年三月前ノ計算ニ関スル一アルハ
未タ知ラス然ル氏其際ウヰトリル氏ヨリ後
蘇ニ送リタル唇面中ニ一千八百七十六年
三月前ノ計算美ハ既ニ契約唇ニ於テ詠
日限迄ノ計算ハ確ト決定シアルカ故ニ再ヒ
之ヲ計算スルヲ要セズト信シタルヲ一評ニ記

載セリ余ニ於テ此契約唇ハ確ト遵奉スヘキ
モノナルヲ証明スルニ付其他数多ノ理由ヲ
有スト虽モ之ヲ陳スベキ時日ナシ現今当法
廷ハ計算美ニ関スル詠訴ノ性質ヲ明ニ了知
セラルバキノ置位ニアリ故ニ如何ナル方法採
用スルハ法廷ノ権内ニアルベシ然レモ欲スル
方法ヲ採用スルニ付ハ余ノ曾テ陳述シタル
忠告ニ注意アラシムヲ希望ス
詠訴詠ノ性質ニ付当法廷ヲシテ尚ホ明瞭
ナルヲ解ニ至ラシメンカメ過日陳述シタル
礦山ノ概略ノ鏡正副本二冊ヲ呈ス仍ラ
次ノ審問ノ際余ハ将来訴訟ノ手續ニ付
法廷ノ貴意ヲ敬儀センヲ希望ス

一千八百七十九年二月十二日

原告代理人

モンテীগカルクウード(手記)

被第4号

明治十二年二月十二日

後藤象二郎代理人

被告

星亨

口供

判事

過ルハ日原告陳述ニ對シ答辯致スヘシ

被告

去ル二月八日ニ於テ被告カ開陳シタル目論見ニ付原告代理人カ異議アリ且ツ原告代理人ハ新夕ニニケ條ト及一ノ千八百七十六年三月三十一日ヲ得ル前ト於テ兩ケ條也ノ申立ララ再換ズルヲ被告ハ只一體ニ其ニケ條ニ同意セサルト答タリ故ニ令其同意シ能ハサ

ル道理ヲ申立ツベシ且原告代理人カ申立タ
ルニケ條ノ目論見ノ外ハ被告ノ先キノ目論
見ニ原告ハ同意シタルモノト見做シ次キノ
ケ條ヲ申立ツヘシ

計筭検査人ハ原告代理人カ申立ル如ク
ラ命ズルモ該検査人ノ權限及ビ職務ハ被告
カ先キニ申立タル處(即チ職務ハ計筭上ヲ付
而シテ其權限ハ其検査人カ申報スル處ノモ
ノラシテ原告ヲ束縛スルヲ得サルモノナリ)
ラ動カスニ非レハ被告ニ於テ敢テ異論ナシ
トス而シテ先キニ被告カ検査人一人ヲ命ズ
可ク様計畫シタルハ原告ノ作リタル計筭ヲ
検査セシムル為メナルニ付一人ニテ足ルヘ
ク且ツ可成ク費ヲ節減セシムルニ意アリタル

ヲ以テ也

又被告ハ検査人ノ申立ハ原被告ヲ束縛スヘ
シトノ原告代理人ノ意見ニ同意シ能ハサル
訳ハ抑モ検査人ヲ命ズルハ只裁判官ノ手數
ヲ省ク為メノニシテ素ヨリ其検査人カ其
検査スル所ノ計筭ヲ存取捨スルノ權ヲ有セ
シムルハ不用ナルヲ以テナリ且此取捨スル
ノ權ハ裁判官ニアル可キモノナリ

一千八百七十六年中ニ做リタル「テイド」契約
が左ニ開陳スル如キ事實アルヲ以テ一千八
百七十六年三月廿一日マテノ精美ハ被告ヲ
束縛スヘキモノニ非ルナリ
該契約ニハ月日ヲ記サス(月ハ記シテアルモ
日ハ記ラズ)

且ツ該契約ヲ結フキニ先立テ原告ハ被告ニ
該契約ノ字ヲ示シタリ其時ニ其字中ニハ金
額カ記載シテラザリシ但シ此事(但ト以下)
ハ追テ証拠人ヲ以テ証明スヘシ

被告ハ該契約ヲ結フ時其字ニ金額ノ記載ア
ラサルヲ証明セサルモ次キノ數項ノ事實ア
ルヲ以テ該契約中記スルル金額ハ被告ヲ
束縛スヘキモノニ非ルナリ

該契約ニ被告カ負債アリト認メタリト稱ス
ル金額ハ九十八萬九百十四弗二十五セント
トアレヒ一千八百七十七年三月ニ於テ原告
カ被告ニ贈リタル勘定帳(暫ク原告カ送り
タル勘定帳ヲ送リ
レカナルモ)依ルニ一千八百七十六年三月
ハト見做シ

三十一日ニアツテ被告ノ負債ハ九十四萬二
千五百十四弗二十五セント上ナリ是ヲ該契約
ニ記スルル處ニ對照スルルハ三萬八千四百弗ノ
差アリ以テ計算シ實ナラズレテ該契約ニ記
スルル處ノ負債ノ額ニ信ラ措キ難キヲ証スル
ニ足ルリ

又原告代官人ハ上等裁判所ニ於テ或ル証拠
人ヲシテ此一千八百七十六年三月以前ニ拘
ハル被告カ負債ヲ証明セシメタリ若シ原告
カ該契約ニ記スルル處ヲ信シテ疑ハサルニ於
テハ何ソ他人ノ証言ヲ俟タンヤ其自ラ該契
約ヲ信セサルヲ見ル可シ
又ウイツトル氏カ被告ノ代人ナリト自稱シ

計算ヲ為シタルトキ原告カ該契約ニ記スル
不ノ日付ヨリ以前ノ計算ヲ計算ス原告ハ
イットルカ斯ク計算スルヲ已ニ許諾シタル
以上ハ今回ノ計算ヲモ該日付前ヨリセント
云フヲ拒ム可キ理ナシ
又原告カ送リタル勘定ニ付テ該契約ヲ記ス
ル外ノ日付以来ノ勘定ヲ見ルニ不正ナル廉
アルヲ以テ該契約ニ記スル處日付以前ニア
ル勘定モ亦斯ク不正ノ廉ナキヲ保スヘカラ
ス殊ニ原告代官人カ利子ノ一ニ付テハ已ニ
上等裁判所ニ於テ原告カ利子ノ過賦タル丁
ヲ認メ且ツウイットル氏モ亦某々ノ廉ニハ
手数料付スヘカラス又某々ノ廉ハ被告ニ要

償スヘカラスト明言シ原告之ニ同意ス斯ク
賦課ニ一定ノ則ナシ故ニ不正ナル賦課ハ該
日付以前ニ多クアルヘシ(原告ノ清算ノ正レ証
人ヲ以テ)
以上陳タルカ如キ事實アルヲ以テ被告ハ一
千八百七十六年中結ヒタル該契約ニ記スル
處ノ金額ハ實ニ被告カ負債シタリシトナ
スヲ得ス故ニ被告ハ該契約ニ記スル處ノ一
千八百七十六年三月三十一日以前ニ湖
被ノ計算ヲ換查スルヲ得ヘシト信ス
右之通相違無事候以上
明治十二年二月十二日
右

同法

星亭

下

中七方

東家裁制所
一併
進水也
明正二年二月廿四日

大隈去飛心啟

原告口供 訳文第五号

ジャマルケン、マセソン會社ヨリ後藤象二郎ニ掛ル事件

一千八百七十九年二月十九日原被告ノ

口供

カルクワード氏

計算ノ事ハ余ニ於テモ亦法廷ニ於テモ難事ナルモノナレハ法廷自己ニ於テ其詳悉ノ点ヲ判スルヲ能ハサルト思考スレハ他ノ論点ニ先テ至当人物ヲ撰用シ之ヲ計算ヲ委子調査セシメタル上其報告ヲ作り之ヲ法廷ニ提供セシメ且計算人ノ其職ニ従事スルニ付他ノ論点ノ審問

ヲ妨タル一ナシトシテ方法ニ付既ニ過日以來原
被双方ニ於テ論争セリ
現今ノ論争ナル計算上ニ関シテ方法ハ
通常至当ノモノナルノコトヲ余ハ之ヲ實際
施行スベキ方法ト信ス蓋シ此方法ハ法廷ニ
於テ第一ニ其手續ヲ定メ而シテ法廷ニ於
テ到底判ミ得ベカラサル点ヲ委審者ニ委
子之ヲ決定セシムベキモノナリ
一千八百七十六年三月三十一日以來ノ許算
調査ハ莫大ノ時日ヲ消費スレハ其以前
計算調査スルニ至ラハ尚莫大ノ時日ヲ
費スルハ法廷ニ於テ明了ナルベシ然レモ余
ハ換事ハ既ニ一千八百七十六年六月付ノ

契約書面ノ許ヤルモノト認マラス
若シ誤り限以テ計算止ルハ該計
算ノ調査委審者ニ委テ法廷ニ於テ通
常訴訟ノ手續ヲ以テ他ノ点ヲ同時ニ
審問スルニ然ルニ此審問結局ニ至ルニ
ニテ度々委審者ニ於テ計算ヲ調査シ其
報告各法廷ニ差出スルニ至ルニテ了解セ
ラル、ナラシテ此報告各法廷ニ差出シ
ル後法廷ニ於テ此報告各法廷ニ對シテ要
スル点アラハ原被告ヲ以テ其証拠ヲ舉
ケシムベシ而シテ此証拠ハ尚法廷ノ関スル
件ヲ審問ニ付テ十分ナルモノト信ス
今朝法廷ノ早氏ニ對スル尋問ニ誤尋問

タルヤ 将来ノ方法ニ付法廷ノ初メテ意見
ヲ述ラシタルモノナリ 余ハ法廷ニ於テ余
ノ考察ナル計算調査ノ付同意セ
ラレシトモ信ス然レ此其方法ニ付余ハ未
タ何タルヲ知ラストモ法廷ニ何年何月
ヨリ計算ヲ調査スルノ付未タ決心セラレ
サルトモ信ス

余ハ一千八百七十六年六月廿ノ契約春
ノ正実ニシテ遵奉スルモノナルヲ主張ス而
シテ該契約各面ヲ要換スルノ証拠ハ何
カリカ之レヲ被告ニ於テ差出スルヲ抵拒
ス故ニ余ハ当法廷ニ於テ他ノ審問ニ先
至当ナル外國人ノ計算人ヲ撰ビ之ニ千八百

七十六年三月三十一日以後ノ計算ヲ委子
ニトシテ願フ

デニワレ依

星氏ニ於テ既ニ陳述シタル方法ハ至当ノモ
ノナレハ之ヲ今採用セラレサルヘカラサルモノト
信ス計算調査スルノ付法廷ハ先ツ委
審者ヲ撰用スルハ要ノ付了解セラレ
サルヘカラス而シテ該事ノ要ノ付了解
見スルハ只證據以テ証明スルノミナリ委
審者ハ撰用サレタル上法廷ノ命令ニ準リ
其職務ヲ勤ムヘキモノニシテ「カルクワー」ド
氏ノ了解ノ如ク法廷ニ於テ審審者ノ命
令ニ従ヒ其任ヲ勤ムヘキモノニアラサルナ

リ而シテ審審者ノ報告書ハ法廷ノ命令
ニ準リ成ルモノナレバ法廷ニ於テ何等ノ
計算ヲ委ヌヘキヤ否ヤノ証拠ヲ呈セシム
ル迄ハ如斯 命令ヲ下スト能ハサルヘキモノ
ナリ

余ハ該契約書ノ遵奉スヘカラサルコトヲ証
明セシカ為メ今証拠モノヲ法廷ニ呈ス
ルニ及ハスト信ス何トナレハ余等ニ於テ未タ
該契約書ヲ証拠モノト為スヲ承諾セサレハ
ナリ且ツ該契約書ヲ指テ一千八百七十六
年六月付ノ契約書ト云フ哉余ニ於テ
更ニ了解シ能ハサルモノナリ何トナレハ該
契約書中只年号ノミヲ記載シテ月

日ナキカ故ナリ該契約書本番ノ寫本ニ
於テ六月ノ文字ハ記載スレバ其文字ハ
石筆ヲ以テ記載ヤリ而シテ其筆跡タル
ヤ原告中一員ノ自筆タルモノナルコト信ス該
件審問中原告ニ於テ第一証拠ヲ呈
セザレバカラスニ而シテ法廷ニ於テ計算人ヲ
撰用スルヲ要用トスルハ被告ニ於テ其
撰用ニ目故障ヲ為スベキコトナシ
カルクワード氏

余ノ既ニ陳述シタル考案ハ現今原告ノ
請求スル補助ノ如キ場合ニ於テ採用スル
方法ナリ此方法ノ善良ナルコトハ既ニ余ノ
陳述シタル理由ヲ以テ明白ナリ被告代

言人ハ本日迄原告ノ意ト固キ意ヲ懷キ
レハ現今迄被告ニ於テ原告ノ屢採用
アラレトテ願ヒタル方法ヲ施行スルニ付
更ニ拒拒セサルヲ以テ明ナリ之ヲ及シ星
氏ハ十一月五日及ヒ其後屢計算ハ至
テ混雜ナルモノナルカ故ニ計算ニ達シタル
人物ニ至レハ到底之ヲ調査スルヲ能ハ
ス故ニ当法庭ニ於テモ亦自ラ之ヲ調査
スルヲ能ハサルニ付陳セリ此上ニ余、於テ
尚又法廷ノ意見ヲ述ラレントテ希望
ス
デニソン氏
本訴審判ノ初メニ際リ被告代理人ハ

自ラ計算調査ノ一付正実至当ト見
シクル方法ヲ陳述シタリト虽氏原告代言
人ニ於テ認テ之ヲ採用セサルカ故ニ今余
等ハ只通常ノ訴訟手續ヲ以テ本件ヲ
審問アラレントテ乞フノニ星氏、陳述中
計算ノ混雜ナルモノト述ヘシハ只誤
計算ヲ一覽シテ其混雜ナルトヲ知リ
其混雜ハ格別一千八百七十六年一月
以前ノ計算ニマリスレト云フニ意味ニシテ
計算人、採用スルニ計算ヲ全ク調査
スルヲ要ナサルモノト云フ趣意ニ付
ラズ若シ計算ヲ調査スルヲ要セサルハ計
算人ノ職務ヲ要セス而シテ審判者

ヲ控用之ニ計算調査ヲ委ヌルノ要用ナルヲ
証明スルハ原告ノ職任ナリ

カルクワード氏

デニツン氏、説ヲ論破セシカ為メ余ハ只
法廷ニ對シ過日以來ノ記録ヲ一覽マラ

ントタムコフ

デニツン氏

計算人ハ法廷ノ命令ヲ受ケ其職務ニ從
事スベクシテ法廷ハ該事ニ有テ證據ヲ差出

サセル迄ハ此命令ヲ下スベキモノニ非ラス故ニ

計算ハ法廷ニ於テ證據ヲ差出サセシ上ナ

ラテハ調査スヘキモノニナラス

カルクワード氏

余ハ被告代言人、陳述ニ對シ其艱難シ
タル性質ヲ論破スルハ容易ナラシレバ既
ニ争論ハ無期、点ニ至タレハ此上陳述ス
ルヲ欲セス尤如斯キ延延ハ被告ノ望ニ如
ナリ

デニツン氏

如斯キ延延ヲ望ムハ原被間ノ何レニマルヤ

記録ヲ以テ明ナリ

星氏日本語ヲ以テ陳述セリ

カルクワード氏

余カ既ニ陳述シタル方法ハ余ニ於テ至當ノ
モノト認定シタルモノナリ余ハ記録ニ記
載ナル陳述ヲ以テ願肩ノ基本トナスナリ

余ハ次ノ審問日ノ考察ヲ為サンカ為メ今
尚法廷ニ於テ何トカ裁決アラントヨ願フナ
リ

原告代 言人

モシテীগ、カルワード (手記)

被告代 言人

エツチダ、ニテ、テニソシ (手記)

被告口供才五号

明治十二年二月十九日

後後象二印代 言人

被告

星

亨

口供

判事曰

一 被告ハ去ル十二月 被告ノ片千八百七十六
年六月日ノ契約書ニ負債金高ヲ
記載アルハ信ヲ置キ難キ理由ヲ陳
タルノミニテ未ダ謬在ヲ舉グニ
テ五以上ハ謬在ヲ舉グニ

被告答

一 被告代 言人ハ先日ヨリ種々ノ目論見
ヲ考畫シ申立ルルニテ早ク

計算ノ一ヲ既リ交リハ均九系共
代言人ハ自分ノ私意ヲ主張ス
ント計算ノ一ヲ手早ク吟味スル
一ノ目論見モ画餅ナラントモ故ニ
被告ニ於テハ今後尋考ノ一級ノ
手順ヲ追テ本訴ヲ却却決者之
度ハ
告述ノ如クナレハ通例ノ如ク進行
ニ在テハ計算ノ論ノ如キモ原
被ノ證據ニヨリ却却決ニお成ル可クト
存
故ニ只今知事殿カ仰セノ如ク計算
上考ノ案ニ付被告ノ所説ヲ認明スル

為メノ証拠ヲ只今申立ル及ハサレ
ト存候

知事曰

一 只今被告代言人呈上カ申立タル如
ノ趣ニ付更ニ詳悉申立ツベシ

一 被告代言人ニ於テ原告カ計算上検査
人ヲ命ス可キ要用ナルヲ認明スル
ニ付申立タル原告カ先ツモ検査ノ
ヲ命ス可キ要用ナル理由及ヒテ檢
査ノ如何ナル檢利義務ヲ取ル
可ク要用ナルヤヲ認明スルハ
必要ニ於テ自然ニ其検査人ヲ命

之且ウ一モ検査人ハ如何ナル檢利義
務ヲ持ツ可キモノナルヲ却テ有リ成
ル可キ一ト存取而シテ此検査人
等ノ要用ナルヲ却テ有リ成ルニ本
所ヲシテ尋考ノ手取ラ近ワシメ
得ハ其間ニ於テ却テ有リニ其年可申
ト存取

右之通法中取以上

明治十二年二月十九日

右

是

了了了

第七百九十九号

高島石炭坑一件ニ付廿月廿四日東京
裁判所演説書第... 被告口供リを以テ
去シ其法中申進修也

明治十二年二月廿六日

大塚日法卿

大塚日法卿

演説案

計美ヲ其本職ノ者ニ委ヌルノ基本ニ付原被
 間ニ於テ到底一致セサルカ故ニ法庭ニ於テ
 計美人ニ委ヌルハ善良ノ方法ト思考スル
 ハ法庭ニ於テ至当ト見ヒタル左ノ基本及ヒ
 条款ニ基キ該方法ヲ嚴行セシト欲ス
 第一
 或ル日限ノ前ニ計美ヲ起ス点ニ付原被間ニ
 於テ争論セリ原告ニ於テハ計美ハ既ニ精美
 ニ至リ而モテ屢被告ニ於テ或ル金額ノ負債
 承諾セリト請求ス被告ニ於テハ該清算及ヒ

兼諾ノ点ニ付其効力ノ有無ヲ論弁スル權アリ而シテ初メヨリ原被間ノ計算ノ去子ヲ一切調査スルノ權ヲ有スト請求ス
如斯キ事情ニヨリ法庭ハ(後争論ノ決定ヲ待テ後キ計算ノ調査ヲ為スヲ欲セサレハ)中間ノ時日ヲ定メ此日ヨリ才一ニ計算ノ調査ヲ始ムベシト決定セリ然レモ此判決タルヤ法庭ニ於テ決シテ後争論ニ付判決ヲ下シタルニ非ザルノミナラス此レニ付法庭ノ意見ヲ陳ヘタルニモ非ラス只便宜ト時日ヲ省カントノ為メナルヲ原被間ニ於テ明ニ了解スベシ
法庭ハ一千八百七十六年三月三十一日以後

即チ被告カ或ル高ノ負債ヲ兼諾シタリト原告ニ於テ請求スル中間一ツノ時日ナル日ヨリ今計算ノ調査ヲ為シ始ムルヲ命スヘシ
然レモ若シ尔後原告ニ於テ尚迄未ノ有効ナル請求アルコトヲ証スルハ法庭ニ於テハ前命ニ違ヒス原告ノ為メ猶其目的ニ判決スハ三月三十一日或ハ其後ニ於テ有効ナル請求ヲ行ハスレバ法庭ハ計算ノ二年ニ後日限前ノ計算ヲ調査セシムベシ若シ又原告ノ請求ニタル迄未ノ請求ハ無効ノモノニシテ一千八百七十六年三月三十一日ノ請求ハ効

カアルモト法廷ニ於テ行スル片ハ法廷ニ
於テ將ニ委審者ニ撰シントスルノ人ニ對シ
今与ヘントスル命令ヲ變換スルヲ要セス
才二

委審者ノ職務并推限ハ法廷ヨリ命令各或ハ
復命令書ニ從ヒ其後發行スル教諭各ヲ以テ
定ムベシ概シテ言ヘハ委審者ハ計算本職ノ
者トモテ計算ヲ調査シ其報告各ヲ法廷ニ呈
スヘキナリ其委審者ノ判定ハ事實ノ点ニ付
テノ法廷ノ判決ト曰ヒキモノニシテ其事實
ノ点ニ付テノ判定(例ハ一方ヨリ他ノ一方ニ
對スル負債ノ金額ヲ委審者ニ於テ判定シテ
ル)ハ控訴不可カラス是レ則チ命令狀ノ要件

タルベシ

中三

法廷ハ当然法廷ニ屬スル職務即チ取立金等及
ヒ一般ノ計算方法ニ関スル原被間ノ約諾ノ
意味ヲ確定シ之ヲ明言スルヲ委審者ニ付
与セシト欲セサルカ故ニ法廷ハ委審者ノ職
務并ニ権限ヲ決定スルニ先チ原被告代シ人
ノ論弁ヲ聞キ其上該約諾ノ如何ヲ知シ而シ
テ其代シキ基本ニ從ヒ委審者ニ命令ヲ計算ノ調
査ヲ始メシムヘシ復基本ニ付法廷ノ判決ハ
他ノ判決ニ関セス直ニ控訴セラルヘキモノ
ナルカ故ニ此基本ニ依リ調査シタル計算ヲ
他日不当ナル基本ヲ以テ調査シタル計算ノ

金額ト云フト虽モ控訴ノ理由トナスヘキモ
ノニアラス
別表ノ約諾ナキ場合ニ於テハ委審者ハ計算
職業ノ知識及ヒ高業上ノ慣習ヨリ生スル基
本ヲ以テ計算ヲ調査シ其決定ハ同様終決ノ
モノタルヘシ

冲四

委審ノ入費ハ法廷ノ権内ニアルモノナレバ
之ヲ定ムルニハ委審者ノ報告各ニヨリ原被
分ニ於テ入費ヲ払フベキ責任ノ交ヲ計リ之
ヲ決定スベシ

冲五

原被双方ヨリハ委審入費ノ豫定ニタル金四

ノ金額ヲ証拠トシテ差出スベキモノナレ
氏此ニ税金ニ付法廷ニ於テ其増加ヲ要スル
片ハ時々之ヲ差出サシムルナリ

冲六

委審者ハ保証昏欲又ハ法廷ヨリ命スル其他
ノ方法ヲ以テ其職務ヲ実践セシムベキノ義
務ヲ保証セシムヘシ

原被告双方ニ於テ此方法ヲ定ムルニ付
見テ述ヘ得ル点ハ只委審者ノ何人ナルヲ
俾ズルノ点ニアリ如斯法廷ノ意見ヲ説明
シタル上ハ次ノ審問日ニ原被分ニ於テ撰
用スベキ人物ニ付一定セシヤ否ヲ問フ

欲ス若シ原被告ニ於テ法廷ノ至当ト見認
メタル人物ヲ撰用スルニ付一定スルトキ
ハ法廷ニ於テ之ヲ撰用スヘシ若シ然ラサ
レハ法廷ニ於テ自ラ之ヲ撰用スヘシ又若
シ原被告ニ於テ之ヲ欲スルナラハ法廷ニ於
テ審問ノ末法廷ノ至当ト認メタル外國等
計人ノ名前ヲ私ニ告クヘシ
委審給料ノ言ニ付原被告ト撰用サレタル(原
被告)双方又ハ法廷ニテ計算人トノ間ニ於テ
決定スルハ法廷ニ於テ適足スルナラシ
若シ然ラサレハ法廷ニ於テ勿論候事ニ付
年屆各ニ於テ其ケ案ヲ設ケサルヘカラス
法廷ニ於テ以意見ヲ述ヘタルハ原被告双方

ニ其熟考兼諾ヲ要スヘキ事柄ヲ示スニハ
犯ス(前記ノ如ク委審者ノ撰用ヲ除キ)唯法
廷ニ於テ追テ行ハントスル手続ヲ示シ以
テ其代之人ヲシテ此後何等ノ事ニ注意ス
ヘキヤヲ知ラシメシカ爲ナリ而シテ其
柄ハ即チ先ツ委審者ヲ撰定シ且ツ其給料
ヲ定メタル後次キニ委審者ノ其職ニ従事
スルニ先ツ法廷ニ於テ原被告ノ指定スヘキ
論点ハ何ゾニ付原被告ニ於テ取捨タル約
諾及ヒ契約ニ関シ計算ヲ調査スルノ基本
ヲ定ムルニアルナリ
何ゾノ決定ニ至リ且ツ存令状ノ発行ニ十
リタル上ハ計算人前記ノ日限ヨリノ計算

ヲ調査スルヲ始メ月時ニ法定ニテ他ノ審
問ヲ為スベキナリ然レ共審問ノ才一ノ
点ハ特ニ計算ニ要スルヲナルヘク即チ系
告ニ於テハ遵奉スベキト陳述ニ被告ニ於
テハ之レニ抗拒スル種々ノ清算及ヒ承諾
ノ効力ノ有無ヲ審問スルニアルナリ

明治十二年二月廿四日

東京裁判所

被告口供

明治十二年二月廿四日

被告象二郎代官人

被告

星

亨

口供

被告代官人申上候

一 演説書第三條中ニ被告代官人ノ論弁ヲ聞キ
ト有之候ハ該事柄ニ付論弁ノミヲ申上テ可
クシテ其論弁ヲ實ニスル為メ証拠モノヲ引
キ候テ相付ハサルテニハ哉得テ論弁及ヒ証
拠ハ共ニ申上ヒ意ニ以哉

判事

一 第三條論弁ノミニテハ承諾、如何ヲ判スル
ニ足ラサル分ハ証拠ヲ要ス

被告代理人申上候

一 演説書第二條并其事實ノ点ニ付テノ判決云々ハ控訴スヘカラスト有之ハ經今彼ノ計美人ノ計美カ誤謬アリテ其誤謬ヲ証スルニ十分ナル証拠アリト虽モ夫張控訴スルノ不相成證ニ候哉

判事

一 別匠指令ニ及フヘシ

被告代理人申上候

一 演説書第二條并其事實者ノ判定ハ云々法廳ノ判決ト同シキモノニシテ云々控訴スヘカラストアルハ其委審者ノ事實ニ付テノ判定ハ當座へ控訴スルノ不相成儀ニ候哉將夕

其判定ハ當裁判所ノ判定ト同シキモノトアルヲ見レハ一般ノ初証ノ判定、如ク其委審者ノ判定ハ上等裁判所へ控訴スルヲ得ん様ニ相見ヘハ付委審者ノ判定ハ上等裁判所へハ控訴ノ出来んモノニ有之候哉

判事

一 別匠指令ニ及フヘシ

右之通云々申上之由以上
明治十二年三月廿四日

星亨市

萬曆十九年

高島石炭坑濠業差止願之控訴一件
東京上等裁判所於三月審問原被告之供
申月四日分別裁奪後法廷申進催也

大隈大藏卿殿

司法省

一千八百七十九年二月四日東京上等裁判
所ニ於テ「ヂヤルヂンマテソン」商會ヨリ後

藤象二郎ニ對シタル審問

（「カークワード」氏ハ法律上ニ関スル并論答ヲ
差出シ「ヂワイソン」氏モ亦并論書ヲ差出セリ）

「カークワード」氏ハ「ホルム」氏ニ對シテ審査ヲ始
ム

足下ノ姓名ハ如何

余ハ長崎在留英國人「ライルホルム」ナリ

足下ハ昨年中高島炭坑社ノ管理人タリシヤ

然リ管理人タリ

右炭坑ノ所有者ハ何人ナルヤ

後藤象二郎ナリ

足下ハ何頃炭坑社ノ管理人トナリシヤ
一千八百七十八年六月ノ末ナリ

如何ナル手續ニテ足下ハ右管理人トナリシヤ
後藤象二郎氏ヨリ余ニ昏面ヲ送り右炭坑社ノ
事務ヲ担当ス可キ旨ヲ請ヘリ故ニ余ハ之ヲ兼
諾スルノ返昏ヲ送レリ

右昏面ハ後藤氏ヨリ請取りタルヤ

右昏面ハ即チ別紙(先)印ナリ

右昏面ハ何人ノ認メタルモノナルヤ足下之ヲ
知ルヤ

右ハ後藤氏ノ昏記「ウリエー」氏カ認メタルモノ
ナリ

別紙(先)印ハ足下ヨリ送りタル返昏ナルヤ

然リ

足下ハ右管理人トナリテ如何ナル職務ヲ擔當
セシヤ

余ハ坑主ニ属スル総理人ニシテ即チ一般ニ右
炭坑社ノ事務ヲ監理シ及ヒ右局ノ長ヲ任テ石

炭ノ賣込石炭運漕ノ為メ預敷ノ約定船積ニ付
テノ會計石炭掘出高及ヒ石炭液方金銀出納ノ

簿記ヲ検査シ并ニ坑主ノ需要ニ依テ時々計算
表ヲ製シ該社ノ營業會計ノ進歩ヲ明ニスルノ

職ニアレリ

足下亦上ノ如キ管理人タル上ハ成可ク文ヲ精
密ニ該坑會計ノ位置ヲ正認シ其出費ヲ報告ス
ルノ事務モ亦足下核算ノ一部タルヤ

然り

昨年六月是下カ管理人ノ命ヲ受ケタル時右炭坑ノ會計ハ右ノ

六月三十日迄テノ該社ノ負債及ヒ資財ノ言ヲ計美シタル表ニ依レハ殆ント四万四千圓ノ不足ヲ生セリ但シ右金言ノ内一千八百七十八年四月二日以後迄トトビザルギンマデソシニ商會ト右債ヒ重ル条約ニ從ヒ其時松期限トナリテ該商會へ不足ニ返サレタル右炭ノ代價ヲ算入セリ此右炭ノ代價ヲ除ケハ殆ント三万九千圓ノ不足ナリ

六月三十日後ニ至リ此不足ハ増カセシヤ又ハ減少セシヤ

右ハ八月ノ末ニ至リ凡ソ六万五千圓ノ高ニ増加シ九月ノ末ニ至テハ凡ソ六万八千圓ノ高ニ上レリ

右ノ外是下ハ後迄モノ依頼ヲ受ケ資財及ヒ負債ニ関スル計美表ヲ製シタルノアルヤ

然リ余ハ八月ノ末後迄モヨリ特別ノ求メヲ受ケ會計表ヲ製シテ之ヲ回キニ送レリ

是下ノ其寫ヲトビザルギンマデソシニ商會ニ送付セシヤ

然リ之ヲ送付セリ

是下ハ後迄モノ充分ナル承諾ヲ得テ右ノ寫ヲ送付セシヤ

然リ諸般ノ計美表ヲ送付スルキハ必ず後迄モ

司
法
書

ノ曰意ヲ得タリ

此記録ハ是下ヨリ「ジヤルゲンマテソシ」商會ハ
送付也ニ写ナルヤ

(此時此印ノ記録ヲ何人ニ見示ス)

然リ

此記録ハ負債ト資財ノ事ニ付テ如何ノ事ヲ見
ハスヤ

負債ニ属スヘキ總高ハ九万三千八百六十一圓
五十銭資財ニ属スル總高ハ二万七千九百三十
圓六十二銭ニシテ差引不足六万五千九百三十
圓八十八銭ナリ

俸給給与及ヒ炭坑ノ營業ノタメ其他ノ必要品
ニ付キ負債ノ高ハ如何

坑業ノ松金ニ関スル負債ノ高ハ六万二千六百
八十四圓七十二銭ナリ

土地ノ負債ノ高ハ幾許ナルヤ

一万六千二百圓ナリ

此負債ハ彼ノ四月取立ヒタル條約ニ因テ後迄
モヨリ「ジヤルゲンマテソシ」商會ニ払フヘキ石

炭ノ負債ヲ除キシモノナルヤ

然リ除キシモノナリ

「ジヤルゲンマテソシ」商會ハ「活スヘキ」石炭ノ分
量及ヒ總價ハ幾何ナルヤ

石炭五千八百六十噸ニシテ其價凡ソ二万六千
圓ナリ

此負債ハ炭坑買取金トシテ政府ヘ払フヘキ某

ノ金額ヲ除キタルモノナルヤ

右ハ八月中炭坑社ヨリ政府工宿免ヲ取ヒタル
五千圓ノ高ヲ算入セリ

右九千圓ノ金額ヲ払ヒタル後炭坑買取金ト
シテ政府へ払フヘキ金額アリシヤ

然リ炭坑社ヨリ送リタル金額ヲ差引テホ
四万二千圓ノ金額アリ是レ即チ一千八百七十

七年ノ割払金ニシテ一千八百七十七年ノ歳末
マテニ払フ可キ金額ナリ

是レハ政府工払フヘキ金額ハ負債中ニ算入
セシヤ又ハ算入セサルヤ

折ハ算入セス
翌年ノ割払金ハ何項政府へ払フヘクナルヤ

一千八百七十八年十二月ト推察ス

是下ハ炭坑社管理人ノ職務ヲ辞セシヤ

余ハ之ヲ辞セタリ

デニソシレモ曰ク彼告代之人ニ於テ承知スル所
ニ依レハ此ハ印ノ記録ハ全ク彼告ニ於テハ

所據セリキ

カークワードモ此ハ是レモシテ曰ク是下ハ此記
録ヲ報告ト論シタルヤ又ハ論セサリシヤ

余ハ後及モト論シタリ即チ此ハ印ノ記録ハ其
写ナリ

其時カ記録ハ後及モト手ニアリシヤ

余ハカノ記録ヲ後及モト持参シ而シテ曰ク
之ヲ全ク論議セリ

昨年八月三十一日ヨリ是下ノ辞破セシ時迄ノ
間ニ岩坑社会計ノ位置ニ改革ヲ为シタルイ
リシヤ
否右不足ハ余ノ辞破ノ時増カニタリト信用ス
ルナリ

是下ハ何頃辞破セシヤ

一千八百七十八年十一月二日ナリ

是下岩坑社会管理人在破中若岩坑ニ於テ紛争ヲ
生セシイナキヤ

一千八百七十八年七月ノ末若岩坑ニ於テ暴
動ヲ起シタルカ故ニ日本役負及ヒ欧人ハ身命
ヲ保護スルタメ強島ヲ脱シタリ

右暴動人ハ強島ニ在ル兵器及ヒ其他ノ財産ニ

損害ヲ加ヘタルヤ

莫大ノ損害ヲ加ヘタリ即チ其金額ハ五千回乃
至六千回ニ下ラス

坑掌停止ノタメ券ハ所ノ損失モ右金額ノ内

ニ含ムヤ又ハ右金額ハ全ク暴動人ニ於テ加ヘ

タル目録ノ損害ニ止コルヤ

右ハ暴動人ニ於テ加ヘタル損害ノミヲ云ヘリ

何等ナル原因ヲ以テ此ノ如キ暴挙ヲ起セシヤ

是下ノ意見如何

(此時彼等代々ハ右ハ全ク風聞ニ出ルイニ

テ実修此ノ如キ事ナリ福人自己ノ思惑ヲ申

立ル旨并駁セリ)

余思フニ右紛争ハ全ク右島ニ於テ俸給及ヒ私

此時判事ハ
問答ヲ許セ
リ

在法方面當ナラサルヨリ起レリ

是下ノ管理中其炭坑会計ノ位置ヲ補フタメフ
ヤルゲン、マテソニ商会工金子差入ノ為メ切
ヲ為レタルヤ

余ハ之ヲ為セリ

是下ハ後為セノ依頼ト同クノ承知ヲ以テ此ノ
如キ切取ヲ為レタルヤ

後及ノ依頼ヲ以テシテ猶ホ余ヨリモ懇切ヲ添ヘ
タリ

昨年ハ月中長崎ニ於テ「ジャルビン、マテソニ商
会」ノ代理人ハ何人ナリシヤ

「ロヘルトソニ」トナリ

(此時電報ヲ初メニ示ス)

此電報ハ是下ノ依頼ヲ受ケ「ロベルトソニ」ト
モテヨリ「ジャルビン、マテソニ」商会ニ送リタル
モノナルヤ

然リ

是下ハ其後電報ヲ送リタルトナキヤ

余ハ其後後為セノ依頼ヲ受ケテ屢々電報ヲ送
リタルトナリ

(此時「デニソニ」トモテ電報ヲ差出セシ上ニマテ
サレハ右ニ関スル問答ヲ為シ雖キ者申立タ
リ)

(此時尚モ「右問答」ヲ許セリ)
「カークワード」トモテ曰ク余ハ此電報ヲ差出シ
欲ス)

此系又寫ト云フ字
上ヨリ流ニ難し高
考フ可シ

デニソンレモ曰ク「ロバート」モ右「ロバート」
人ヨリ該商會ニ送りタル電報ヲ証トシテ差
出シタル「ロバート」モ右「ロバート」
ニモハ当時該商會ノ代人ニシテ殊ニ電報ノ寫
シハ証トスルヲ得サルヲ以テナリ
「ロバート」モ右「ロバート」モ右「ロバート」
カークウードレモ曰ク此電報ヲ送りタル時「ホル
ム」氏ハ後モ右ノ管理人タリ電報ハ「ホルム」氏ノ
依頼ヲ受テ「ロバート」モ右「ロバート」
「ホルム」氏ハ右電報中ニ詳細ニ依頼ノ事ヲ記載
シアル「ロバート」モ右「ロバート」モ右「ロバート」
右電報ヲ送りタルハ原告ノ代人トシテ送りタ
ルニアラス即チ電報ノ送主人タル「ホルム」氏ノ
代人トシテ送りタルモノナリ

「ロバート」モ右「ロバート」モ右「ロバート」
ソレモ右「ロバート」モ右「ロバート」
得可シ然レモ「ロバート」モ右「ロバート」
ヲ得可カラス但令ヒ據ヒテ立ツルモ此証ノ
証ト為ス可カラサルナリ
(此時「ロバート」モ右「ロバート」
セリ但シ「ロバート」モ右「ロバート」
是下ハ後モ右「ロバート」モ右「ロバート」
八月三十一日ノ記録ヲ送りタル「ロバート」モ右「ロバート」
同モ右「ロバート」モ右「ロバート」
リシヤ
余ハ「ロバート」モ右「ロバート」モ右「ロバート」
送りタリ此「ロバート」モ右「ロバート」

リ
ル目的ヲ以テ之ヲ送リタルヤ
但クハ「ジャルダン」マセソシ「商会」ヲシテ資本ヲ
給スル必要ナルヲ知ラシメンカ为メト思ヘ
リ

「デニソシ」モ曰ク余ハ判事ニ於テ依テ此ボノ記
録ハ「ジャルダン」ヲソシ「商会」ノ炭坑代タル爲
係リタル後々ニ作りタル「ニ」注意マラシム
ヲ考フ

「カークウード」モ「デニソシ」モニ於テ右記録
ノ儀ヲ申立ルト爾モ「別事」ナルヲ以テ爰
ニ申立ルニ及ハサル旨年駁シタリ
（此時裁判所ニ於テハ被告代理人ニ向ヒ述テ

申立ツ可キ者ヲ許セリ）

「デニソシ」モ曰ク後差象ニ即ニ属スル「坑業」及ヒ
會計上ノ「ニ」付キ余ハ一千八百七十八年二月
以來ノ「坑業」及ヒ會計ニ関スル「問」ニ「板端」ス
「カークウード」モ曰ク余カ此「問」ヲナスノ目的ハ
全ク「後差」モ「負債」ヲ「償」フヲ得ヘカラサル艱難
ノ「景況」ヲ「証明」ス及ヒ「有益」ニ「坑業」ヲ「営」ム「能」ハ
サルト「後差」ヲ「原」先ノ「利益」ノ「危」キ「位置」ニ及ヒタル
「ト」ヲ「証明」セシカ「タメ」ナリ但シ「右」ノ「諸件」ハ余
ニ於テ「緊要」ノ「ト」ト思ヘリ且ツ「右」ノ「所」ニ於テハ
已ニ余カ此「所」ノ「為」メ「ケ」ス「井」ツク「モ」シ「若」シ
「何」件ニ付テ「問」ヲ「起」ス可キカ「否」ヲ「決」定セシ「時」天
「張」力「同」様「ノ」「ト」ヲ「述」ヘ「タリ」

係セサル債主ノ請求ヲ受ケタルヨリ 遂ニ曰キ
ハお場代價ヨリ其夕低價ヲ以テ石炭ヲ賣出ハ
サル可カラサル協合ニ立至リタリ
現金ノ要用ニ迫リ石炭ヲ賣出ニタル一割アラ
ハヒフ之ヲ余ニ示セ

然リ九月ノ初旬ニ於テ支那人ホシグモニ賣出
ヲナシ曰クヨリを二万回ヲ受取リ二ヶ月ノ内
ニ此石炭ヲ引渡スト云而シテ名を額ニハ一
割二分ノ利足ヲかへタリ其石炭代價ハお場ヨ
リ廉價ナリキ
次回ノ房間ハ本月三日及ヒ八日午お九時三十
分ト定メタリ

被告代人

デニソン

原告代人

カークワード

エル、ホルム

明治十二年二月四日

一 原告代官のホーローニ對シ証據を

ヲ提出ス

原告代官のホーローニ對シ証據を提出ス

同ノ片

デニソシ之ヲ能難ス而シテ被告ノ之ヲ

可トス

原告代官のホーローニ對シ証據を提出ス

控訴ヲナス片

デニソシ曰

一 換電報ハ「ゲアーデン」ヘ「ロバートソシ」ヨリ出シタルモノナレバ換件ノ証據トナスヲ得ス云々

原告代言人曰

電報ヲ送リ出シタルハ「ロベルトソン」
レ「モート」ノ頼ニ依テ送リ出シタルニ
ノナレハ云々

デニソン曰

「決」証人ハ電報ニ付テ「折」ハ出来
カラン後「折」言フナスモ「証」トナラス

「お」事原告代言人ニ對シ

「デ」ニソンノ「証」ニ異論ナキヤ

原告代言人曰

「お」事代言人曰

「お」事代言人曰

「証」トシテ「出」ス可シ

同日午後

原告代言人「証」調ヲ取ル

デニソン曰

「會」計ノ「全」ク「取」ルニ「引」受
ケタル後「引」受ニ「難」ス

原告代言人曰

原告代言人カ「証」調ハ「後」カ「全」ク
「偽」リタル有様「并」テ「山」ノ「業」
ヲ「遂」ケサル為メ又原告ノ「利」益ヲ「破」
ル「ト」ス「事」ヲ「証」明ス云々

ある日

「証」人ヲ「送」リ「出」ス

原告代言人カ「炭」礦「將」来ノ「考」ヲ「証

司法省

極くニ問フニ付

デニソニ曰

一 只今有る実ノ一ノニ問フヘキ極記

難ス

一 原考代言ノ曰

一 誤記極くホームハ後後ノ支配ノヤリニ

依此ノヲ條ヲお説明スヘキノヤリ若シ

不道一者ト認ムルハヤ和名之ヲ

差止メラルベシ

一 おる曰

一 誤問ヲ止ム可シ

一 原考代言ノカ誤石炭礦ヲ支配スル考

ヲ極極ノニ問フニ付

一 デニソニ之ヲ記難ス

一 為事曰

一 宜志ノ問ハ止ム可シ

分七万九千五百

高島石炭坑一件之月原告人等東京
裁判所に出候換炭礦極略を認り
申進候也

明治五年三月三日

大森司法

大森大森御殿

東京裁判所審問
二月一日口供ノ要キ

シヤルゲン、マゼソン會社ヨリ後及象二郎
ニ係ル事件

高島炭坑ニ関スル概略ノ續キ
一千八百七十四年中後及氏ハ原告ニ對シ
余ハ日本政府ト高島炭坑ニ付キ無限借
區、契約ヲ為リ而シテ其買價ヲ改
府へ償却スルニハ各大ノ金ヲ要ス故ニ
若シ是下等ニ於テ此ノ金ヲ交付ス
ルハ余ハ是下等ヲ該炭坑稼業方
並ニ石炭土賣却方ノ代理ニ任シ其稼
業ヨリ生シタル物産及ヒ利得ヲ
以テ交付サレタル金ヲ償却ス
ルヲ保証ス原告ハ此約諾ニ信

レ被告ニ對シ其要旨ナル前金ヲ交付
スルコトヲ約シ之ヲ執行シタリ一千八
百七十四年十一月廿八日ニ於テ十萬弗
ノ金額ヲ証券ヲ以テ之ヲ被告ニ交
付シタリ蓋シ此証券ハ日本大藏
省ヨリ送ラレタルモノニシテ原告ニ
於テ正ニ其正金ヲ納メタリ其請取
証書ハ該省ヨリ炭坑買價ノ一部候
却トシテ原告ニ送サレタリ

一千八百七十四年十二月中原告ハ地方
官ノ面命ニ於テ被告ヨリ該炭坑總
代理ノ任ヲ受ケタリ尔後原告ハ被告
ハ被告ノ方ノ代理トシテ該炭坑ノ稼

業ニ從事セリ

一千八百七十五年一月十七日ニ於テ
被告ハ原告ニ送スヘキ金額ノ内ヨリ
炭坑買價ノ一部トシテ大藏省ニ
五萬弗又同年同月廿三日ニ於テ五萬
弗ノ金額ヲ輸納シタリ一千八百七
十五年七月付真正契約書ニ未タ
施行セサル中ニ被告ハ該炭坑ノ稼
業及ヒ原告ヲ其代理ニ任シ以テ原
告ノ交付シタル前金ヲ償却スル
ヲ保證セント為シタリ(此事ハ余カ
ラ證書類ヲ以テ証スヘシ)法廷ハ當
時被告カ元老院ノ長タリレ

注意セラルベキ一ハ實ニ緊要ナル一
ト信ス

一千八百七十五年三月中原告ハ被告
ヨリ炭礦買價ノ一部タル二十四万弗
ノ金額ヲ政府へ輸納スルノ依頼ヲ
受ケタリ而シテ原告ハ其意ヲ信
シ該金額ヲ原告自己ノ證券ヲ以テ
之レヲ払ヒタリ然レ氏此証券ハ印
度倫頓及ヒ支那ノ官許商業銀
行へ差出スモノナレハ之ヲ政府ノ為
ニ正金ニ替へ其筋ハ払ヒタリコノ
交付タルヤ原告ニ於テ被告ハ当時官
途ノ要路ヲ占ムルモノナルカ故ニ此

常ノ信用ヲ措キタレハナリ若シ否
ラサレハ決シテ該存金ヲ交付セシニア
ラス
其後稍久シテ原告ハ炭礦ノ買價ハ
左ノ如ク輸納スヘキモノナル一ノ報知
ヲ得タリ
最初二十万円ノ割金ヲ出シ残金ニ年六
朱ノ利子ヲ添へ左ノ如ク輸納スヘキモノ
ナリ
一千八百七十五年三月 六万五千円
一千八百七十二年三月 六万五千円
一千八百七十七年三月 六万五千円
一千八百七十八年三月 六万五千円

一千八百七十九年三月

六万五千円

一千八百八十年三月

六万五千円

一千八百八十一年三月

四万五千四七钱

原告ハ已ニ被告ヘ証券ヲ以テ交付シタルニ
 十四万弗ノ金額ハ被告ハ之ヲ炭礦買
 價トシテ輸納セシメテ前ニ政府ヨリ借
 受ケタル自己ノ負債ヲ償却セシトノ
 一ヲ登見セリコレ則チ被告ノ原告ニ
 對シ詐欺ヲ行フタル一ナリ
 余ノ既ニ陳述セシメ如キ方法ニテ原告ノ
 交付シタル金額ヲ正ニ償却スルヲ保証
 スルノ契約ヲ固定センカ為メ被告ハ原告
 ニ對シ炭礦買價賦還証券ト他ノ二道

ノ証券ヲ返セリ其一ハ被告カ七十六万八千
 弗ノ負債ヲ承諾シタル即チ一千八百七十五
 年七月一日付ノ証券ニシテ他ノ一ハ被告
 カ契約セシ如ク現金額ヲ償却スルヲ保証
 シタル証券ナリ

尔後原告ハ引續キ公然炭礦管理且ツ代理
 ノ任ヲ勉メ且ツ原告ハ管理者及ヒ代理者ト
 シテ該炭礦ノ稼業ヲ獨權ヲ以テ擔當シ
 同所ヨリ生産スル石炭ヲ賣却シ總ニ費用
 ナル入費ヲ払ヒ石炭ニ関スル費用ナル金
 ラ払フ如之ルニ条約面、如ク被告、乃ノ
 ニ該礦ノ費用ナル器械ヲ設置セリ
 一千八百七十五年二月中原告ハ被告ノ依頼

ヨリ六万五千円 金額ヲ原告自己、証
券ヲ以テ炭礦買價、手紙ヲ大藏省へ
輸納シタリ其請取省ハ該炭礦管理者
身ノ代理者トシテ該省ヨリ受取タリ此輸納
前即チ一千八百七十五年八月中被告、原告
ニ對シ政府カ炭礦買價賦還、猶豫ラズ
ヘテレタルニ付、該炭礦買價賦還證書
ニ裏書きセラル、カ故ニ該證書ヲ要スト云フ
原告ハ此言ヲ信シ且、被告カ直チニ之ヲ返
却ストノ約束ニヨリ、該證書ヲ被告へ返
却リ、其後原告、於テ該證書、返却ラ
請求セシメ被告ハ一ツ、證書ヲ出タレ
此レハ該證書、裏書きナリト云言シ之ヲ

原告、返シタリ然レ氏被告ハ其後一
百七十六年三月中既ニ原告トシテ返
却セシ該證書ハ其実原告ニアラスモ其
寫ナリ其原告ハ大藏省ヨリ被告ノ負
債五十万圓及七廿利子四千。八十圓六
十錢ニ付、返濟方ヲ強迫セラル、カ故
ニソノ返濟ヲ保証センカ为メ証款省ノ
原告ヲ該省へ檢当ニ差入レタリト始メテ
白状セリ該二額ノ十萬圓ト四千。八十圓
六十錢ノ金額ハ被告ノ達テノ依頼トお
テ、該檢当退助並ニ高屋長祥ニ於テ被告
カ必ス原告ト被告トハ契約ヲ正実ニ履
行スベキ旨ヲ保証シタル証省トニ依リテ

原告ハ直ニ之ヲ大藏省へ納納シタルナリ
此時該省ヨリ原告ノ納納ニ易ルニ廣山
買價賦還証各ノ原告ヲ原告へ返サレタリ
右板垣退助ハ一千八百七十一年中正院ノ要
請ニ在リタリ原告ノ該金額ヲ政府へ納納
シタルハ全ク原告自己ノ利益ヲ保護セシ
カ为メ餘儀ナクナリモナリ現今ノ右様
ニ依レバ原告ハ被告カ此悪果ニ付キ至当ノ
四討ヲ免カルハ原告ノ本意ニアラス
其際原告ハ又六千弗程ノ金額ヲ被告へ
交附シタリ也トナレバ被告カ言及ル
隣島及ハ江ノ島沖ノ島及ヒ香燒ニ
在ル岩坑線業ノ免状ヲ典シタルニ付

金額ヲ要アリト云ハナリ該免状ヲ得ルニ付
ナ板垣及ヒ其代ノ者之ヲ保証アリトモ其保
証スルノ義務ハ更ニ履行セラレス原告ノ
意ニ依レバ其交附シタル金額ハ被告之ヲ
他事ニ用ヒテ交付シタル目的ノ該免状ヲ
得ナリシナリ
被告ハ於テ全ク貧窮ニ迫リシカ故ニ原告ハ
被告ノ債主ノ請求ニ應シ於テハ金額ヲ消
費セシノミナラス其ノ亦原告ハ毎月千弗
ノ給養金ヲ被告へ附与シタリ第一ニ附與シ
タル日ハ一千八百七十六年三月ニシテ同
年三月初ノ三ヶ月分三千弗ノ金額ヲ附与シ
タリ

一千八百七十二年二月廿五日
高島ヲ要スルノ付原告之ヲ購求セシト欲セシ
ナレ氏原告ハ嘗テ被告ニ信ヲ置タレハ當時
信用ニ疑ラ答ルハ時ナレハ被告ニ對シ尚其
保証ヲ請求シテ然レニ被告ハ此請求ニ應
レ原告ト或ル契約ヲ為ヤリ此契約ヲ於テ
被告ハ原告ノ該炭坑移業ノタメ既ニ運
務シ且ツ購求シタレモ器械式ハ爾後運輸
シ且ツ購求スル器械ニ付キ原告ハ高島具
他ノ炭坑ノ移業ヲ指揮シ且ツ該炭坑ヨリ
生スル石炭ヲ賣却スルノ代理トアリタリ而シテ
且運務シ且ツ購求シタレハ此ノ器械ノ原
者ノ不カク如ナレハ時日及ヒ方法ノ如何ヲ

○出入スルモ自由
ナレバ故ニ泉
外ニ
告ハ該炭坑内

論セス原告ノ至當ト認ムルハ該器械ヲ
山内外ニ出テ為スハ勝手タレヘキモノナリト
約諾ス其後杉原退助氏ノ議定シテ原告ト
被告兼ニ其保証人トノ間ニ取結ヒタル
同日有ノ契約書ニ依リ被告ハ裁判上ノ直
者ナレ後主等及ヒ此處ヲ以テ被告ヲ脅
迫セシ後主等ニ對シ既ニ原告ニ拂ヒタ
リ二万二千弗ノ負債高ク修却シ或ハ之
ヲ保証シタル該契約書ニ於テ當時被告
ノ負債金額ハ九十八万九百十四弗ニ十
五セントニシテ原告ノ該炭坑ニ関スル權利
ヲ確保シ而シテ該負債ノ金額ヲ其請求
ニ應シ返却スルニシテ約諾スル此契約ハ

永間ノ熟議ヲ經テ調整セシモノナレハ當
應ニ於テモ此等ノハ被告及ヒ其保証人ニ
於テ奉スヘキモノニアラスト信スル能ハサ
ルヘシ何トナレハ被告ニ於テ該負債ヲ承諾
スレバテリノ一千八百七十五年七月白ラ契
約書ヲ保証シタシ保証人ノ壹人ハ當時日
本子都者ノ要路ヲ占メ高島炭坑ヲ熟議
セシ者井正澄氏ナリ如何トナレハ白氏ハ
一千八百七十四年十二月申該省ノ大輔山
尾氏ト共ニ該炭坑ヲ被告ニ引渡シ付キ
同所ニ行キ熟議之サレタレハナリ一千八百
七十六年七月申該炭坑ニ大災アリテ事
件ハ被告ヨリ直クニ之ヲ政府ニ報知セ

リ而シテ當時在日本帝國會社ノ頭取ガ
スウ井ツク氏ハ屢ニ都者ノ官吏ニ面会シ
該炭坑再興ノ方法及ヒ之ヲ施スニ際シ被
告ヲシテ金田ヲ得セシムル根拠ヲ訪話シタ
リ當時被告ハ全ク該負債ヲ償還シ能ハサ
ルノミナラス日用ノ物品ヲモ購取スル能
ハカニ置居候ニアリシ
該面會ハ被告ノ急迫ナル依頼ヨリナレ
タルモノナレハ被告ハ能ク之ヲ了解セシナリ
ケスウ井ツク氏ハ政府ノ礦山採掘師ト共ニ
高島ニ回伴シ其所ニテ白氏ハ該炭坑師
及ヒ被告ト大契約ノ該炭坑ニ関シ其再興
ノ至當ナル方法ニ付キ相談セシニ遂ニ水

ラ以テ炭炭ラ汎濫スルニ決テ然レ此方
法ヲ施シテ炭炭ヲ掃除シ以テ其稼業ヲ再
興セレシ付格外ノ費用ヲ要スル被告ハ既
ニ原告ニ交渉セシ如ク當的ハ全ク金同月
信用ヲ有セザリシカ故ニ原告ハ被告ハ依
ニ依リ該方法ヲ以テ其業ヲ擔當シ且條
約面ノ如ク原告自己ノ金ヲ以テ費用ナ
ルニ号械ヲ購求スル如ク斯レ炭炭ノ稼業
ヲ全ク再興スルノ期ニ至ル迄ハ格外ノ金
額ヲ消費スル其全ク再興スルノ期ニ至リ夕
ルハ一千八百七十七年十一月頃ナリ該炭
礦大興ノ際礦主ヲ減スルヲ要スルニ至リ
タリ當時該炭礦大興ノ際礦主ヲ代理

人ホカ礮山ニ費用ナル物品及ヒ入費ヲ払フタメ
ニ委託サレタル金同月内一万二千五百円余ノ金
額ヲ不當ニ消費セシテ露見セリ加之該代
理人等ハ強ント七千円程ノ金額ヲ被告ノ私
用ニ供セシカ故ニ此亦負債トナリタリ被告ハ
炭礦ニ関スル諸拂ノ滞ラ償ハシカカメ代
理人ト共ニ石炭引渡所及ヒ稼業方ノ保
証ヲ以テ高島并ニ長崎在住ノ人ヨリ七千
円程ノ金額ヲ借受テ其際被告ニ於テ此
負債ノ惣計二万四千元ノ金額ヲ皆済セン
カカメ原告ヨリ該金額ヲ交付セラレシ
ラ依頼セシニ付キ原告ハ此依頼ニ應シ之
ヲ交付セリ

同法

一千八百七十七年二月中 被告ノ依頼ニ
因リ特別ノ処分ヲ以テ大藏省ハ被告カ一千
八百七十六年十二月中之輸納スヘキ炭礦
買價ノ一部タル六万五千円ニ付該省ハ
豫ラ受ケ遂ニ原告ハ炭礦代理人トシテ
証券ヲ以テ該金額ヲ輸納シタリ 此証券
ハ種々ノ日附アリテ之ラ正金ニ替フル日
限ハ一ヶ年余ニシテ一千八百七十八年八
月ニ終ルモノナリ 該証券ノ金額ハ六十七
万四千円八十拜六十セントニシテ其払方ハ
原告ヨリ直クニ之ヲ政府ハ輸納セシモノ
アリ又ハ被告ノ手ヲ經テ之ヲ輸納シタリ
モノアリ 然レモ被告ニ於テハ未タ其一部

分タリ此之ヲ原告ニ償還セサルナリ
一千八百七十五年七月 自英ノ約書ニ記載
ノ金額六十七万四千円八十拜六十セント
及ヒ三十一万五千拜ノ外ニ原告ハ尚ホ炭
礦ノ方メ且ツ他ノ債主ノ急迫ナル請求高シ
償還^却センカ爲メ格外ノ金額ヲ被告ハ償還
セシノミナラス亦一万四千円程ノ給付金
ヲ附子レタリ
該炭礦ノ大罟及ヒ水ノ汎濫ニ由リ其稼業
中止ノ間ハ原告ニ於テ該炭礦ノ関スル炭
又兼シ諸雇人ヲ給養スル且又一千八百
七十七年九月高島ヲ於テコレラレ病院
行セシ際原告ハ病者ヲ補助セシノミナラ

不格外ノ金額ヲ消費シ且ツ自ラ炭礦ノ
稼息集并ニ保護ニ関スル一切ノ利財ヲ獲
当シ而シテ又該炭礦中ニ新坑ヲ作り
以テ該炭礦ノ事業ヲ尚ホ盛大ニシリ如
何トナレハ後年ノ掘出スル石炭ハ日々三百
噸ヨリ三百五十噸ノ如ク新坑ヲ作りテ以
来日々六百噸ヨリ八百噸ヲ掘出スル至
リタレハナリ然レモ現今テハ日々二百噸ヨリ
三百噸迄ノ出產ナリ

原告ノ厚意ヲ附セシ被告ノ書翰ハ余ニ於テ
後ニ提供スレシ如此書翰并ニ原告ヨリ被
告ニ送りタル書翰ヲ一読スレハ原告カ被告
ノ債主ニ對シ被告ヲ救助セシ一ハ實ニ明

瞭ナリ

一千八百七十五年中ハ炭礦ノ事業
ヲ盛大ニ為スニ莫大ノ金額ヲ消費セシ
カ故ニ生産ノ石炭ハ漸ク此入費ヲ償
フニ充テタリ一千八百七十六年ニ至
リ始メテ其利益ヲ得タリ而レテ如斯
有様ニテ大災洪水、時迄連續キ然
ル也一千八百七十七年十二月ニ於テ該
炭礦ノ稼息ヲ再興スルニ存キ又一層ノ
利益ヲ獲シ此利益ヲ以テ被告ノ負債
ヲ償還スルニ足ルノ景況ヲ現出セリ
一千八百七十八年二月中被告カ詐欺奸
謀ハ比類ナキ度ニ至リタリ此鄙考ナル而

為タルヤ被告ノ固ヨリ企ツ所ニシテ之ヲ
實際ニ登セサルハ唯炭礦稼業ノ再興ヲ
待ツテ後テ之ヲ施スノ旨意ナルハ今日
ニ於テ明白ナリ被告ハ政府へ金額ヲ償
還センカ為メ同年一月中原告ヨリ三万二
千五百弗ヲ借リ又他ノ債主へ負債ヲ払
ハシカ為メ六千円ヲ借リタルカ故ニ被
告ハ屢々原告ニ對シ此厚意ヲ謝セリ然
レ氏終ニ二月ニ至リ被告ハ原告ニ於テ正實ニ
計美ヲ為サリシト托言シ(其實原告ハ
常ニ被告ノ指揮ニ應ジ止レク計美ヲ為
ラ海セリ)事韜ヲ以テ原告ノ炭礦代
理ノ任ヲ解除スリト報シ而シテ被告ハ自

ラ竊カニ長壽へ出張アリ
被告ノ長壽ニ到達スルヤ炭坑本社ニ
在勤セシ原告會社ノ代理者ニ對シ
爾後被告自巳・炭礦ノ事務ヲ管
理スト通知シ又長壽及ヒ高島ニ在
ル日本籍・外國雇人ハ其職務カラ考
ス・先々被告ノ命ヲ奉シ後ケ其後ニ
從事スヘシト通告セリ而シテ今被告ハ實
際該事ヲ管理シテ全ク原告ノ炭礦以官
理及ヒ石炭賣却ノ代理タル職務ヲ解
除セリ故ニ原告ハ被告ノ此所為ニ付キ其
利益ヲ保護センカ為メ昨年二月十八
日ニ被告ニ對シ訴狀ヲ以テ當法廷ニ

出訴ヤリ原告ハ該訴状中ニ餘儀ナク出
訴シタル原因ノ事實ヲ畧記セシ上當法
廷ハ被告ニ命シ負債ノ金額ヲ原告ニ償
還シ且ツ原被告ノ間ニ取結ヒタル炭礦
管理并ニ代理ニ関スル契約ヲ實踐セ
シムル様懇願シタリ
原告ハ又同月ニ當法廷へ禁諭令發行ノ
願書ヲ呈シ以テ被告ニ於テ石炭ヲ採
却シ炭礦ヲ二分シ且ツ既ニ出訴シタ
ル本訴審問中曾テ取結ヒシ契約ニ及
シタル才法ヲ炭礦ニ関涉セシメサル
様出願ヤリ
昨年二月廿日ニ當法廷ハ該出願ノ案

禁示

諭令發行セサル者申セラレシカ故ニ原告
ハ同日直ニ該命令ヲ付キ上等裁判所
へ控訴ヤリ
昨年二月廿二日ニ於テ上等裁判所
禁諭令發行セサル者ヲ命シ而シテ當
廳ノ命令ヲ固定シタリ
昨年二月廿三日ニ原告ハ本々上等裁判所
ノ命令ニ服タス大審院ニ上告セシ処候
院ニテハ昨年三月十五日ニ於テ當法廷
ノ命令ハ正式ノモノニアラサルカ故ニ原告
ハ再ニ當法廷ノ正式ノ命令ヲ受クヘシ
ト判決セラレタリ
昨年三月八日ニ於テ原告ハ一千八百七

十六年六月附ノ契約昏ヲ以テ被告カ原
告ト有結ヒタル契約ヲ正実ニ履行スル
ヲ保証セシノミナラス各自及ヒ一統ニテ
被告ノ負擔ヲ償還スト約諾セシ保証人
等ニ對シ訴訟ヲ起セリ

該二件出訴中原告ハ昨年四月二日於テ該保
証人允諾ノ上被告ト原告ノ権理ニ妨害ナ
キ一ツハ契約ヲ結ヒタリ此契約ニ依リ原告
ハ被告ニ於テ毎日百二十噸ノ石炭カ或ハ其
代價ヲ原告ヘ送り且ツ六ヶ月内ニ計美
谷面ノ金額二十万弗ヲ償還スルナラハ
已ニ出訴シタル該二件ヲ終下クヘシト契
約セリ

昨年三月廿九日ニ原告ハ被告及ニ該保証
人ノ急迫ノ依頼ニ因リ該二件ノ願下ヲ
当法廷ニ之ヒタリ然ル処尙四月四日ニ於
テ原告ハ被告人等ノ屢ノ依頼及ヒ
該契約ヲ実踐スルトノ約諾ニ依リ被
告ニ對スル原告ノ権理ヲ害スルイナリ
遂ニ該二件ヲ願下タリ

昨年四月八日ニ被告ハ原告ト一時ノ契
約ヲ取結ヒタリ此契約ニ依リ原告ハ該
炭礦ヨリ生産スル石炭賣却ニ付キ國外
ノ代理者ナレトモ長壽ニナル原告會社
ノ代理者カ炭礦管理并ニ石炭賣却
方ニ關シ被告ノ代理ヲ保助忠告スル

心故ニ原告ハ日本ニテ賣却セラル、石
炭ニ付キ其口義ヲ領収スベキナリ
被告ハ尚ホ原告会社ノ一人ナルゴヨソ
ン氏ト左ノ如ク契約セリ被告ハ已ニ
取結ヒタル一時ノ契約ヲ無期ノ契約ニ
為シ而シテ原告間ノ計算ヲ調査ス
ルニ付キ六月中横濱ニ於テゴヨソ
ン氏ニ面會スヘシ該契約ニ因リゴヨソ
ン氏ハ昨六月上旬上海ヨリ長崎ヘ到着
シ日処ニテ被告ニ面會セシニ被告ノ次ノ
蒸氣船ニテ日処ヲ出航スルトノ約束
ニ依リ被告ニ先チ横濱ニ来レリ然レ
ルニ被告ハ此約ニ違ヒ吉田正春氏ヲ代理

者トシテ横濱ヘ送レリ○契約決定ノ
旨趣評議中ゴヨソン氏ヨリ後藤氏
ノ代理者ニ對シ計算違入ヲ採用シ
長崎ヨリ持参シタル原被告間ノ計
算ヲ之ヲ調査セシムルニ付キ屢屢
談判シタリト雖も遂ニ其効ヲ果サ
ズリシナリ當時長崎ニテ被告ノ理
財ハ種々ノ原因アリテ尤モ不十分ノ
地位ニ至リタリ其一ニテ奉レハ即チ四
月二日ノ契約ニ因リ原告ニ對シ負債
ノ償還他ノ債主ニ對シ負債ノ償還
及ヒ礦夫ノ強動ニテ稼業ニ関係セ
シ等是ナリ又氏有様ニ至リシカ故ニ

被告ハ七月示後契約ノ如ク石炭ヲ原
告へ渡スルハサリ
月二日或ハ其前ニ必ス償還スヘト契約
エタルニ十方井ノ金額ヲモ償却セサリ
エナリ

被告ハ原告ヨリ訴訟ヲ起スト骨迫サレ
ニ因リ遂ニ長考ヲ出立去ル十月
十日横濱へ到着セリ原告ハ被告ト
夜事ヲ商議スルノ後此商議ハ到
底無益ノモノナレハ満足ナル結果ニ至
ラス且ツ被告ノ有様モ又タ到底無
望ニ属スルモノナリト認見エタルカ故
ニ倅儀ナク再ヒ被告ニ對テ訴訟ヲ起

スニ決定ニ遂ニ昨十一月一日ニ於テ該件
ノ訴訟ヲ出タシタリ

原告ノ訴訟ニ對スル答弁唇中ニ被
告ハ原告人ニ於テ淨算ヲ被告へ渡サ
ハルト云フト然モ其実大ニ事實ニ及ス
ルハトナレハ原告ハ一千八百七十七年
九月三十日迄ノ計算ヲ同年九月中
被告へ送り而シテ又其前屢々計算
ヲ送りタリ後日余カ呈スヘキ唇翰ニ
依レバ原告ノ計算ニ付被告ノ依頼ニ
應エタル計算ニ一千八百七十七年九月
中原告ノ唇翰ヲ以テ被告ニ對テ一ツノ計
算人ヲ雇ヒ之ニ計算ノ詳細ナル点ヲ

調査せしむルイコヲ依頼せしハ判然ナル
ヘシ被告ニ於テ決件ヲ延延セシカ为メ
計算ノ調査ヲ拒ミタルハ是又判然タ
ルイナリ

決若弁音中被告ニ於テ原告ハ被告ヨ
リ百六十万四程ノ價アル三十一万四千
ノ石炭ヲ交取シカ故ニ現今請求スル
金額ハ既ニ決金額ヲ以テ償フニ足レ
リト云フト虽モ余ノ信スル処ニ由レハ
此陳述ハ全ク妄言ニシテ正実ノモノニ
アラサルナリ被告モ能ク了知スル如ク炭
礦ヲ掘出シタル石炭ハ盡ク原告ノ
費用ヲ以テ掘出シタルモノニシテ此費

用ハ貸与セシ金額ノ計算中ニ記入シ
タルモノニシテラモシラ稼業入費ノ計算
各中ニ記載アリ此計算各ハ出産シタ
ル石炭ノ總代償^價ヲ記載スルモノナ
リ

原告本人余ニ教示ス若シ被告ニ於テ
原告ハ被告ト取結ヒタル契約ニ度リ
不正ノ金月ヲ取立タルト愁訴スル片
ハ原告本人ハ被告ノ被約ニタル後
カ或ハ其前被告代理者ニ井ツトール
氏ヨリ決然訴ノ事ヲ聞而シテ決取
立金ニ付キ被告ノ尋問ニ對シ若弁ス
ヘク希望セシナレモ更ニ尋問ノ尋問ニ

ナカリニト陳述スヘシト云ヘリ
如此事情ニ由リ余ハ当法廷ニ對シ曾テ
願フ処ノ補助即チ被告ヲシテ法廷
ノ至当ト認定シタル負債ノ金額ヲ
償還シ且ツ契約ヲ実践シ而シテ之ヲ
破約セシメサル様下命アルハ原告ニ於テ
受クヘキ權ヲ有スルモノナリト具陳
ス
当法廷ニ於テ禁詢令ヲ發行セサリシ
カ故ニ被告ハ依然礦山ノ稼業ニ從事
ニ原告ニ於テ自己ノ所有物ト稱スル
械ヲ使田原原告ヲ經ス他ノ代理者ヲ
以テ石炭ヲ賣却シ而シテ被告ノ有

益ノ所有物ハ唯礦山ノ一物ノミナルニ被告
ハ其害徳ノ損害スルノ地位ニ至リタリ如
此事情ナレバ禁詢令發行願審問中昨
十一月五日六日ノ兩日ニ於テ原告カ既ニ
強テ主張シタル點ヲ尚又茲ニ強陳ス是
即チ本訴審理中法廷ハ原告ノ利益ニ関
涉シ之レヲ保護スルハ其職任ニシテ及令
法廷ニ於テ禁詢令ノ發行ヲ只拒ムニ礦
山ノ稼業ヲ管理シ且此ヨリ生スル利益
ヲ領収スル処ノ資財人或ハ又法廷ニ於
テ被告ノ積炭坑ヲ稼業スルノ權ヲ奪
ハント欲セサレバ被告ノ稼業ヲ管理シ
以テ之ヲ報告シ且ツ被告ハ積炭坑ノ

利益ヲ報知スヘキ人物ヲ撰用セサルノ理由ナカハキナリ

原告ノ被炭礦及ヒ樺城ニ関シ法律上至当ナル權利ヲ有スルコトハ拒絶スヘキモノニアラス面シテ法廷ハ被告ノ負債ヲ証明スヘキ十分ノ証拠ヲ有スト信ス此權利ノ為及ヒ此負債ノ幾何ナルカハ他日法廷ニ於テ判決セラルヘキナレト原告ノ請求ヲ償還スヘキ被告ノ所有物ハ唯炭礦山ノ一物ニ止ルニ然ルニ被告依然炭礦山ニ役事セハ必ラス其炭價ヲ損傷セントス故ニ原告ハ法廷ニ對シ尚ホ強請セントスルハ即チ依令法廷未タ原被告互ニ權利

ヲ争フノ原因ハ炭礦所有物ニ関スル原告被問ノ商標ニ在リト注目セラレスト虽民法廷ハ其任トシテ炭礦所有物ヲ保護セサル可カラズ況ヤ之ニ注目セラルノ由ニ於テヤ炭礦ノ買價及ヒ其入費ハ全ク原告ノ文請セ玉モノニレテ其事業ヲ盛大ニ至ラシムルニモ被告ハ嘗テ只一セントタリト寄附セシメナレ前記ノ事情ニ依リ原告法廷ニ對シ尚再ヒ昨十一月五日六日ノ兩日陳述セシ炭礦人ヲ撰用スル原告ノ權利ノ曲直ヲ判決セラル、迄之ニ炭礦ノ管理ヲ托センコトヲ主張スルナリ
計算方法ノ為ハ余今茲ニ贅セス如

何トナレハ被事ハ已ニ原被告ニ於ラテ争論
ニ原告モ其至当ト承認シタル意見ヲ陳
一タレハナリ

言法書

分生九十九子

高島石山坑確業差止願控訴ニ付
東京上等裁判所於テ審問シテ二月
六日及同十日。両日分爲來リ以テ後法
申進マ也

明治二十一年三月廿日
大隈大藏大臣

千八百七十九年二月六日

東京上等裁判所ニ於テ

ゴヤルデンマゼソン社中ヨリ後藤

象二郎へ係ル一件

カルクワード氏ヨリホーム氏へ尋問

礦山ノ工業勘定ニ付キ生ミタルモノノ外ニ後

者カノナシタル負債ノ拂方ノタメ同ノヨリ金

ヲ得ントノ事ヲ足下ハ曾テ迫ラレサリシヤ若

シ迫ラレモナラハ屢ナリシヤ或ハ否ヤ

然リ○和ハ種々斯ノ如キ依頼ヲ受ケタリシナ

リ

足下ハ「ラハ「ラナル者ヨリ係リ後後氏ヲ曲者ト

モ判セシ事ヲ兼知スルヤ若モ足下於テ之ヲ兼

...

知之在ハ後判決ニ付キテ足下カ兼知ノ事ヲ
私ハ諾サレタレ
六月ノ始メニ於テ東京ハ為換スヘキ金額ノ事
ヲ私ハ依テセラレシナリ○此金額ノ五百圓ハ
ヲハラモヨリ係リテ後為モヲ曲者トセシ判決
ニ関係スル法得上ノ費用ヲ払フタメニ要メラ
レシナリ○而シテ十月ノ始メニ「ヨハラ」モカ身
代限リヲ訴出シトセシ故ニ同人カ要求セシ勘
定ニ付キ同人ハ為換スヘキ千五百圓ヲ其上依
テセシ「ア」リ○此ハ後為モカ或ハ青木モヨリ
私ハ告ラレタリ
後判決并ニ右ノ私方ニ関シ足下ハ後為モト曾
テ「漢」話セシ「ア」リヤ

私ハ談話セシ「ア」リ
「ガ」レガ「ル」モヨリ係リ後為氏ヲ曲者トモホセシ
「イ」ラ足下ハ兼知スルヤ而シテ漢モホニ付キ足
下カ兼知ハ「ア」リ私ハ諾サレタレ
過ル十月上旬ニ於テ「ガ」レガ「ル」モカ凡ソ二万一
千圓ニ利是ヲ加ヘタル要求ニ付キ後為モト曲
者トモホセラレタリ而シテ一月下旬ニ私カ長
崎ヲ出立セシ頃ニカ要求ノ濟方ニ付炭坑社ト
同人ト示談セシ「ア」リシト「ガ」レガ「ル」モヨリ私
ハ兼知セリ
後為モトハ係ル其他同様ノ要求ノ「ア」ラ足下ハ兼
知スルヤ
東京モホ所於テ「ア」カモト、ゲンザブロー「モ」代ノ

イシカワカツゾトモ直者トシ後及モヲ曲者
トシテお決セシ要ホノ金額取立ノタメ東京ヨ
リ代言ク一名或ハ数名長峯ハ罷越シタルヲ
過ハ七月ノ上旬ニ於テ後及モヨリ私へ告おセ
リ○松フヘキ残金ハ凡ソ四千四ナリニナリ○
右ノ内千四ハ右勘定ニ付キ速カニ松フヘキ様
要メラレタリシ
若モ右一千四ヲ松ハレサリシナラハ訴訟如起
サント迫ラレシカ
然リ○一千四ハ速カニ要メラレシナリ苦モ右
松レサル場合ニ於テハ訴訟ヲ起サント迫ラレ
シナルヘシ
誰カ此金子ヲ松ヒシヤ

右ハ尋常ノ方法ニテ炭坑社ノ出納掛リヨリ
松ヒタリ
電報ノ写取ニ右ノ訳文ヲ右松人へ示セシコ
レハ「ビービー」号ナル此電信ノ正ニキ訳文ナ
ルカ
デニソシモハ電信ノ写ヲ証書物トシテ呈供ス
ルヲ許可スルヲ拒ミ且原告ト其代理人トノ
間ヲ経過シタルモノナリシ故ニ此格別ナル電
信ニ付キ拒ヒタリ
カルクウードモ私ハ前審問ノ節ニ於テ此拒ミ
ニ對シ既ニ答弁セリ而シテ其節私カ言説セシ
イヲ重言スルハ無用ナリト思考スルナリ○加
之ニ右友ハ既ニ右層類ヲ允諾セシナリ

先ノ向ニ差フ○然リ右電信ノ下ニアルコレハ
上ノ電信ノ正ニキ翻訳ナリ

此電信ハ足下ノ依頼ヲ以テトビヤルデン、マゼソ
ン社中へ送りシカ而シテ右ハ足下カ差出人へ
与ヘタル命令ヲ表シナスヤ(ミーレ号)

(デニソシカハ誘引ノ向ナリトシテ之ヲ拒ミ
タリ)

(又右ノ向ヲ許可セリ)

証人ノ答○右ノ電信ナリ而シテ私カ其ヘタ
ル命令ヲ表スナリ

後右カハ文中ニ記シタル依頼ヲトビヤルデン、
マゼソン社中ハナスコヲ足下へ依頼セシヤ

(デニソシカハ右ノ誘引ノ向ニテ且全ク不適
当ナリトノ理由ニ於テ之ヲ拒ミタリ)

(又右ノ向ヲ許可セリ)
白人ハナセシナリ

(ミーレ号) 号電信ヲ証人へ示セリ(此電信
ノ写ノ下ニアル翻訳ハ此電信ノ正ニキ翻
訳ナルヤ)

右ハ正ニキ翻訳ナリ

(デニソシカハ) ミーレ号ナル此尺類ヲ
受理サルコトヲバトビ、ビレ号ニ就テノ
理由ト同一ノ理由ニテ拒ミタリ)

此電信ハ同様ニ足下ヨリ送り且足下カ与ヘ
タル命令ナリシカ而シテ右ハ其命令ヲ正
シク表シナスヤ(デニソシカ)

然り

後後モバ「ビヤルデン」マゼソシ社中へ此通信ヲ
ナスイヲ足下へ依頼セシヤ

私ハ後後モカ又ハ青木モヨリ左様ニナスハ
キ様告ケラレタリニナリ

「デニソシ」モバ前上ト月一ノ理合ニテ「デト」デ
ヲ証状抑トシテ受理サルコトヲ拒ミタリ

此三通ノ電信ハ足下ノ年与ヨリテ送りレ中〇カ
ハ其年与ヲ正シク表スルヤ且足下ハ此電

信中ニソレ一記シタル一ノ通信ヲナスヘキ
イヲ後後モヨリ依頼セラレシヤ

「イー」イ号、エフ、エフ号、「ジー」ジ号
然リ〇而レテ「ロベル」トソシモヲ經由スル「通信」

ニハ暗号ヲ用ヒタレバ私ニ於テ係述スヘキ
イマリ則チ後後モバ同ノタメニ通信ヲ送

ルニ此方法ヲ用フヘキイヲ屢々私へ就望セ
モイナリ

此三通ノ電信ノ旨ノ下ニアル翻訳ハ正シキヤ
或ハ正シカラサルヤ

カハ正シキモノナリ
「デニソシ」モバ前ト曰一ノ理合ニテ「イー」イ号

「エフ」エフ号、「ジー」ジ号ヲ拒ミタリ
足下ハ過ル六月中後後モバノ雇トナリシ前

ニ「山」ニ於テ勤務セシイ有リシヤ若シ然
ラハ此「山」ナル機業ナリニシヤ

私ハ「ビヤルデン」マゼソシ社中ノ代理人トシ

テ千八百七十八年六月交ニハ高島ニア
ル坂築ニ関シ長崎ニ於テ雇人タリシナ
リ
此月程又シク之下ハ其職業ニテ使地ニ
居リシヤ

千八百七十五年七月上旬以来ナリ
石炭坑或ル帳簿ヲ是下カ監督セシマリ
シヤ

然リ
是下カ言テスル如ク帳簿ハ何ノ日付ケヨリ
是下カ監督セシマ

千八百七十六年一月一日ヨリナリ
使帳簿ニヨレバ其日付ニ於テ何程ノ言カ被

告ヨリ「ジャルデニマゼソシ」社中へ松フヘキモノ
ト見ヘタリシカ

是屯ハ右ノ帳簿ハ未タ呈供セラレサル
トノ理合ニテ拒ナリ

(又本友ハ証抜人カ事實ナリト云了スル
ヲ返答スヘトモ又截ス然レモ本友ハ
下ハ右勘定帳簿ヲ要セラル、前ハ何
ニテモ之ヲ差出ストヲ望ムト裁截ス)

(「カルクワード」及ヒ原出人〇確カニ)
右帳簿ノ初メニアル負債高ハ洋銀八十七
万四千弗或ハ其辺ナリ

是下ハ過ル二月中ニ後及カ長崎へ来リ
テ一ヲ記臆スルヤ

私ハ記憶スルナリ
曰人ノ到着ニ就テノ事実ヲ簡短ニ私ハ告
テレタリ

後茲也ハ三月十一日ノ夕刻ニ長崎へ到着セ
リ而シテ私ハ曰人カ翌朝申八時ニ私ニ面会ス
ルイテ望ミテ消息ヲ曰人ヨリ得タリ○故ニ
私ハ曰人ト出會スルタメニ行キタリ○而シテ
其弟曰人ハ曰人カ言高島石炭坑ノ取扱ヲ曰
人ノ掌中ニ取ルカタメニ来リレテ私ハ先
知セリ且曰人カ「ジャルデン」マセリ社中ノ代理
ヲ止メタリレテ私ハ告知セリ

此消息ハ是下ヲレテ驚愕セシマレマ
全ク左様ナリ○後茲也カ様ニテ来著セシ

ト曰ミ益々船ニテ遠シタル唇状ハコノ一柄ニ
付キ何ニモ申越サハリレナリ

其弟ニ是下カ様述シタル帳簿ニ依レハ行程
ノ高カ被告ヨリ原告へ払フヘキモノト見
ハタリレシヤ

私カ署記憶スル丈々ニテハ右言ハ雜額ヲ
合シテ凡ソ洋銀百三十万弗ナリレ

千八百七十六年一月申ニ帳簿ヲ足下ノ
監督セシ以来三月申ニ後茲也カ其取
扱ヲ自己ノ掌中ニ取りテ返ハ被鏡山ノ工
業勘定ハ行程ノ利益アリレシヤ是下ハ其大
署ヲ私ハ示レ録フヤ

千八百七十六年一月一日ノ松方ノ紙束ノ額

ハ凡ソ洋銀八十七万四千弗ナリトナリノ
松利益金亦松ノ口彥及ヒ或他ノ課
且器械ノ代價ヲ以テスラ火災ノ費用ヲ
加ヒタル後日限以來凡ソ洋銀二十三万
弗ノ利益アリトナルヘシ
政府ハ松ヒタル年賦ハ右利益ヲ生スル
ノ松出金中ニ包括セラレシカ
否此ノ包括セラレス
然ラハ千八百七十六年一月中ニ改告ヨリ原
告ハ松フヘキ負債洋銀八十七万四千弗
カ現在ノ巨額ニ増加セシヲ足下ハ爲
モテ説明スルヤ
工業勘定ノ預利益凡ソ洋銀二十三万

弗ハソジヤルゲンコゼソシ社中へ松フヘキ利益
同社中ヨリ松ヒタル政府へノ年賦金并ニ
山ノ工業費トハ別途ニテ後後トハ松ヒタル巨
額ノお貸金ヲ松フタメニ殆ト充テラサレ
ヘシ而シテ是故ニ負債力減省セスラ却
テ現今ノ巨額ニ増加セシナリ
是下カ陳述セシ火災ハ何時ナリシカ且右火
災後何程ノ間預火災ニ因テ預礦ノ掘出
ニ多ク并ニ其益者ナル工業ヲ害セシカ
右火災ハ千八百七十六年七月上旬ナリシ而
シテ再ヒ千八百七十七年十二月迄ハ預礦
山ハ復充テラサレシ
誰カ礦山ノ工業勘定ノ凡ソ此松出金ヲ松

ヒタルヤ

金子ハ巻塔「じヤルデン」マゼリン社中ヨリ払ヒ
タリ

後差氏ハ有テ原告ヘ對テ負債アリト足下ヘ
述ベシヤ或ハ同人ハ^有テコレヲ否ラスト云ヒ
モヤ

後差氏ヨリ「じヤルデン」マゼリン社中ヘ為テ負債
ナレトハ私ニ決メテ言後セサリトナリ又談
話ノ時ニモ若シ「じヤルデン」マゼリン社中カ
白人ヘ係リ訴訟ヲ起セモナラハ白人ハ身
代限りニ至ルヘト白人ハ度々申述セリ
カルクワードルモハ尋問ヲ完了セリ

原告代理人

モシタギユール・カルクワード記名

「デニソ」モヨリ「ホル」ヘ詰問

足下現今原告人ノ雇人ナルヤ否

私ハ雇人ナリ

唇類ヲ証拠人ヘ示セリ「否」足下ノ唇蹟且
署名ナルヤ(才九号者)

然リ

他ノ者^有テ示セリ「コレハ足下ノ者蹟

且署名ナルヤ(才十号者類)

然リ

是下ハ六月三十日迄、袂鏡山ノ香計上ノ

情状ヲ示ミタル各類ヲ製ミタリシ
ヲ申候セリ○右各面ハ仔項ノ事ニ係ル
也
此計算ハ七十六年六月三十日ニ於ケル金
計上ノ豫算ヲ示スモノナリ○コレハ格別
ナル時分ヲ包括セサルナリ
然ラハ八月三十一日ノ各面モ右ト同様ナ
ルカ
然リ○右ハ八月三十一日ニ於ケル豫算ヲ
示スモノナリ
然ラハ是下カ豫算ノ財産ハ二十七万四
千ト云脱セルハ此月十八意味ノ千十
八也

右ハ金子ヲ清取ヘキ意味ナリ
豫算ノ負債ト云ヘル意味ハ八月三十一日ノ
各面ノ日付ケニ於テ松フヘキ金額ノ意味ナ
ルヤ
右松フヘキ金高トハ炭坑社ノ帳簿并ニ勘定
書ニ記載シタルモノトコレニ加ルニ当時清取
ラレ候ハサリト勘定豫算ノ合計トテ
私ハ示ミタルナリ
後及カキ千八百七十八年二月中礦山ノ
一ヲ管理セシ布ニ礦山ヨリ松フヘキ礦
山ノ礦工費并ニ工業費ノタメニ松フヘ
キ巨額ハアウザリシヤ
然リ○凡ソ二万二千圓ノ松フヘキ高アリシ

ナリ

右ハ「^レ」ヤルゲンマゼソシ社中ヨリ松ハレシヤ
否カハ松ハレサリシナリ

該社中ハ千八百七十八年二月十三日迄石炭
ノ掘出シ高ノ全部ヲ受取ラサリシヤ
該社於テ十二日カ又ハ十三日迄ノ掘出シ高
ヲ受取リタリ私ハ十二日迄カ又ハ十三日
迄カ何ツレカ確カナラヌ

千八百七十八年四月二日ノ契約ニ依リ「^レ」
ヤルゲンマゼソシ社中ハ幾何ノ石炭ヲ引
渡サレシカ足下ハ知ルヤ

私ハ詳細ノ量ヲ忘却セリ然レモ右ハ凡ソ一
万「^レ」程ト思スルナリ

右石炭ノ價直ハ幾何ナリシヤ

八月十五日ニ製シタル勘定唇面中ニ右ハ
凡ソ五万二千回ト豫算セラレタリシト私
ハ思考スルナリ

千八百七十八年六月三十日ニ於テ其節「^レ」
ヤルゲンマゼソシ社中ハ引渡シタル石炭并
ニ二万二千回ノ小沢ヲ引去リテ工業勘
定ハ利益ヲ生セサリシヤ

概言スレバ利益アリタリシナラント私ハ言
説スヘシ

八月并ニ九月中ノ結果七回一ナラサリシヤ
右ハ一回ナリシナラシ

千八百七十六年六月并ニ七月中該破山

次者云クコトヲ
イキレトシテ夫連
結シテ工業ヲ
廢メ以テ増給
ヲ要求スルヲ
言フ

ニ於テ増給料ノ増シ方ヲ要求セシメテアウサリ
シヤ

私ハ此キ要求ヲ記憶セサルナリ

千八百七十六年七月中読破山ニ於テストラ

イキレアウサリシヤ

否、ストラウキレハアウサリシナリ然レハ一兩

日間工業ヲ止メシテアリ

千八百七十八年七月中ノ噪動ハ其一部

ハ給料ノ増シ方ヲ要求スルニヨリテ起

ラサリシヤ

右ハ工夫カ増給ヲ要メシト言説セリ

（証拠人ハ尚ホ述ハント求メタリ然レハ「テ
ニソシキモハ之レニテ十分ナリシト述ハ

タリ）

原告代人ハ証拠人ニ於テ其語ヲ終シト

要メタリ且ツ左様ニナスヘキ十分ノ權

理ヲ有セリト申述セリ）

「デニソシキ」丸〇私ハ昨日証拠人ノ陳述セシ

給料ノ不規則ニシテ十分ナラサル故方

ニアニスレテ其外他ノ理由アリシヲ

証明セシト要ス且ツ之ヲ尋問セシハ右

ノ理由ナリ）

（又右官ハ其語ヲ終ヘルヲ証拠人ニ許

可セリ）

証拠人ハ継続ス〇然レ私ノ意見見ニテ

ハ給料ノ残額カ十分ニ且ツ規則通り

同
法
官

ニ松本レモナラハ給金増エ方ノ要求ハ生セ
サリレナルヘシ
足下ハ後後モノ意ニ同シテ六月三十日ノ各
面ヲ送リモヤトノ問ニ若ヘテ足下ハ依テ各
面ヲ送ルニハ同人ノ同意ヲ得タリト回答
セリ○是下ハ各各面ヲ送ルニハ後後モ
ノ^許解下ヲ得タリモヤ
私カ岩垣社ニ入社セシ時ニハ私ハ後後モト
并ニ其首^トビヤルデシマゼソシ社中ノ代理
トシテ長崎ニアリシ^トビヨソソシ氏トノ
双方ノ依頼ヲ以テ左様ニ取計ヒタリ○
其節^ト後事業ノ将来ノ取扱并ニ^トビヤ
ルデシマゼソシ社中ノ負債ノ清方ニ付双

方十分ニ満足ノ取極アルニ至ルヘシト豫メ
思料セラレタリ○其節後藤氏ハ直ニ
ニ東京ヘ向テ出立スヘクアリシ○若ク
継続スルイテ拒マレタリ^レ通例ハ私於テ
ハ^トビヤルデシマゼソシ社中ヘ會計上ノ情状ノ
各面ヲ送ルニハ同人ノ許可ヲ得タリ
保シナガテ私カ各自^トビヤルデシマゼソシ社中ノ特別ノ許
諾ヲ得シヤノ私於テ言説シ能サルナリ
^トビヤルデシマゼソシ社中ヘ金額ヲ依頼セシ
ハ後後カ^ト後山ヲ所有セシ^トビヤルデシマゼソシ社中ノ右破
山ニ関スル巨額ヲ私ハスシテ^トビヤルデシマゼソシ社中ノ
シ事^トビヤルデシマゼソシ社中ノ理由ヲ示サスシテ
^トビヤルデシマゼソシ社中ヘ或ル格別ノ理由ヲ示サスシテ

現在需要ノタメニ金子ヲ得ント依頼セ
ラレタリシ

其事柄ハ該社中ヨリ金額ヲ償渡スヘ
キノ理由トモテ後後氏於テ示サ、リシ
ヤ

右二万二千圓ノ一ニ付キテハ後後氏於テ
言説スルヲ私ハ判キタリ然レ氏同人
ハ該社ヨリ其他ノ償附金ヲ得ルカタメ
ノ理由トモテハ之ヲ言説セサリシナリ
原告於テ該社中一引渡シタル石炭ニ
付キ百分ノ八指ハ金額ヲ前払スヘ
キ契約ヲ原被ノ間ニテ取結ハサリシ
ヤ

然リ○船載ノ石炭ニ付キ右契約アリシ
ナリ

石炭ハ該契約ニヨリテ引渡サレシヤ
然リ○石炭ハ右ノ契約ニヨリテ船載セ
ラレ且ツ金額ヲ交ハセヒセラレシナリ
右船載ニ付キ利益ノ残額ハ幾千ノ高ニ
至リモ予足トハ知ルヤ

私ハ確カニ知ラス然レ凡ソ洋銀一万
弗或ハ一万二千弗ト言説スヘシ
原告ハ右利益ノ残金高ヲ取押ハサリシ
ヤ

右条捌キ依杜甚定ハ未タ決算セラレ
ス

原告ハ右利益ノ残額ヲ取押ヘサリシカ
レ其利キ依此ノ勘定ハ未^末タ全ク決着セ
ラレス而シテ右利キ依此ノ貸方ニア
ル資金ヲハ暫ク原告於ラ留メ置キ
ト私ハ信思ス

被告代理人

エイチダブルエーデニソン記名

アールホーム

記名

附録

明治十二年二月六日

一 原告代理人 ホーニ 對シ 証拠調ヲ始ム
一 証拠人 調方ニ付 デニソン 之ヲ 非難ス
一 判事ハ 原告代理人ノ 問ヲ 可トス
原告代理人カ 帳面ノ 付 証拠調ヲナスヤ
星亨曰 該帳面ニ付 証拠調ヲナスナレハ 該帳
ヲ 差出取調フヘシ 原告代理人モ之ニ 答テ云々
セリ 其末
判事曰
一 証拠人カ 知り 居ルヲ 問フモ 可ナリ
原告代理人 証拠調ヲ了ス
被告代理人 デニソン ホーニ 對シ 証拠調ヲ

始

一千八百七十七年七月職工沸騰ノ一付

原被抗論セリ

一 証據人カズ方ニ付デニフン之ヲ非難ス

判事曰

一 問フ一ヲ答テ可ナリ

一千八百七十九年二月十五日上等裁判所ニ於

テ、ゲヤルゲンマデソシ高會ヨリ後及象二郎ニ

對シタル審問

「キルクウトド氏ハ裁判所ノ檢閲トシテ被告ノ

辯論書ニ通ノ字ヲ差出シタリ是ハ次ノ審問ノ

節返却致サルヘキモノトス

「テニソジ氏ヨリ「ホルム氏」ニ對シテノ審問

汝ハ前日審問ノ砌此積送品ノ事ハ未タ了ラサ

ル趣ヲ陳ヘタリ其内何カシカ了リタルヤ

船積ノ内若干量ヲ旁弘ヒタル氏積送品ノ重量

ハ未タ了ラサルナリ

此積送品ノ始末ハ知ラレマシダヤ

實事トスル可キ船積ノ始末ハ知ル一ヲ得ルナ

同法

原告ハ此積送品ノ方ノ被告ニ對シテ勘定ラズ
テシヤ
原告ハ實事ト取ルヘキ此船積ノ賣払勘定ラカ
シタリ
原告ハ其時此積送品ヲ付テ払フヘキ残金ヲ被
告ニ払ヒタルヤ
其時又ハ後テ払フヘキ残金ハ悉ク積送品ノ實
事ト取ラレ、追テハ精細ニ確認スルコトヲ得ス
原告ハ其時實事ト取ルヘキ積送品ニ付テ払フ
ヘキ残金ヲ被告ニ払ヒタルヤ
原告ハ此積送品ヲ付テ純益ノ高ヲ被告ニ払ハ
カレナリ

此積送品ノ何程カ當時残リ在ルヤ
余ハ書記ニ依テサレハ何程残リアルヤヲ知ラ
ス
此極ニテ何程ノ船積ヲおシタルヤ
幾多ノ船舶ヲ以テヤリ
此極ニテ何程ノ石炭ヲ船積シタルヤ
余ハ簿冊ニ依テサレハ此事ヲ陳ル能ハス 船積
ハ四月ナリ去ル十月迄テ絶ヘスマリタリ
四月八日ノ極ニテ石炭ハ何程ノ噸數ヲ船積
シタルヤ
記録ニ拠ラサレハ余之ヲ覺ヘス
汝ハ其高ニ就テ何カ不存ヲ陳ルコトヲ得サルヤ
否余ハ簿冊ニ依テサレハ何等ノ不存モ陳ルコト

張ハス

汝ハ一千八百七十八年六月迄原告ノ代人タリ
汝代人ノ権カヲ以テ長崎ヨリ石炭積送リ、お
ノ数多ク船舶ヲ傭ハサリシヤ

余ハ原告ノ代人トナリテ石炭積送ノおノ数艘
ノ船舶ヲ傭ヒタリ

傭人ハ此ノ如ク船舶ヲ傭フノ手数料ヲ受取ル
ヲ例トナササルヤ

時トシテ受取ルトアリ

原告ハ被告ノ代人則チ高島石炭坑ノ代人トナ
リテ右傭入ニ付テノ手数料ヲ受ケサリシヤ

余ハ原告ニ於テ受取ル例ト推察ス

此手数料ノ高ハ何程ナルヤ

余ハ簿冊ト書類トニ依ラサレハ之ヲ陳ル能ハ
ス

原告ハ此手数料ニ就テ被告ニ勘定シ立テシヤ

原告ハ被告ニ對シテ此勘定ヲ立テサルナリ

長崎ヨリ船積ヲおヌ時保險ヲ得ルト例トナ

サ、ルヤ

規則通り船積ハ保險ヲおシタリ

經令ニ依ルモ此船積ニ付テノ仲高口錢ヲ

原告ニテ負擔スルト例トおサ、ルヤ

余ニ於テハ規則通り保險ヲおサス然レモ一般

到着ノ港ニ於テおサス、ナリ

勘定ハ汝ヲ管掌スル所カ將タ然ラスヤ

管掌スル所タリ

同法省

保險ニ付テノ仲高口銭ハ通例此勘定ニ於テ負
擔セサルヤ
保險ニ付テノ仲高口銭ノ勘定ニ於テハ更ニ負
擔スル所ナシ
原告ノ為シタル保險ニ付テ原告ハ利益ヲ得ナ
リシヤ
如何ノ利益ヲ得シヤ余ハ知ラサルナリ
汝ハ一千八百七十八年六月迄ヲ長崎ニ在テ原
告ノ代人タリ且ツ汝ハ勘定ヲ負擔セシヤ將夕
然ラスヤ
負擔セリ
汝ハ今石炭船積ヲ付キ原告ニ由テ報行セシ保
險ノ利益ニ就テ陳ルナラ得ルヤ

余ハ石炭保險ニ就テ如何ナル利益アリシヤ之
ヲ知ラス保險ハ石炭ノ賣込ニ勘定ヲ以テシ且
ツ保險ニ付テノ通例ノ報償ハ引キ去テサルナ
ト推察ス
通例ノ報償トハ何ラ云フヤ
仲高口銭ニ付テノ通例ノ報償ハ時トシテ一割
ノナリ又時トシテ三割ニ分ノナリ
通例原告ニ於テハ如何レノ報償ヲ得ルヤ
余ハ勘定書ニ依テカレハ之ヲ陳ルナラズ
汝ノ管カレ簿冊ニハ何等ノ報償ヲ登記シアル
ヤ
余ハ掌トル簿冊中ニハ更ニ報償ノ事ナシ
長崎ニ在ル簿冊中ニ在ラサルハ如何ナル簿冊

中ニ其事ヲ載セタルヤ
「キルクウード」氏ハ悉ク事件ノ如キ元テノ同ニ
抗論セス蓋シ此同ノ既ニ裁判スニ於テ現今ノ
事件ヲ付テ制限セシ要件ノ同ニ涉ルヘキヲ以
テナリ「キルクウード」氏云ク余ニ於テ此同ノ勘
定ノ同ノミニ干係シテ我カ殊ニ検査セントス
ル事ニ涉ラサルナリ余思フニ裁判スニ於テハ
此ノ如キ同ヲ停止シ更ニ実要ノ同ヲ付テ同
ヲ為サシムル命アテントラ欲ス
「デニソン」氏云ク余ニ於テ原告代弁人ノ此同ヲ
停止セシトテ欲スルハ更ニ驚クヘキニアラス
此同ハ頗ル案件ニ涉リ同証ノ要件ニ干係ナリ
且ツ此同ハ被告ニ属スル利益ヲ付キ原告ニ於

テ勘定ヲ為サ、ル趣ト及ヒ原告ニ於テ直チニ
勘定ノ事ヲ扱フ「ナキ」趣トテ同証セシメント
スルニアリ同「ハ」唯原告ニ於テ被告ノ手ニ渡
ル可キ手数料ト仲高口錢ト受取リタルヤ受
取ラサルヤラ同「タル」ニアリ長券ニ於テ汝ノ管
掌スル簿冊中ニ在ラサルハ右ノ利益ハ何等ニ
記載シアルヤ
仲高口錢又ハ保險ニ付テノ報償ノ如キハ保險
ヲ付シタル也ニ記載シアル可シ長券ノ簿冊中
ニハ全ク見ヘサルナリ
長券ニ於テハ一モ保險ハ為サ、ルヤ
長崎ニ於テナシタルト思ヘリ然レ氏余ハ確ト
其旨ヲ覺エス

同法省

仲高ノ傭使ニ拘ハラス石炭ノ賣払ニ就テ仲高
口銭ヲ課スルノ例トナサ、ルヤ

余カ知ルニアララス

時トシテ仲高ヲ傭使ニタルノアラサリシヤ

長寄ニ於テハ仲高ヲ傭使スルノ習慣ナシ然レ

氏時トシテ傭使スルノアルヘシ

上海ニ於テ仲高ヲ用ユルノ例トセザルヤ

余ハ上海ニ於テ自ラ賣捌ヲナサス然レ氏上海

ニ於テ石炭ヲ賣払フヤハ毎ニ仲高ヲ傭使スル

ラ其地ノ習慣ト推察ス

上海ニ於テ石炭ヲ賣払フヤ仲高口銭ハ定規ノ

多額ニアラサルヤ

余ハ其手取料ノ毎ニ賣化ナク課セラル、カ之

ラ覺エス然レ氏多分其手取料ハアルト推察ス

ヤ

汝ハソーママ口ヘルトソシ氏ト知ル人タルヤ

然リ知己タリ

去ル十月中同氏ハ長寄ニ在リシヤ

在リト思ヘシ

汝此事ヲ思ヒ出スノヲ得ルヤ

彼レ長寄ニ在リタリ

全月

然リ全月ト思ヘリ

此月中高島石炭坑ノ負債ト資財ニ付テ「ロベル
トソシ氏記録ヲ認ムヘキ命ヲ受テタルト覺
ユルヤ

同
録
首

否余ハ同氏ニ於テ此ノ如キ命ヲ受タルヲ覺
ヘス

汝ハ此月中同氏ニ於テ資料及ヒ豆俵ノ記録ヲ
作リタルヲ就テ何カ思ヒ出テアラサルヤレ
否余ハ思ヒ出ササルナリ

然ラハ此記録ノ真偽如何(テニソビ氏証人ニ記
録ヲ見示セ)

余ハ曾テ之ヲ見ス余ハ之ヲ作ラサルナリ

此記録ニハ横濱十月二十四日ノ日付ニテ「デー
エム商會ノ代高」ハ「マスロベルトソン」氏ノ署
名アリ汝此記録ハ何人ノ自筆タルヤヲ陳スヘ
シ

意フニ「ローレン」タルス「氏」ノ昏ト推察ス

一千八百七十八年十月中同氏ハ原告ニ傭使セ
ラレタルヤ

余ハ横濱ニ来リテヨリ原告ノ役所ニ於テ同氏
ヲ見タルヲアリ然レ氏其後久シク横濱ニアリ
シヤ之ヲ知ラス

汝ハ一千八百七十六年以來高島石炭坑ニ於テ
購ボタル豆俵ノ重高ヲ知ルヤ

豆俵ト諸品ノ價ハ九万六千弗位ト思フ

豆俵ハ未定ノ勘定ヲ以テ送ラレシヤ

「キルクウード」氏余ハ此問ニ振論ス

「デニソビ」氏此問ニ振論スル「キルクウード」氏ノ
説ハ少シク当理ヲ失スルニ似タリ余亦審査ス
ル所ハ原告ヨリナス請求ノ一ハ豆俵ヲ原告ノ

同
法
省

所有ト方ス事実ヲ明カニセントスルニアリ
炭械ノ價ハ炭坑ノ坑業勘定中ニアレハ之カ
ノニ払フヘキ炭坑簿冊ニ因テ其勘定ヲおレタ
ルナリ然レ氏此ト有テハ本主ノ問ニ如何ナ
ル有極ノアリシヤ余ニ於テ之ヲ知ラス
炭械ハ被告ノ負擔スヘキモノニアラサルヤ
余既ニ答ハタリ炭械ノ價ハ炭坑ノ勘定ヲ以テ
計美ヲ立ツヘキナリ
汝ノ管掌スル簿冊ニ於テ炭械ハ被告ニ負担セ
ラレザルヤ
原告ニ因テ払ハル、如キ炭械ハ炭坑ノ簿冊ヲ
經テ被告ニ負担セラレ、ナリ
炭械ノ手教料ハ被告ニ負擔セラレサリシヤ

然リ手教料ハ負担セラレ、ナリ
此金高ハ原告ヨリ被告ニ払フヘキ残金ヲ償フ
モノトナラサリシヤ
余ハ知ラス
右ノ九万六千弗ハ被告ニ払フヘキ汝ノ簿冊中
ニアル残金ヲ償フヘキモノトナラサルヤ
余六月ヨリ十月、未迄テ炭坑社ニ傭使セラレ
、間ハ高島炭坑ノ勘定ハロベルトソシ氏ノ掌
トルニタリ故ニ余ハ慥カニ此事ヲ陳ルヘ能ハ
ス
汝ハ古九万六千弗ノ部分ハ被告ヨリ原告ニ払
フヘキ残金ノ内タルヲ知ルヤ
余ハ知ラサルナリ

同去前

附録

明治十二年二月十五日

一 被告代理人デニソン 証人ホームニ對シ
五對ノ証拠ヲ始ム

原告代理人曰

一 該証拠調ハ計美上ノ一ニテ本訴ニ屬スル
モノナレハ差止アリタシ云々
デニソン曰

一 該伺ハ最モ肝要ナル伺ニテ該訴証ニ直接
ノ關係ヲ有セリ被告ニ取ルヘキ利益ヲ原
告ヲ取リ居ルトノ証拠ニテ計美上ニ涉
ルニ非ス云々

判事曰

一 被告代理人ハ可成直接ノ關係ヲ有スル伺

ホルノ

被告代理人デニソン

ヲ起スヘシ

原告代言人曰

一 此ホノ問ハ少シモ關係ナシ

判事曰

一 該問ハ原告ノ事業上ニ關係スルモノト思

料ス已ニ原告モ被告ノ事業上ニ関スル

ヲ問フ

原告云々抗論ノ末

呈事曰

一 可成緊要ノ点ヲ問フヘク注意スヘシ

被告代言人デニソシカ原告ノ利益ハ何レノ帳

簿ニアルヤ云々問ヲ起ス氏

原告代言人曰

一 該問モ計美上ノ一ニテ關係ナキモノナリ

云々

呈事曰

一 此ハ原告ノ利益ヲ問フナリ計美上ノ一ニ

非ス

判事曰

一 問ヲテ可ナリ

判事曰

一 デニソシカノ問フ所ハ千八百七十八年六月

以テト云ヘリ然ルヤ

デニソシカ曰

一 然リ証拠人ガ原告ノ用違ナリシキノ一ヲ

問フナリ

同夫

第八卷 控四編

高島石炭坑確業差止願控訴之件
東京上等裁判所控訴審問之日供
二月廿日及同日廿五日兩日分爲兩段以
法與申述也

明治三十二年一月一日 大森日誌

大隈大藏卿殿

一千八百七十九年二月廿日東京上等裁審所ニ
於テ「ビヤルゲン、マテウシ」高會ヨリ後藤象二
郎一係ル訴訟ノ審問
「デニツシ」氏曰ク証人吟味ノ節「ホルシ」氏ハ一千
八百七十六年一月一日ニ於テ被告ヨリ原告ハ
八拾七方四千弗ヲ拂フ可クナリ一千八百七十
八年二月十一日ニ於テハ凡ソ百三十万弗ヲ拂
フ可クナリシ趣ヲ証明セリ然レドモ被告ニ於テ
ハ原告ニ對シテ此ノ如キ負債ヲ論破シ若シ原
告代官人ニ於テ此証人ニ由テ此負債ノ事
ヲ決スルノ權アリトスルモ被告代官人ニ於テ
モ亦此証人ニ由テ更ニ此ノ如キ負債アラサルヲ
ヲ証明スルノ權アリト思ヘリ船舶傭人ハ報

償手数料ト保険ニ付テノ仲高口銭ニ干係
セル余ノ向ハ即チ此事實ヲ定メニカ為メナリ
余ハ茲ニ七十六年一月一日以後高島炭坑ノ諸
勘定ハ長壽ニアリテ「ホル止氏」ノ管理ニ属
シタル「ラ」申立ツ可シ
「ホル止氏」ノ審査

七十六年一月一日ヨリ六月迄、機械ノ部分
ハ此勘定ニ於テ負擔セラレシヤ
余ハ既ニ原告ニ由テ拂ヒテ為シ而シテ高島
ハ送致セシ機械ハ必ス炭坑營業ノ勘定中
ニアル炭坑勘定ヲ以テ為ス可キ「ラ」申立置
キタリ。

凡ソ壹万一千弗ノ代價タル穿鑿機械ハ右ノ

勘定ヲ以テ送ラレシヤ

「ビヤル」チン、マテソシ「高會」テ一箇ノ穿鑿機
械ヲ得シ「ア」氏右ハ獨リ高島ノ使用ニ
供スル為メニアラス曾テ「藤」氏ニ於テ坑
業權ヲ有スル旨陳述セシ「硫黄島沖」島
等ノ使用ニ供センカ為メナリ尚ホ此他何レノ
地ヲ問ハス需要ニ從ヒ之ヲ使用セン「ラ」欲
シタリ而シテ「亮」モ炭坑ノ勘定ニ關係セ
サルナリ
然ラハ余ニ於テ足下ノ答ケル所ニ右機械ハ
此勘定ヲ以テ負擔セサル「ラ」ト了解ス可キ
ヤ
右ハ炭坑ト勘定ヲ以テ送ラレサルナリ

右ハ高島炭坑勘定中ニ未定勘定トシテア
ラサリシヤ

余ハ之ヲ保証セヌ

然ラハ若シ此勘定中ニ負擔セラレシテハ右
ハ誤謬ナルヤ將タ然ラスヤ

右ハ此勘定中ニ於テ負擔ス可キモノニアラス
若シ未定勘定トシテ記載シテハ全ク備忘
ニ供カレ為メナリ

「カークワード氏ハ此間ニ主タル訴訟ニ屬
スルコレテ之ニ抗論セリ

「デニソン氏曰ク原告ニ於テ禁令状ノ發行ヲ
請ヒタリ此禁令状ヲ許ルサレ可カラザル
所以ノ一ハ即チ高島炭坑ニ在ル機械

ハ原告ノ所有物タルヲ以テセリ而シテ原告
ハ其請求ヲ證明セシ為メ高島炭坑ニ存在
スル機械ハ仮令ヒ一旦被告ニ負擔セラレ
且ツ利足手數料ハ機械ノ為メ拂フ可キ高
シテ被告ニ負擔セラレタルトモ勘定中
不定ノモノトシテ差置キタリ故ニ余ニ於テハ
機械ニ干係シテ其勘定ヲ為ス諸件ヲ「ホル
ト氏ニ對シテ審査スルノ權アリト思ヘリ又
被告代理人ニ於テハ一千八百七十八年十月
二十四日附「ホウ井ツタル氏ノ説明書ニ添ハタ
ル口書ハ後チノ意見ニテ即チ機械ヲ未定
勘定トシタル最初ノ口書タルヲ決定セルトス
判事ニ於テハ勘定中ニ正シク負擔セラレタル

機械、被告ヨリ原告へ拂フ可ク請求ヲ爲シ
タル残金ヲ償却スヘキモノトナルコト。注意ア
ランコトヲレシフ

「カークウード」氏曰ク右機械、如何様勘定中
ニ載セタルモノト仲、至テハ此禁令状ニ干係シ
テ毫モ所必要ナラサルコトナリ如何トシハ原告
ハ一千八百七十六年六月ノ約定ニ因リ是ノ代
人タル権カラ以テ右機械ヲ買受ケ代價ヲ
拂ヒタレハナリ而シテ被告ニ於テハ之ヲ原告
ヨリ買受タルニアラス一錢モ之レカ爲メ原
告ニ拂ヒサレハナリ

被告、於テ之ヲ買受ケ其代價ヲ拂渡ス迄
テハ殊ニ条約面ニ對シテ被告ハ右所有ノ

権利アル請求ヲ爲スコトヲ得サルナリ

高島炭坑未定勘定中、其勘定ニ関係セ
サル条款ヲ全ク備忘ノ爲メ掲載スルハ足下
ノ慣例ナリシヤ

元未定ノ勘定ハ未ク決定セサルモノヲ備
忘ニ供スルマデニテ之レハ責任ニアラス但シ右
勘定中、掲載セシ未定勘定ハ到底炭坑
ノ勘定ニ関係シタルモノナリ

然ラハ一度ハ正当ニ勘定中、掲載セシ条
款ハ元ノ責任ヲ平算スル勘定中、記入セ
スレテ之ヲ未定勘定トシテ載スルカラサル
ヤ
一度ハ勘定ヲ経テ拂出シタル條款ハ其資

財ノ確定ニ至ルマテ実地勘定ヲ経テ貸金
トシタルモノニアラサレハ未決ノ貸金トシテ勘
定中ニ掲載スルナリ
然ラハ一度ヒ正当ノ勘定中ニ掲載セシ條款
ハ元ノ責任ヲ平算スル勘定中ニ記入セスレ
テ之ヲ負債ノ未定勘定トシテ載スルカラサ
ルヤ
勘定中ニ於ケル條款ハ其事ノ決定ニ至ルマ
テハ其勘定中負債トモ貸金トモセスレテ何
レカニ未定勘定トシテ載スルナリ
勘定中未定勘定及ヒ正当ノ勘定ノ兩様ニ見
ヘサルヲ得サルヲアルヤ
兩様ニ見ユルヲアリ

必ズ兩様ニ見ヘサルヲ得サルヤ
或ル場合ニ於テハ見ヘサルヲ得ス
足下直吟味ノ節里下ハ一千八百七十八年六
月三十日、八月三十一日及ヒ九月三十日迄、高
島炭坑ノ資財及ヒ負債ノ記録ヲ原告ノ
送付セシ者申立タリ且下ハ之ヲ「ケスウ
井ツクシ氏ノ依頼ニ依テ同氏ニ送付セサリ
シヤ
此記録ハ在横濱「ジョレン」氏ニ向ケ差送り
タリ
「ケスウ井ツクシ氏」此記録又ハ此記録ノ内ヲ且
下ニ「調王」マサリシヤ
其事ハ余ニ於テ覺ヘス

判事曰ク今被告、於テ為ス所ノ同ハ主タル
訴訟ニ屬スヘキ同ヒナリ 既ニ今少し以前原
告代官人、於テ機械証入ノ件ハ緊要ナラサ
ル旨申立タレバ、如クテ緊要ナラサ
ルヤ之ヲ申立サリシ元ヨリ主タル訴訟如何
ノ決定ニ至ル可キカ今何人モ之ヲ知ルヘカラ
ス若シ原告、於テ主タル訴訟ノ判決ヲ得而
シテ被告、於テ此判決ニ服サル時、当リテハ
即チ禁令状ヲ行ルサル、トモアル可キナリ故
ニ此事件ニ付被告、於テ其判決ニ服ス、トテ
得サル者ヲ明瞭ナラシムルハ原告ノ職務ナリ如
何ントテハ被告、既ニ今少シ、如ク為ス、ト
ヘキ、ト同意シタレバ、ナリ依テ主タル訴訟ニ

関シタル某ノ同ニ至テハ、当裁判所ニ於テ
為スヘカラス然レモ被告代官人ニ於テ原告
告、於テ被告分散ノ形況ニ及ヒタル旨申
立タル事ニ付對審ヲ為ス可シ
足下ハ、トヘヌ、トガブ、リ、ワ、マル、チ、レ、氏ヲ知ル
ヤ
余ハ同氏ヲ知レリ
足下ハ同氏ノ職務、何タルヲ知ルヤ
同氏ハ高島、於テ坑師頭ナリ
足下ハ同氏一手書ヲ知ルヤ
余ハ之ヲ知レリ
此時書面ヲ出シ此唇面ハ同氏ノ手唇タル
ヤ

同氏ノ手書ナリ

「デニソ」氏曰ク之レハ一千八百七十八年九月
廿七日付「エウチ、ダブリウ、マルチン」ノ手署セシ
報告書ナリ余ハ之ヲ一附録十一トシテ証
拠ニ差出サンコトヲ欲ス

「カークワード」氏、控テ右ハ証拠ニ供ス可カラ
サル旨年駁セリ如何トナレハ右ハ被告ノ雇
中「マルチン」氏ヨリ被告へ送付シタル書付ニ
シテ如何ナル目的ニ出テシヤ余ハ控テ之ヲ
陳述スルコト能ハサルナリ故、右報告書ヲ送
付シタル時「マルチン」氏ハ原告ノ為メ夫レ此
レ事ヲ取扱ヒタル証拠アルマテハ此事情ニテ
被告ノ為メ原告ニ對シタル証拠トシテ之ヲ

取ルコト能ハサルナリ殊、當時同氏「ジョヤルゲ」マ
テソシニ高會ニ雇用セラレタルモノニアラス而シ
テ同氏ハ同社ノ代人又ハ同社ノ依頼ニ由テ
右報告書ヲ送付シタルニアラス 依テ之ヲ証
明スルニハ先ツ「マルチン」氏ヲ呼出スル所要
ナリ

「デニソ」氏右「カークワード」氏ノ年駁ニ答ヘ
テ云ク余ハ裁案所ニ控テ前キニ証人ノ申立
テタル如ク被告ノ雇中被告ノ為メ其証人
ノ作りタル資財及ヒ負債ノ記録ヲ原告
ノ代人ヨリ差出シタル時ノ原告代理人ノ
年論書トモ原告代人ニテ手署シテ而シテ
原告ハ宛テタル電報ニ管係シタル原告

代 言 人 の 弁 論 書 ト、 據 ラン ト、 要
ス
「カークウー」氏曰ク余ハ爰、 証拠法中ノ一
原則ヲ發見セリ 即チ本人若クハ其代
人ニテ為シタル申立ハ若シ果シテ其者便
益ニ於ル 証拠ト為ス 能ハサルヤハ其者ニ
對スル 證據ニ供スルヲ得ルヲアリ 被告
代 言 人 ニ 於 テ ハ 之 ヲ 知 ラ サ ル ト 見 ヘ タ
リ 且ッ 右 電 報 ヲ 取 上 ケ タ ル 原 由 ハ 甚 タ 明
瞭 タリ 「ロズ」氏ハ 右 電 報 ヲ 送 リ タル
時 右 電 報 中 ニ 「ル」氏ノ 依 賴 ニ 由 リ 全 ク 原
告 代 人 タル 故 ヲ ア ラ サ ル 者 申 述 ヘ タリ
判 事 右 昏 付 ヲ 取 上 ケ サ ル 者 判 定 セ リ

「デニツ」氏曰ク余ハ此判定ハ 抗論ス
余ハ長崎ニ在ル「マル」氏ノ当地ニ來リテ此
事ヲ 証明スヘキ 旨申 送ルヲ 肝要ナリト思
料ス 如何トナレハ 同氏ハ 炭坑ノ 要件ニ 付テ 報
告ヲ 與フルニ 適任ノ 唯一人 タレハ ナリ 且ッ 同氏
ハ 初メ 原告ニ 於テ 炭坑ヲ 管理セシ 間ハ 原告
ノ 雇ヲ 受ケタル 最初ノ モノニテ 今ハ 高島炭
坑ニ 在ル 坑師 長タレハ ナリ
余ハ 又 爰ニ 申立ツルヲ アリ 若シ 余輩ニ 於テ
右「マル」氏ヲ 呼寄スルカ 為メ 延期ヲ 請フヤ
ハ 此ノ 如ク 為スノ 道理トシテ 余カ 既ニ 申立
ル 事ノ 外 他ノ 事ニ 歸ス 可カラス 余カ 今 此 事
ヲ 申立ル 所以ハ 前々ニ 原告代 言人ニ 於テ「ウ

リユーシ氏ノ署名ヲ証明ス可キ為メ在長崎「ホ
ル」氏ニ向テ申送ル「」ニ付テ延期ヲ請ヒタリ
然ルニ今原告代 言人ニ於テハ証人ヲ呼出シタル
事ニ全ク関係セサル事件ヲ審査スル為メ二
日或ハ三日ヲ費シタリト 申モ右証人ヲ呼出し
テ 証明セシム可キ 書類ノ事ニ付テハ 毫モ尋
問セサレハナリ

「カークワード」氏曰ク余ハ延期ヲ請ヒタル「」ヲ
覺ヘス余ハ或ル場合ニ於テハ 延期ヲ請フ可
キ者申述タル「」アリ然レモ余ハ右ノ場合ニ
至ラサリシト思考ス又今為シタル他ノ申
立モ 疑ニ 不当ナリト 思考セリ余ハ「」ウリ
ユーシ氏ノ 署名ヲ 証明ス可キ為メ「」氏ニ

向テ申送リタル「」ナキ所以ハ即チ簿記ニ
於テ明瞭タリ如何トナレハ彼令「」ホル「」氏ヲ
シテ之ヲ証明セシムルモ余ハ前日ヨリ更ニ
良位ヲ占ムルニ至ラサレハナリ
今被告ニ於テハ憂モ延期ヲ請フ、 機曾ニア
ラサル「」シ「」ラス余ニ於テモ各現ニ此、如キ
機曾ニ至シタル「」思ハサルナリ
「」ル「」氏ハ要求ニ依テハ次回ノ木曜日ニ
当所ニ来ル「」日得ヘシ

被告代 言人

「」タ「」ブリ「」デ「」フシ

原告代 言人

カークワード

明治十二年二月廿日

判事曰

一 今回ノ証松吟味ハ格別ニ制限セラレタル
 モノニ付被告代理人ハ兼テ原告代理人ノ
 申立タルケ条中裁判所ニ於テ差止タル条
 中へ不立入様スヘシ又右差止タルケ条ノ
 外トテモホームニ限ラヌケスウキキ等
 ニ問フテ 済ムモノハホームニ問フヲ止ム
 ヘシ

デニソシ「ホーム」ニ對シ証松調ヲ初ム

器械代「」ニ付原被告争論ノ末

判事曰

一 被告ノ言ノ如ク「」ハ原告ハ其証松調ヲ

正ル
 ホルム

拒ム理由ナシ

又曰

一 原告代理人ハ今吾械代ハ此金ノ内ニ罷ル
云々ハ差止ニ無用ト云ヘリ然ラハ原告於
テハ機械ニ付テハ出金ニシタル取差止ヲ願
フ意ニハ無之ヤ如何

原告代理人曰

一 出金ニシタル故ニ差止ヲ願フナリ

判事曰

一 然ラハ被告代理人カ其金ノ一ニ付問フ權
アルヘシ

ホームカ答方ニ付デニソシ之ヲ非難ス

判事曰

一 正ニキ答ヲナスヘシ

ホーム曰

一 明カナル答ヲナシ居レリ云々

判事曰

一 只今マテ問ク所ニテハ本訴ニ属スヘキ一
ト思料ス過刻原告代理人カ差止願ニ無用
ナルト云ヒシカ而シテ其理由ヲ明言セザ
リシ假ノ差留願ハ本訴ノ勝敗ヲ期スル一
端ハス原告カ勝テタル所ニ被告カ原告ノ
害ヲ補フニ足ラスト認ムル場合ニ施行ス
ヘキモノナレハ原告ハ他日本訴ニ勝ツト
モ其害ヲ補フニ足ラサル事實ヲ証明スル
ヲ主トシ被告ハ本訴原告ノ言フ所及ヒ他

判決

日害ヲ補フニ足ルニテ弁論スヘキ筈ナリ
然ルニ本訴原告ノ言フ所ヲ否ラストスル
ハハ已ニ被告ノ答弁ニ見レアル上ハ本訴
ニ付テノ弁論ハ本訴ニ属シ当庭ニ於テハ
原告カホームヲ調ヘタル被告ヲ破産ニ及
フヘキト云フノ点ニ基キタル証拠調ニ對
シ問返シヲナス可ナラン

被告代言人デニソシヨリマードゲンノ報告各ヲ
為証拠差出スニ付

原告代言人曰

一 決報告各ハ証拠トシテ差出スヘカラサルモ
ノ云々故障ス

其末

判事曰

一 被告代言人ハニツノ先例ヲ引テ此各面ヲ
証拠トシテ入ル、イヲ求ムレドモホームカ
報告各ハ被告トホームトノ間ニ成立タル
モノニシテホームノ証明ニヨリ原告之ヲ
証拠トシテ差入タリ電信ノ如キハ英律ニ
於テハ之ヲ入ルヘカラサル趣ニ同キリ然
レド被告支配人タルホームニ於テ認メタ
ル証明アルニヨリ原告ノ之ヲ証拠トシテ
入ルハ各理ニ於テ穩当ナリトス此各面
ノ如キハ被告ト被告雇人トノ間ニ成立タ
ルモノナルニ其事實ヲ証明スルモノナク
シテ則チ其被告ニ於テ証拠トシテ差入ルヘ

トハ当ラス原告之ヲ拒ムノ権アリ

一千八百七十九年二月二十五日東京上等
判所ニ於テ「ジャルテン、マセソン」会社ヨリ
後藤象二郎ニ係ル訴訟ノ審問
弋判所ヨリ「ユルクウツト」氏ニ向ツテ曰ク汝ハ
尚ホ法律ノ点ニ就テ「デニソン」氏ニ為ス可キ
答弁アリヤ
「ユルクウツト」氏曰ク吾夫ニハ長久ノ時間ヲ費
ス可キ事ナリ余ハタ、成ルヘキ文ヲ速カニ弋
決アランイテテ希望スルノミ
「デニソン」氏モ「ホルム」氏ニ問フテ曰ク足下ハ先キ
ニ「破山」ノ計算ニアラサル他ノ破業計算ヲ以
テ觀レハ一千八百七十九年一月一日ヨリ曰ク

十八年二月十三日ニ至ル迄ハ二十三万井ノ
利益アリタルヲ并明セシカモ破業計
算トハ元来其他ノ破山計算トハ全く異ナ
ルモノナリヤ
元来一般ノ破業計算ハ之ヲ兼用セルモノ
アリトモ其計算中斯ノ如キ結果ヲ
差出セルヲハ余ノ敢テ了知スル所ニア
ラス唯タ其利益トハ余カ吟味中ニ在セシ
条項ヲ除キ其他破山ノ百般ノ破業ニ
就テノ利益ヲ計算セシモノヲ云ヒシノ
足下ハ破業計算及ヒ前金計算等ノ利
益即チ利益ノ数額ヲ別ニ兼用ニ置キ

シヤ

此時¹エルクウツト^レ氏此等ノ問ヲ駁シテ曰ク此
等ノ事ハ余カ前審問ニ於テ并駁セシ如
ク此業令ヲ請求スル訴訟ニ就テハ毫モ
其關係ナリ且ツ被告人ノ今日負債ヲ償
却シ得可キ位地ニアルカ若クハ償却シ
得可カラサル位地ニアルカニ就テノ其問
題ハ裁判官ノ裁定後ニ起ス可キ問題ニ
シテ余ノ觀ル所ニ於テハ此等ノ問題ハ今
論ス可キ点ニヨラス
テニソシ^レ丸曰ク原告代理人ニ於テ然ラ此等
問題ノ此訴訟ニ就テ毫モ其關係ナキヲ
今日ニ至ル迄突顯セザリシハ實ニ不幸ナリ

ト云フ可ニ甘故他ナシ抑々此等ノ事ハ総テ
証人吟味ニ関スル問題トシテ若シ被告人
ヨリ原告人、并明セル負債ノ熟考ヲ為ス
時ハ徒ラニ数ノ無用ナル時間ヲ費サセ
スニテ直チニ被告ノ負債ヲ償却シ得
ルカ得サルカノ問題ニ及フ可ケレハナリ
此時弔判所ヨリ此等ノ問題ハ証人吟味中
ニ原告代理人ヨリ并駁セル問題ニ関スル
モノナリト決定ス

ホル山氏先キノ問ニ答ヘテ曰ク其利益ハ
一ノ計算中ニシテ之ヲ費用シ然レテ其算
用ハ「ジャルデン」マセソン「会社」ノ計算中ニ
アル可シト思考ス然レバ如何ナル計算ヲ

以テ其利益ヲ費用セシカ唇冊ニ載ルニアラサ
レハ今之ヲ想出スルニ能ハス
デニソシモ証人ハ唇巻ヲ示シテ曰ク足下ハ其
唇巻ヲ兼知スルヤ

否余ハ曾テ之ヲ見閲セシナシ
一千八百七十八年六月以前ハ総テ販賣セル
石炭ニ付テ五割ノ販賣世話料ヲ名算計算中
ニ算入スルハ元素「ジャルデン」マセソン「会社」ト
ノ仕来リニアラザリシヤ

此時「タルク」ウット「モ」ル「バ」前「條」ノ如キ曰一ノ理
由ヲ以テ此問ヲ駁ス
デニソシモ九日抑モ原告人ニ於テハ被告ノ原
告人ヨリ百三十万弗ノ負債ヲ負擔セルヲ理

由トエテ当^レ裁判所ハ禁令ノ請求ヲ控訴セリ然
ルニ原告代理人ハ此ノ如キ事情ニ依^リテ其被
告人ノ負債ニ関スル事実ヲ証明セシカタメニ
原告人ノ証人ニ拘^ツテ起セル問題ヲ弁駁スル
ハ大ニ怪ム可^シト

此時^ニ裁判所ヨリ此等ノ問題ハ証人吟味ニ於
テ起スヘキモノナリトシテ之ヲ廢棄セリ
テニソシ^レル又問^フラ曰ク足下ハ足下カ証人吟
味中ニ原告人カ請求ノ金額ハ被告人ニ對シテ
言^フテサレ^レニ^モ裁判ニ依^テ被告人ヨリ之ヲ償却ス
ヘキ方ヲ定^メラ^レシ^テ7年^間明^セセ^ルカ足下ハ此
裁判ノ被告人ニ於^テ果^シテ兼服セルヤ否ヤヲ
了知スルヤ

余ノ了知スル所ヲ以テスルニ此等ノ裁判ハ兼
服セラレザリキ然レモ余ノ曾^テ弁明セル如キ
些少ノ金高ハ之ヲ償却セリ
足下ハ此等ノ金高ヲ未^ダ償却セラレザリシ^テ
ヲ了知スルヤ

余カ岩^手社ヲ退出スル時迄ハ未^ダ償却セラレ
ザ^リキ然レモ其以後ニ至^テ○松ハレタルヤ否
ヤハ余ノ敢^テ了知スル所ニアラス
グリツヅルモ^レ先ノ請求ハ足^下カ証人吟味中ニ
セル^モ中^最モ重大ナルモノニア^ラザ^リレ
ヤ
余ハ其他ノ請求金高ヲ了知セストモ^モ余カ了
知スル所ニ依^テハグリツヅル^モ先ノ請求金額ハ

余ノ曾テ并明セル如ク二万九百四内外ニシテ
石川氏ノ請求毎高ハ四千四内外ノモノタリ
足下ハグリツグルルルノ請求ハ諾サレシヲ了
知セサルヤ

余ハ未タ十分決定セラレザルモノト信ス
岡本健三郎ノ請求ハ足下カ岩坑社ヲ退出スル
前ニ決定セラレサリシヤ

余ハ其決定セラレシヤ否ヤヲ想出セス
足下ハ斯ノ如ク能ク救タノ事件ヲ杰出スルモ
特リ此事ノミハ以テ之ヲ杰出シ能ハサルヤ
余ハ石炭坑ノ礦業現費トシテ松出スヘキモノ
ニアラサル支松ニ関スル事件ハ能ク之ヲ記憶
ス他ナレ此支松ハ一々余ニ之ヲ報知セルヲ以

テナリ

足下ハ口述ヲ以テ此ガノ電報ヲロベルトソン
氏へ告ケタリシヤ

余ノ記憶スル所ヲ以テスルニ余ハ其原稿ヲ写
テ同氏ニ交付セリ然レ其電報中ノ某報ハ
同氏ノ書冊ヲ借用シテ自身ニ之ヲ写セリ

此時テリソン氏也判官ニ訪フヲ曰ク余ハ此
ガノ原稿ヲ差出サセシメテ求ムト

是ノ如キモノヲ尚ホ保存スルハ固ヨリ当然ニ
アリスト証人ニ答弁セリ

テニソン氏又問フテ曰ク此等ノ電報ハ足下任
テ其原稿ヲ造レルヤ又ハ之ヲ写セルヤ

余ハ其原稿ヲ造レル

言法

言法

其交付セシ写ハ足下ノ写セル正シキ写ト同物
ナリシヤ

此等ノ交付セシ写ハ之ヲ印刷ノ写ト比較シス
テ正シキ写ト見認ナリ

如何ナル人ニ依テ比較サレシヤ
余並ニロベルトソシカノ兩人ニ依テ

此等ノ交付セシ写ハ之ヲ足下カ記シタル原卷
ト比較セシヤ

否
然ラハ足下ハ何ヲ以テ此等ノ交付セシ写ハ偽
テ足下カ記シタル原卷ノ正シキ写ナルヲ確

然并明ニ得ルヤ
余ハ印刷ノ写ト此等ノ交付セシ写ヲ比較セシ

ニ彼是お符合セリ

足下ハ曾テ足下カ原卷ヲ印刷ノ写ト比較セシ
イアリヤ

余ハ之ヲ比較セシイアリヤ否ヤヲ記憶セズ然
レモ印刷ノ写ニ記シタル意味ハ余カ報知セシ

ト欲セシ意味ト同一様ナリシイハ之ヲ兼知ス
然ラハ足下ハ此等印刷ノ写ニハ同一様ノ言詞

ヲ揚ケシイテ了知セサルヤ
余ハ其言詞ノ同一様ナリヤ否ヤ了知セスト

魚氏其意味ノ同一様ナリシイハ之ヲ了知ス
是レヨリコルクウツトモホルルモニ間フテ曰

ク足下ハ曾テ足下カ原卷審吟味中ニ船積ノ純益
金ヲ括取ラス且ツ結算セサリシイテ并明セシ

カ一体何時比ヨリ結算セザリシト云フナリ
 一千八百七十八年四月ヨリ余カ炭坑社ヲ退
 出セシ時迄ハ苟クモ會計上ノ地位ニ依ラ船積
 ノ純益金ナルヲ判然タル上ニハ常ニ之ヲ記
 載セリト虽モ余カ十一月ノ初メニ於テ炭坑社
 ヲ退出セシ後ハ當時未タ結算ノ終ラサル船積
 ノ純益金ニ就テハ毫モ之ヲ松入サリキ
 テニソシモモノ尋問セル此等ノ電報ニハ破山事務
 ノ當時ノ景況ヲ示シ為スヤ
 テニソシモモ此問ヲ駁シテ曰ク余ハ破山ノ景況
 ニ就テハ余カ對審吟味中一モ其問題ヲ起セシ
 ナシモ唯タ余カ電報ニ就テ起セシ問題ハ草ニ

其電報ト及ヒ其電報ノ正確ナルヲニノミ聞セ
 ンモノナリト

此時此問題ハ之ヲ廢棄セラレタリ他ナシ原告
 代理人ノ再ヒ証人ヲ審問スルニ就テハ苟クモ
 被告代理人ヨリ其問ヲ起シタル事件ニアラサ
 レバ之ヲ尋問シ能ハサルモノニシテ此問題ハ
 被告代理人ヨリ曾テ之ヲ起サレハナリ

原告代理人

モンテীগ、コルクワット
 イル、ホルム

附録

明治十二年二月廿五日付録

一 被告代理人ホトムニ對シ証取調ヲ始ム

デニソシ問ヲ付

原告代理人曰

一 破産云々ノ廉ヲ問フヘキトハ己ニ過般判
事ノ命アリ然ルニ該問ハ該件ニ關係マサ
ル様考アルニ付之ヲ拒ム云々

デニソシ曰

一 被告代理人カ問フニハ原告代理人カ問ヒ
シニラ問返ヌナリ云々

判事曰

原告代理人カ問ラシ所ニ付被告代理人カ

明治十二年二月廿五日付録

之ヲ伺返スハ可ナリ

原告代理人曰

一 終リ、伺ハ原告代理人ハ伺ハス

判事曰

一 原告代理人ハ伺ハサルハ伺フヲ得ス

再ヒ伺扱調ヲ始ム

被告代理人デニワシカ千八百七十八年六月迄

ハ石炭賣捌高百分ノ五ノ手数料云々ノ伺ヲナス

併

原告代理人此伺ヲ拒ム

被告代理人曰

原告代理人ハ該差留ヲ致シハ被告カ百三

十一万四ノ差債アル云々ニ付控訴スル

ル此伺ヲ拒ムハ甚ク怪ムヘシ云々

判事曰

一 該伺ハ本訴ニ属スルヲ以テ止ムヘシ

一 被告代理人デニワシニ伺返シヨラス

一 原告代理人ホームニ對シ再ヒ伺扱調ヲ始ム

一 原告代理人ハ石炭坑ノ右様ハ電信ノ文面ニ以

テ記載セシヤ云々ニ伺ヲナス

被告代理人之ヲ拒ム

判事曰

一 被告代理人カ伺返シ、案件ト呈テラ以テ該

伺ヲ止ムヘシ

原告代理人再伺扱調ヲ了ス

判事曰

此上ハ原被ノ差出シタル論希キヲ熟シ
裁決ヲ与フニ至ルヘシ尚可調フヘキ
レハ差出ス可シ

分九百千子

高島石炭礦ノ件ニ付志シ
密法及ニ指令
并、原簿ノ口供等外紙ヲ
申付テ也
明治十二年三月七日

大木司法

大隈文苑ノ版

新聞採訪者ヲ退去センノ原被代言
人共ニ委審名前ノ儀ニ付密話スル丸
ノ如シ

原被兩造ニ於テ若シ今後委審者撰用スル
人物ニ付一致セサルハ法庭ニ於テハ今横
濱ニ在ルタルボツト申人ハ計美ノ職務ニ從
事シ且其性質正直ニシテ素ヨリ原被間
ニ關係ナキ人ノ由兼テ評判承ルニ付此
人ヲ選用シ然ル可キ歎ト折角勘考中ナ
此旨密話ニ及フ

明治十二年三月四日

同
省

去ル二月廿四日ノ被告代官人ノ伺ニ對シ指

令スル先ノ如シ

委審者ノ判定ハ終尾ノモノタルトハ委審者ニ
於テ其判定ヲナスニ際シ而シテ、例ハ委
審者カ其判定ヲ為スニ際シ、例ハ原被告ヨリ
破ル、例ハナキハ其負債金額ノ判定ハ決シテ
明白ナル誤謬例ハ書記ノ誤又ハ算術ノ誤ニ
因リ一千ノ代リニ一万ト書キタルカ如シラ法
廷ニ申告スルモ法廷ニ於テ之ヲ改良スルノ許
サストノ意ニアラス然レ氏如斯論点ヲ判スル
法廷ノ專權ニ屬スルモノナリ此況ヨリ以テ被

告代言人ノ次キ、伺即ラ委審者ノ判定ハ何等
、法廷ヘモ控訴スヘカラサルモノナリトナス
、付テ、伺モ亦了解スルニ可シ又被告
代言人ノ必ス承認スヘキ如ク委審者ヲ撰用ス
ルノ命令然ハ法廷ノ豫審ノ命令ナレハ之ヲ為
シタル時、當リ直ニ之ヲ控訴スルヲ得ヘキモ
ナリ

明治十二年三月四日

右御指令ノ趣承知仕候

後為象三郎代言人

被告 星 亨

被告代言人申上候

先自廿四日付テ演説案中並ニ本日御指
令奉拜ニ計美人ノ事實上ノ判決ニ付、
シテ決シテ何レノ裁判所ヘモ控訴スヘカ
ラスト有之抑モ日本國中ニ於テ政府即チ
立法ヲ取ル知ノ官司ノ外一段法律ヲ以
テ人民ニ附與サレタル權利ヲ増加シ又ハ
減縮スルハ能ハサルナリ故ニ當リ願フ所モ
明治十年第十九号ヲ以テ人民ニ附與サ
レタル控訴權ヲ増加シ又ハ減縮スルハ能
ハサルモノナリト思考ス

右ノ如クナルヲ以テ前記ノ兩方ノ御指
令中 控訴権ヲ減縮スル 部分ハ無効ナリ
モノニシテ本件ノ原被ハ勿論日本國人民
カ之レヲ尊奉スルニ及モノナリト思考
ス

判事曰

追テ控訴ニ及フ可シ

被告代官人申上候

右申上タル一ヶ條ヲ駁除キテ被告代官人
等ハ先月廿四日ノ控訴案ニ指示シタル
續ニ控訴ニ一千八百七十六年三月三十日
以來ヨリ一千八百七十七年五月三十日マ
テノ間ノ計算ヲ吟味スルニ必要ナリ

別ニ故障無ク候

但シ前項中千八百七十七年五月三十一
日マテト云フ訳ハ原告ヨリ被告へ差越
シタル計算書ハ同日マテノ計算書ニ右
之如ク以テノ故ニ及之候

右之通お通所法ナク候

明治十二年三月四日

右

星 真 郎

同 大 署

明治十二年三月四日

後藤象二郎代理人

被告

星

亭

口供

判事曰

一 星亭ニ於テ計算人 櫻用事件申立ツ可シ

被告代理人申上矣

原告代理人及ヒ被告代理人ノ一ナルデニ

ソレト二月二十八日ニ於テ合合ニ計算人

ノ一ヲ決ミタル由本月一日ニ於テ自分ハ兼リ

其翌日ハ日曜日ニ當リ矣仕合ニテ未タ何人

ヲ計算人トシテ撰ムヤラ決スル暇ナリ矣

此後原告被代理人ト相決ノ上或人ヲ計弄
人ニ撰ムに組ニ有之矣
被告代理人申上矣

原告代理人ハ恰モ欲スル処ヲ得スレテ不
満ナルハ見ノ如ク其自分ノ欲スル処ヲ成
サントスレハ其自分ノ云フ処ノ非ナルニモ
拘ワラス一概ニ喋々ト論シ而シテ他人カ
云フ処ニモテ道理ニ於テ是レトモ其欲サ
ル処ナレハ務テ之レヲ排斥セリ如斯ナル
行為ハ實ニ嘲笑ス可キモノナリ
原告代理人ハ被告代理人カ只今申立タル
控訴権減縮ノ指令ハ効無キモノナリト
云タルハ既ニ時機ニ後レ今ニ到ラズハ

不都合ナリト云フモ個ハ原告代理人
カ前述ノ如キ行為ヨリシテ考ヘタルヲ以
テ然ルヲモトモ被告代理人ハ決シテ時
機ニ後レタルモノニ処ラスト存ス
又原告代理人ハ被告代理人カ本日申立タ
ル千八百七十七年五月三十日マテノ計
算ヲ検査人ニ委スルトノ一ハ成丈テ被告
ニ於テ本訴ヲ遅滞セシムルノ心意ナリ
ト云フトモ決シテ然ラストス
是又蓋被告ハ原告代理人カイカニ被告
ノ此ノ申立カ本訴ヲ遅滞セシムルノ原
由ニナルヤヲ明知セストモ矢張原告代
理人ノ夫ノ自分勝手ノ臆測ヨリ起リ

タル論ト想像メ

又原告代理人ハ被告カ千八百七十七年
五月三十一日マテノ計算ヲ成スト云フハ
本月初三ノ間キタル採申立タリ然ルニ原
告ハ被告ノ答弁ノ各又ハ其他ノ各ニ於
テ原告ハ一千八百七十七年五月三十一日
マテノ計算ヲナシタルモ其後ハ被告
ガイカニ催促スルモ計算ヲ被告ニ送
ラサルナリ依テ原告ハ被告トノ契約
ヲ破リタルナリト記載シアルヲ忘却
シタルナルベシ宜シク被告各ノ各ボニ附キ
熟讀スベシ
又原告代理人ハ計算各ハ始終原告ノ

手ニ有ルニ付キ後藤又ハ其代理人カ末
リテ検査スルヲ得ヘシト申立ルモ原告ト
被告ト一千八百七十五年七月一日ニ結ビ
タル契約各ヲ見ルニ其各中ニ明了
ニ原告ハ計算各ヲ被告ニ送ルナリキ
義務アリテ被告ハ之レヲ受取ルナキ
権利アリト記載シアルナリ而シテ被
告ハ自ラ原告ノ家ニ付キ計算ヲ見ル
義務ナキナリ之ニ因テ是レヲ觀ルニ原告
カ計算各ヲ被告ニ送ラサルハ即チ契約
ヲ破リタルモノナリ焉ソ被告カ原告ノ
家ニ付キ検査セサルヲ責ムルノ理アラ
ンヤ

右述ノ如ク論ニ来レハ原告代理人ノ
行為ノ十八ヤ實ニ此ノ申立ノ冒頭ニ於テ
譬言タル以キ不滿ノ上見ノ行為ナリト
申スモ又宜ヘナラン

又被告ハ右ノ如ク十八ニ付控訴権減縮
ノケ条ヲ除キ一千八百七十七年五月三十一日
マテノ計算ヲ検査人ニ付シテ一ハ尤モ
願フ所ニ有之矣依テ原告代理人ハ自分
勝手ノ申立ヲ成サズ速カニ当廳ノ去月廿
四日ノ指令ニ遵ヒ計算検査ニ取掛ル様
御命ニ有之矣

右之通相違無任以矣

右

明治十二年三月四日 星 亨 印

明治十二年三月四日

東京七判所一千八百七十九年三月四日對審

ヂヤルヂニマゼン會社ヨリ後藤象二郎ニ對

スル訴訟原告被告人口供

カルクワード氏

余ハ委審者ノ事ニ付テニソン氏ニ私會セシ
處其際曰氏ハ余ト共ニ某人ヲ委審者ニ撰
定スベキ全權ヲ有セザリシカ故ニ曰氏并ニ
星氏ニ於テ該要權ヲ受クルノ期迄該商
議ヲ延期セリ余ハ次ノ二日間ニ被告代
言人等ト再會スヘキ一ヲ約シタリ尤其日
限ニハ被告代
言人等ニ於テ該要權ヲ受クルヲ然
レハ此再會ニ於テ何レニカ確定スルニ至ルヘシト余ハ
思考ス若シ該事確定スルニ能ハサルハ各面ヲ

以テ決事実ヲ当法廷ニ申告シ法廷ニ於テ自ラ委
審者ヲ撰定アラシムラフ願フナラン
デニソン氏

原告代官人カ陳述セシ私舎ノヲニ関シ余ハ去ル二月
廿八日迄原告代官人ヨリ更ニ決事ニ付決判セ
シテナキナリ而シテ余ハ原告代官人ニ於テ星氏ト
通信セシ事件ノ外何事モ知ラサルカ故故私
會ノ中迄ハ調査人ヲ撰定スルノ権理ヲ受クベキ
一ヲ為サハリシ

然レ氏原告ヨリ未タ被告ハ
ヲ調査スル一ハ余等ニ於テ拒スルナリ何トナレ
ハ決計弄ハ何等ノモノヲ
ハ之ヲ洋悉調査スルノ権ナキカ故ナリ

カルクウードキ

委審者ノ報告届ノ終尾ナルハ
廿四日并ニ本日ノ命令ヲ星氏ニ於テ不服ヲ懷シ
ナレハ必ラス曰氏ニ於テ他ニ採用スヘキ方法ヲ有
スルナラン然レ氏曰氏ニ於テ今人民ノ権理ヲ当
法廷ニテ主張スルモ曰氏之ヲ期ニ後レタルモノ
ト思考セサルヘカラス

被告代官人ニ於テ千八百七十七年五月三十一日
後ノ計弄ヲ委審者ニ委子調査セシムルヲ
強ク拒スルト雖モ法廷ニ於テモ亦余ニ於テ
モ此拒拒ハ只迂延ヲ為スノ目的タルト信ゼザ
ルベカラス故ハ原告ニ於テ決日限後ノ計弄ヲ
依然後藤氏并ニ曰氏ノ委任ヲ受ケタル代理人ニ現

以テ決事實ヲ当法廷ニ申告シ法廷ニ於テ自ラ委
審者ヲ撰定アラシムラハ願フナラン
デニソン氏

原告代理人カ陳述セシ私舎ノヲニ関シ余ハ去ル二月
廿八日迄原告代理人ヨリ更ニ決事ニ付決判セ
シヲナキナリ而シテ余ハ原告代理人ニ於テ星氏ト
通信セシ事件ノ外何事モ知ラサルカ故故私
會ノ中迄ハ調査人ヲ撰定スルノ権理ヲ受クベキ
トヲ為サハリシ

然レモ原告ヨリ未タ被告ニ附与セサル処ノ計算
ヲ調査スルトハ余等ニ於テ拒スルナリ何トナレ
ハ決計算ハ何等ノモノヲ含有シアルヤヲ知ラサレ
ハ之ヲ洋悉調査スルノ権ナキカ故ナリ

星ノ口供

カルクウードキ

委審者ノ報告届ノ終尾ナルヲニ付当法廷ノ去ル
廿四日并ニ本日ノ命令ヲ星キニ於テ不服ヲ懷シ
ナレハ必ラス曰氏ニ於テ他ニ採用スヘキ方法ヲ有
スルナラン然レモ曰氏ニ於テ今人民ノ権理ヲ当
法廷ニテ主張スルモ曰氏之ヲ期ニ後レタルモノ
ト思考セサルヘカラス

被告代理人ニ於テ一千八百七十七年五月三十一日
後ノ計算ヲ委審者ニ委子調査セシムルヲ
強ク拒スルト雖モ法廷ニ於テモ亦余ニ於テ
モ此拒拒ハ只迂延ヲ為スノ目的タルト信ゼザ
ルベカラズ故ハ原告ニ於テ決日限後ノ計算ヲ
依然後藤氏并ニ曰氏ノ委任ヲ受ケタル代理人ニ現

以テ決事實ヲ当法廷ニ申告シ法廷ニ於テ自ラ委
審者ヲ撰定アラントラ願フナラン
デニソン氏

原告代言人カ陳述セシ私舎ノクニ関シ余ハ去ル二月
廿八日迄原告代言人ヨリ更ニ決事ニ付決判セ
シトナキナリ而シテ余ハ原告代言人ニ於テ星氏ト
通信セシ事件ノ外何事モ知ラサルカ故故私
會ノ中迄ハ調査人ヲ撰定スルノ権理ヲ受クベキ
トヲ為セリシ

然レモ原告ヨリ未タ被告ニ附与セサル処ノ計算
ヲ調査スルトハ余等ニ於テ拒スルナリ何トナレ
ハ決計算ハ何等ノモノヲ含育シアルヤヲ入ラサレ
ハ之ヲ詳悉調査スルノ権ナキカ故ナリ

星ノ口供ニ疑クモノナリ

カルクウードモ

委審者ノ報告届ノ終尾ナルコト付当法廷ノ去ル
廿四日并ニ本日ノ命令ヲ星モニ於テ不服ヲ懐ク
ナレハ必ラス曰氏ニ於テ他ニ採用スヘキ方法ヲ有
スルナラン然レモ曰氏ニ於テ今人民ノ権理ヲ当
法廷ニテ主張スルモ曰氏之ヲ期ニ後レタルモノ
ト思考セサルヘカラス

被告代言人ニ於テ一千八百七十七年五月三十一日
後ノ計算ヲ委審者ニ委子調査セシムルヲ
強ク拒スルト魚モ法廷ニ於テモ亦余ニ於テ
モ此拒拒ハ只迄迄ヲ為スノ目的タルト信ゼザ
ルベカラス故ハ原告ニ於テ決日限後ノ計算ヲ
依然後藤氏并ニ曰氏ノ委任ヲ受ケタル代理人ニ現

出ニ十分調査セシムルヲ促セハナリ
余ニ於テ被告ノ一千八百七十七年五月三十一日
後ノ計算ヲ委審者ニ委子シメザルノ議論ハ
未タ曾テ聞カサルナリ法廷ニ於テ定テ承認セラ
ル、如ク被告ノ目的ハ本件出訴日即チ昨上月
一日迄ノ惣計算ヲ委審者ニ委子調査セシム
ルニアルハ判然ナリト余ニ於テ思考スルト虽氏只
原被間ノ争点ハ何年何月何日ヨリノ計算
ヲ起スニアルナリ被告ノ法廷ノ命令ニ對スル論弁
ハ實ニ鎖細ノ一ニシテ只時日ヲ徒費スルモノト
信ス
過日審問ノ際法廷ハ其命ニ於テ計算
調査ノ基本ニ付原被ノ意ヲ聞カンテ陳ヘラレ

タリ及令未タ原被間ニ於テ委審者ノ採用ヲ
為サ、ルモ之ヲ採用スルハ近キニハバ若人ニ付
原被間ニ於テ一致セサルハ法廷ニ對シ其採用
ヲ乞フモ難計ト虽氏若シ法廷ニ於テ余ノ基
本ニ付テノ意ヲ聞カント欲セバ之ヲ短述セン
カルクワート氏
被告代言人ノ人ヲ誹謗スルノ陳述ニ付余ハ法
廷ニ於テ余カ不満ノ童兒ナルマ又ハ被告代言
人カ一般ノ老人ノ如ク軟弱ニシテ且ツ心衰エタル
モノナルマテ判決セラレサルバト思考スレハ余ハ此誹
謗ニ付論弁セク
委審者ノ採用及ヒ其職守ハ原被告ニ於テ契
約ヲ實踐セタルマ否ヤノ点ニ付更ニ關係ナキモノ

ナリ、該事ハ全ク負債ノ論点ト相異ナルモノナレハ
法廷ニ於テ之ヲ別ニ判決セラレ、ナラン
原告ニ於テ契約ヲ実践セタルイラ、唇面ヲ以テ
証明スルノ時、来ラハ原告ハ之ヲ証明スルナラン
然レ、氏若シ然ラサレハ被告ノ承諾ヲ以テ曰事
ヲ証明スルニシテ、其代、言人ノ本件出訴日迄ノ惣
計算ヲ委審者ニ托シ、調査セシメントスルノ目的
ハ、過日ヨリ陳述及ヒ去月七日附ノデ、ニソ、ン氏
各翰ヲ以テ明カナリ、蓋シ此各翰ハ、曰月八日ニ
於テ余ヨリ法廷ニ差出タリタルナリ
終ニ望ミ、余ハ法廷ニ對シ、次ノ審問日ニ於テ
委審者ニ托スル計算ハ、何カ、計算ヤ、且ツ
若シ原被告ニ於テ、後日前ニ於テ、一致セサルハ

ハ、誰ヲ委審者ニ撰用スルヤノ点ニ付、確告アラシ
ク、テ乞ヒ、且ツ、同時計算調査ノ基本ニ、原被
告ノ意見ヲ聞カシム、テ望ム

原告代、言人

カルクワード(手記)

デニソン氏

今法廷ノ暗告サレタル審判者ノ右前ハ
原被双方ニ於テ一致ニカタクモノト思
考ス其故ハタルボウト氏ハ日本ガゼット新
聞社ノ編輯長ニシテ已ニ本件ニ関シ其
審問ノ事ノミナラス若シ法廷ニ於テ原告
ヲ直者ト判決セサルハ日本政府ハ英西
ヨリ金額ニ感^ス得ルハ純ハサレベシトノ
社説ヲ数度發兌セシナリ加之屢々嚴
シタル偏説ヲ吐キタリ余ニ於テタルホ
ソト氏ハ善良ナル計算人ト思考スルト魚
氏本件ノ計算ヲ調査ノ為メニ撰用ス
一キ終リノ人物ト信ス

計美人ヲ撰用スルニ付日本ノ計美人ヲ
余キタルカ故ニ法廷ニ於テ計美人ヲ撰
用スルニハ英國人ヲ除キ他人ヲ撰用スル
方法ハ被告ニ於テ宜キモノト信ス原告
代言人ニ於テ日本ノ計美人ヲ除クイフ
願ヒタルカ故ニ被告ニ於テモ英國人ヲ除
カントイフ願フナリ

カルクウード氏

余ニ於テタルボット氏ノ名譽及ヒ同氏ノ正
実ナルイフ逸傍ニタルト思考セサルベカラ
ザル被告代言人ノ陳述ニ對シ破論セント
スル「タルボット氏ハ今此處ニ在リサルカ故ニ
余ハ「タルボット氏ノ横濱ニ於テ尤モ有名ナル

人物ニシテ且ツ數年間横濱ニ居住シ尤
モ古老ノ計美人ナリコトニシテ氏ノ説カ如
ク「タルボット氏ハ「ガゼット新聞社員ニシテ本
件ニ付キ論説ヲ吐キタリト虽モ該事ハ
計美人トシテノ能力並ニ其人物清廉ナルイ
フ更ニ關係ナキモノナリ計美人ハ誰ナリ
氏其任ニ適シ其置位ヲ占メ善性ニシテ有
名ナルモノナレバ原告ニ於テ更ニ関セザルナ
リ
日本人ヲ除キ委審者ニ為サ、ルカ故ニ英國
人モ亦除クベシトノ被告代言人ノ論并ハ
余ニ於テ重大ノモノト信セズ
計美ハ外國ノ方法ニ從ヒ且ツ英語ヲ以テ

ナサレタルモノニシテ余ハ如此キ計美ヲ取扱フベ
キ相当ノ日本人ヲ識ラサルガ故ニ日本人ヲ除
キタルモノナレハ此理由ヲ以テ英國人ヲ除
クノ理ナカルヘシ

デニソン氏

若シ其職任ニ堪ユベキモノアル中ハ調査人
ニ日本人ヲ撰用スルヲ原告代理人ハ承諾
スルヤ否ヤ余ハ之ヲ原告代理人ニ問フ元
来日本人ヲ除キタルハ被告ノ為メニ偏
頗ノ意ヲ起サントノ恐レヨリ之ヲ除キタ
ルカ故ニ英國人モ亦原告ノ為メニ偏頗
ノ意ヲ起サンヤノ理由ニヨリ英國人ヲ
委審者ニ撰用スヘカラザルコトヲ願フナリ

カルクワード氏

テニソン氏ノ記憶力ノ弱キコトハ實ニ驚ク
ヘキナリデニソン氏ニ於テ委審者ノ撰用ニ
付余ノ論并ラ寫ト縷讀スルナレバ必ス
日本人ヲ除クコト付余ノ陳述シタル理由
ヲ知ルナラン而シテデニソン氏并星氏ニ於
テモ委審者ノ外國人タルハ至当ノモノナル
コトヲ知ルナラン

デニソン氏

此ノ趣意ニ付陳述セシ論辯中ニ外國人
ナル語ヲ余ニ於テ用シコトナキハ確實ナリ
カルクワード氏
外國人ナル語ヲ常ニ用ヒタリ而シテ此語ハ英國

人ヲ含有シタリ

不取る也

高崑石炭坑一件ニ付本月十一日東京上
等裁判所於而申渡候判決書昨
十二日東京裁判所於而之演説書
別紙或通御廻申進候也
明治十二年三月十三日大木司法卿

大隈大藏卿殿

司法卿

東京上等裁判所

原告人横濱其他ノ地ニ於テ
組合高島ラ営ムヂヤルゲー
マゼソン会社負

ロベルト、ヂヤルゲー
ウキリアム、ケスウキツク
ヘルベルト、セントリキジユル、マクニアク
フランシス、バルケリーシヨソソ
シヨンペル、イルウキソク
ウキリアム、パテルソソ
ゼームス、ジヨソストン、ケスウキツク

右代言人

横濱居留英國人

同法省

モンテレーグ、カルクウード

被告人

東京府芝区高輪南三十五番地

士族

後藤 象二郎

右代言人

東京府京橋區日吉廿七番地

平民

星

自了

横濱居留米國人

エツチダフリウデニソン

明治十一年十一月十二日西曆千八百七十八年十一月十二日ヲ以テ東京裁判所ニ於テ申渡タル原

告ノ差留申告訴訟ニ對シタル判決ヲ不服トシテ當廳ニ控訴シタリ依テ判決スル九ノ如シ

差留申告控訴ノ判決

抑モ當控訴ハ東京裁判所ニ於テ該件ノ書類且リ諸證書ニ其ノ他ノ証拠ヲ依テ原告ヨリ出訴ノ差留申告解ラテ訴スルヲ拒ミタル判決不服ノ控訴ナリ而シテ其差留申告書類ハ即チ本訴審問迄被告ラシテ當人テ長壽縣トニ在ル石炭山石炭坑ヨリ生産スル石炭ヲ賣却シ其賣却ヲ促シ其高事ヲ處分シ或ハ石炭ヲ他人ニ引渡シ又原告人ノ他人ヲ以テ該石

炭山石炭坑 ヲリ生産スル 石炭ノ注文ヲ受ケ
之ニ應ヒテ石炭ヲ供給シ又タ當今該礦
坑内外ニ設置セル諸機械并ニ其内屬
品ヲ使用シ或ハ之レニ関涉シ或ハ該礦山
或ハ其一部タリ氏之ヲ賣却シ或ハ抵当ホ
ノ如キ妨礙ヲ負ハシメ或ハ之ヲ為サント勤
或ハ依然該礦業ニ從事シ原告ニ對シ
ル被告カ義務ヲ自ラ其義務ノ施行ノ
妨ニ為ル方法ニテ石炭山石炭坑及ヒ法
機械等ニ直接或ハ間接ニ関涉セサル
採萬事差留ヲ請求シタルモノナリ
原告ハ英國人民ナリ裁判官ハ原告及
方ノ証拠ヲ調ヘ且ツ其論辯ヲ聽キタ

ル後其願書ノ大略ヲ復讀シ其判事ヲ
尤ノ如ク下シタリ
法廷ハ原告ノ情願ヲ以テ直チニ差止
令ヲ發行スルニ十分ノ善証ナリト認ムル能
ハス況ニヤ其提供スル書類中日本坑
法ニ抵觸スルモノアルカ如ク現ハルハ
ニ於テラヤ故ニ法廷ハ結約ノ法律ニ
適ヒタルヤ否ノ疑ヲ解ク迄差留令ヲ
發行スルヲ能ハス然レ氏法廷ハ差留令
發行ラ拒ムラ以テ原告要求目下非
法ナリト判定スルニ非ス又タ其訴訟ヲ
起ス可キ權利ヲ有セザルモノナリト審
決スルニモアラズ原告即令十分ノ

ル善証ヲ提供セサルヲ以テ差当令ノ
如キ急激ナル處分ヲ施行スル一
肯ゼス

原告ハ右判決ヲ不服ナルモノトシテ控訴
シタルニ其願書及ヒ之ヲ補翼スル所ノ
論辯書中ニ該不法ノ理由ヲ明表セカ
リシモ多分ノ論辯ハ之ヲ為レタリ何ト
ナレバ原告代言人ノ進呈セシテ論弁
主ハ尤ノ數言ヲ以テ之ヲ結ヒタルハナリ即
チ下等裁判所ノ判決ハ當ニ不法ナルノ
ナラズ又タ悉ク正當ノ正義ニ反シタルモノ
ナレバ該判決ハ勿論其由ニテ基本モ不

タ不當ナルモノナリ
原告ハ願書及ヒ之ニ添フル所ノ書類且
ツ時々進呈ス可キ証拠ニ因リテ當法廷
ニ控訴シ差當令ヲ請願スルカ故ニ
當裁判所ハ單ニ下等裁判所ノ判決ニ
當不當ヲ決定スルノミナラス控訴審何
ニ由リ其差當令ヲ發スルヤ否ヲモ判定ス
ルヲ以テ其職務ナリトス
今將サニ下サントスル判決ハ全ク其思慮
ヲ異ニスルカ故ニ被告ノ兩裁判所ニ於
テ當差當願ニ對シテ抵抗セシ一般ノ
点件ヲ論スルヲ要セズ然レモ原告ノ
下等裁判所ニ進呈シタル訴狀ノ文

及ヒ文言并ニ當裁判所ノ管轄ノ占
ニ就テ被告代言人ノ擧ケタル所ノ持
種ナル故障ハ經令期機ニ後レズシテ
(實際後レタリ)為レタルモノトスルモ
此上等裁判所ノ于カル上ハ毫モ其効
ヲ有セサルモノナリ」當裁判所ハト等裁判
所ニ進呈セシ原告ノ願書ハ實ニ順次
ニ適フタルモノト思考シ并セテ當廳ハ
右官籍ノ占ニ就テハ原告ノ控訴中告終
ニ至ラズ受理スルヲ得ヘキモノト斷然判
定ス
先ツ最一ニ原被間ニ諸取引ヲ約シタル時
及ヒ其以前ノ玩法ヲ視ルヘシ而シテ當訴

訟ヲ判交スルニ照要ナル玩法ハ即チ我カ
日本帝國ノ立法權ヲ有スル太政官ノ
布告ニシテ當事件ニ関スル第一ノ布告
ハ即チ壬申三月廿七日陽曆四月廿年
九月四日西曆一千八百七十三年九月
四日ヲ以テ發令セシモノナリ其第一條
中日本帝國ニ在ル鑛物ノ總テ日
本政府ノ所有タリトシテ明文アリ而シテ第
二條ハ尤ノ如シ
第一條ニボテ如ク鑛物ハ皆政府ノ所有
タリ故ニ諸府縣管轄下ニ於テ國民ノ
開採セルモノハ悉ク政府ヨリノ請負者
ニ依リテ開採スルニ因テ請負ノ鑛山ヲ以テ

秘^カ借金ノ質物トスルハ決^シテアルベカラサル理ナリ

但請負年限中、稼方ヲ引讓ヘキ目的ヲ以テ金銀借貸ヲナス者ハ亦以テ地方官ノ謄印ヲ受クベシ若シ地方官ノ謄印ナキハ後日許可起ルトモ一切礦山ニ關係セサルモノトス

第三條ハ九ノ如シ
外國人ハ借金ノ引當テ請負鑛山ノ稼方ヲ讓ルハ決^シテ不相容事

又タ同年即チ明治六年七月廿日西曆千八百七十三年七月廿日 改定第二百九十五号ノ布告日本坑法ト題号ノモト完全ノ

心得ヲ太政官ヨリ發令セリ

其第三條中凡ソ日本帝國ニアル鑛物ハ都テ日本政府ノ所有タリトノ明文再ニ載出ス

第四條ハ左ノ如シ

日本ノ民籍タルモノニ能レハ試掘ヲ作シ坑區ヲ借リ坑物ヲ採製スルノ本主或ハ組合ト成ルテ得^ルニ坑區ノ割合及テ採掘ノ若シ之ヲ犯ス者ハ其ノ業ニ屬スル所有物ヲ官ニ没入シテ其業ヲ禁止ス可シ又タ明治七年十一月十日西曆千八百七十四年太政官發令ノ布告第百廿四号ニ白ク

玩物ノ儀ハ明治六年第二百五十九号
布告日本玩物ニ揚載ノ通政府ノ可
物タルハ勿論ニ有任令何玩許可ラ
受供共其玩中將來同業ノ品ヲ引當
ニ所シ外國人ヨリ至テ借入又ハ先拂
約定等ノ儀ハ不成立此条此旨布告
候事

以上記スルモノハ原被間ニ請有引ラ
約シタル時及ヒ其以前ノ玩物ニシテ現
時ニ至ルマテ改正ノ慮ナシ
右ノ如クナルヲ以テ次ニ原被告間ニ為
シタル諸取引等ハ幾分該玩物ニ通ス
ルヤ否ヤヲ視ルヘシ「原告ハ被告ニ仍

確証セラレタル本件ノ歎願者及ヒ其他ノ
証書類ノ外ニ千八百七十五年七月一日
付ノ條約書ニ通テ裁判所ニ進呈セリ而シテ
右條約書ノ一ハ被告ト「エドワルド・ウイット
ー」トノ間ニ結ヒタルモノニシテ其條約中
該條約ハ「ゲヤルデン・マゼリン」商社ノ考ニ
ドワルド・ウイットー」ガ結ヒタルモノト明言アリ
又タ他ノ一通ハ「ゲヤルデン・マゼリン」商社ノ
名ヲ以テ原告カ被告ト約定セシモノナリ
而シテ該約条款中被告ノ自分原告ヘハ對
シタル負債ト認諾シタル若干金円ヲ約因
トシテ前述ノ高島鑛山及ヒ之ニ沿フル隣
島鑛山ニ屬スル諸物品即チ機械及ヒ

其附屬品ヲ悉ク原告ニ引渡スヘシ又タ
亦述ノ負債金七十六萬八千圓ノ元利共皆
濟ノ期ニ至ルマテ被告ノ為メ原告自ラ或
ハ用達ニ依テシテ該鑛山ヲ管理シ且ツ石
炭採穿ニ從事スルニ云々ノ文アリ又チ才ニ
條中原告ノ該鑛山開採ノ為メ仕拂タル
入費ノ預備償金トシテ產出スル所ノ石炭
ノ第一ニ取押スル權ヲ原告ヘ附與スルノ文
アリ加之若シ原被告間ニ於テ不慮ノ事
件ヲ生スル時ハ該鑛山ヨリ產出スル所
將來ノ純益ヲ多割スル條約アリトモ
該條約ヲ以テ該鑛山ヨリ金七拾六萬
八千圓許ノ負債ヲ清還スルニ足ル利益ノ

生セサル節ハ原告ノ被告或ハ其他ノ對シ若
チ金圓ヲ清還スルノ權ヲ障礙セサル者ナリ
此契約ノ前述ノ坑法ニ抵觸スルハ唯此契約
ヲ坑法ニ對照スルニ以テ其點ヲ認スルニ
足ル可シ

該二個ノ契約ノ一ナル原告ノ為メニエドワ
ルド、ウヰットール氏ノ名ヲ以テ為シタル契約
ハ其表面ニ於テ陽ニ坑法ニ觸ルルノ點ナシ
トモ此ヲ熟驗スルハ其實該坑法ニ觸ル
ルモノアリ且ツ此契約ノ譯書タルハ唯「エド
ワルド、ウヰットール氏」(詳況スルハ既ニ前述
セル契約書中載スル所ノ略言ニ依リ原
告會社)ヲ被告ノ所有スル炭坑ヨリ生スル

石炭賣却ノ自被告ノ全權代理ニ撰用ス
ルノ契約ニ過キズ 紹介ノ此類ノ契約ハ法
廷ニ於テ法律上至當ナルヘキモノト認
ルトモ因テ以テ此契約モ亦法律上至當ナ
ルモノト看做スノ理安シラナシ其故ハ先
該契約自^己ラ以テ之ヲ証センニ此契約ハ純
粹ナル委任契約ニ非スシテ他事ヲ含
スルモノナリ其ノ坑法ノ精神ニ觸ルハ實
ニ明瞭ナルヲ以テ之レヲ否ラサルモ(法廷深
ク此契約ヲ以テ坑法ノ精神ニ觸ルモノト
思惟スレカ故ニ)其坑法ノ文言ニモ相
互スルモノナリ其互ツルハ條目ハ之ヲ
寡言スルモノナリ即テ現今^行ヤン如ク
鑛山直取

ノ利益ヲ原告ヘ附与スル^ル及ヒ鑛山ノ未出
ノ鑛物ニ付キ其取押ノ權ヲ原告ヘ附与スル
ト是レナリ契約中貨物取押ノ權ハ「エドワ
ルド、ウヰットール」氏ノ手ニテ掘出シタル石
炭ニ限ントノ文意アルニ倒セス其實際前
述ノ如キヲ以テ該契約、其結果タル坑
法ニ抵觸スルモノナリ又該契約中炭坑ヨリ
生スル石炭ハ其坑外ハ出ルヤ否直ケニ「エ
ドワルド、ウヰットール」氏ノ保有トナル
ヘキモノナリトノ條款アリ而シテ「エドワルド、
告ハ其代理者ノ任トシテ「エドワルド、
ウヰットール」氏ニ炭坑ヨリ生スル石炭
ヲ本人及ヒ受託人ニ管理者トシテ譲与

人ノ請求ニ應シ若干量ヲ供給スルノ條
款アリ該二個契約ノ結合シタル成果
ハ原告ヲ以テ將來ノ礦山事業及ヒ未
出ノ礦物ノ主宰トナシ且ツ日々増加ス
ル原告ノ身錢及ヒ該炭坑ノ付後多量
ニ付受託人管理者及ヒ諸受人ノカ
コエドワルド、ウヰットー山氏ニ於テ前拂
シタル金額ニ付キ被告ヲシテ其預備
補償トシテ借區ヨリ生スル被告ノ利益ト
礦山ノ現人テ且ツ將來ノ利益トノ値額
ヲ原告ハ附与セシムルニ至ルナリ
前述シタル事ハ他ニ関セス全ク該契約ノ
ミラ以テ証明シタルモノナリ然ルニ今之ヲ

原被告間ニ於テ行フ所ノ一般ノ取引ニ
照シ且其一部分ノモノトシテ熟讀スル
ルハ如此熟讀セサルヘカラサルカ故ニ此契約
ヲ他ノ一個ト同時ニ成リタルモノト目合テ
認メサルモ其實質ノ露ルハヤ更ニ尚明カ
ナリ何トナレハ右ニ論スル契約ト該二個ノ
契約ノ関スル一般ノ取引ト同一目スルハ
該委任契約ナルモノ、結果ハ石炭賣却
ノ任ノミナラス總テノ礦山管理ノ任ヲ
原告ニ附与シ(原告ハ其他ノ契約ニ依リ
礦山管理ノ任ヲ帶ヒシモノナリ)以テ礦山
及ヒ其附属品ヲ原告ニ實際引渡スニ至
ルノ最モ明瞭ナルナリ

然レモ被告ニ於テ犯則ノ書入ヲ以テ償金
ヲ保證シタル金額ヲ還ラシムルハ該物
ヲ回復スルヲ得ルモノナリ礦品賣却ノ
代理及ヒ其賣却ヨリ生スル利益ヲ附与
スルハ此該博ナル契約ノ唯一部分ヲ占
ムルノミ

事實ノ点ニ付テ之レヲ論スレハ一千八百
七十五年七月一日付ノ二個ノ契約ハ正
ニ同物ナリ夫レ該二個ノ契約掲ケル所
ノ條款タルヤ或ハ重複スルカ如シ蓋シ
其文面或ハ同一或ハ異様ナリトモ其
趣意同シキモノマレハナリ或ハ又二款
其旨同シテ一款以テ他款ノ意ヲ補フモノ

アリ是レ該二個ノ契約ヲ比較スレハ其然
ルヤ判然タリ今之ヲ証セントスルニ契約
ノ大部分ヲ引出スラ要セス(若シ否ラザルハ
之ヲ要スルヘキモ)
何トナレハ其事實ハ該二個契約ノ一個ノ
末款ニ掲載セルヲ以テナリ
其款ニ曰ク此契約ハ之ニ連合セル第二契
約即チ今日後象ヲ印ノ捺印シテ正
ヤルデシマゼソシ高社ヲ以テ高島礦山及
ヒ其附属事務ノ代理者等ニ任スルノ
契約ヲシテ無効ナラシムルモノニ非スレ
テ其意ヲ補フモノト考案スヘキモノナリ
是ニ由テ之ヲ觀レハ該二個ノ契約ハ緊要
ノ主意及ヒ正確ナル明言書中連合ノ

二字ハ唯意ノ連ナルノミナラスニ昏者形ノ
結合ヲ現ハスヲ以テ一項ノ取引ヲ執行
スル為メノ補遺條款トシテ連合シ決シテ
解離スヘカラサルモノナリ

此同事契約ヲ合一ニセスレテ二書ニ分ツ
ハ原被ノ意如何ニ論ナク其成果ハ
二書ノ全文ヲ一書ニ合記シタルモノト同シ
キモノナリ

此後原被間ニ於テ結フルノ契約ニ存今
茲ニ贅論ヲ要セス一千八百七十六年
ノ契約ハ前約ヨリ生ズル犯則ノ目的ヲ助
成セシ加為ナルカ故テ前約(此契約ハ一
千八百七十六年ノ一ノ契約ニ因リテ實

ニ固定サレタルモノ其當ラ得タル者ナルハ
ハ此契約モ行ハルベク前約其當ラ得サレ
ハ此契約モ亦廢物タルノミ又タ一千八
百七十八年四月ノ契約ハ金内ノ抵當
トシテ礪山ノ未出ノ礪物ヲ典入スルノ
條アルカ故ニ抗法ヲ犯スル明瞭ナルモ
ノトス今之ヲ要スルニ原被間ノ取引ハ
其犯則ノ多少ハ免モアレ徹頭徹尾
政府ノ明了ナル法律ニ全ク違犯シ
タル者ナリ

原被間ノ取引ノ法律ニ違犯セシヨリ
生ズルルノ成果如何ヲ今茲ニ論セン
夫レ法廷ノ據リテ以テ法律ニ違犯スル

契約ヲ要スルノ主義ハ一邦國ノ法律上ニテ制定シタルモノナラスシテ(伍令此主義ヲ適用スルノ細目ニ至ツテハ異同アルモ)自然ノ正理及ヒ政策ニ基クモノナレバ之ヲ一般ニ適用スルモノナリ而シテ今ヨリ法廷ニ於テ此判決ノ際原告カ自國法ニ正理ノ準則ハ即チ原告カ自國ニ於テ其國法ニ違犯セル契約ノ對子タラニ其自國ノ法廷カ自國ノ法律ニ照シテ判決スルモノ正理ノ準則ト同一ナリ今法律ニ違犯セル契約ヲ要スルノ主義ヲ概言スレハ則チ凡ソ法律ニ違犯セル契約ハ無効ノモノニシテ何等ノ

裁判ニ於テモ之ヲ執行スル能ハサルナリ然ラハ契約ノ法律ニ違犯セルト否トハ何ヲ以テ之ヲ判決セシム

英國中最大ノ権カアル法士ノ言ニ曰ク「契約ノ約因或ハ目的ノ以テ法律上許スルモノト為スヘキモノ次ノ如シ曰ク法律ノ禁セサルモノ曰ク法律上若シ其レヲ許スモ毫モ他ノ法律條款ヲ害セサル者曰ク詐偽ニ涉ラサル者曰ク他人ノ身体ト所有物トヲ害セサル者曰ク法廷其レヲ以テ正經ニ背キ或ハ政策ニ戾ルトセサル者是ナリ」凡ソ此數ノ者ハ皆契約ノ約因或ハ目的ヲ以テ法律上許スルモノニシテ

其許サレシモノ者ハ無効ナリ一個或ハ多
種ノ目的ヲ以テ約セシ單一約因ノ一部或
ハ一種ノ目的ヲ以テ約セシ多種ノ約因中
ノ一種或ハ其一種中ノ一部モ法律上許
サレシモノモアレハ全契約皆無効ナリ
故ニ此契約ハ執行スヘカラサルモノトシ
ソ其人ノ利益其契約ヲ實踐シ差止令ラ
以テ其破約ヲ防キ金由ヲ償却シ不有物
ヲ還收スルニ在リテ如此契約ヲ結フ者
甚タ稀ナルナリ而シテ当法廷ハ本府
ノ事件ヲ以テ右論スルモノト大ニ著合セ
リト感セサルヲ得ス然レモ原告共不
法ノ契約ヲ結フハ被告ハ常ニ原告ヨ

リモ好地位ヲ占ムルモノナリ其故ハ法廷
タルモノ原告ノ一方ヲ庇護セサルヲ以テ
原告終ニ其損ヲ受クル者ナリ
当原告本人及ヒ其代言人モ皆英國人
民ナルヲ以テ当裁判所ハ左ニ英國裁判
官及ヒ法師中尤モ有名ナルコールド、マン
スフールドノ言語ヲ尤モ掲載スルヲ得ベシ
即チ「クーパー」ノ第三百四十三丁「
ルマン」對「ジョンソン」中ニアリ「原告間ニ結
ヒタル契約ハ不合法ノモノナリトノ
被告拒弁ハ常ニ忌ム可キ答ナレモ衆益
ヲ酌リ被告ノ為ニスルニアラザレモ被告
ヲ以テ該点ヲ理由トシテ原告ノ請求

ヲ拒ムラ得ヘキモノナリ而シテ如此場合
ニ於テハ不慮ノ災難ニ由リ真誠ノ正道
ヲ施行スルヲ得ヘカラサルモノナリト云
フベシ。衆益ノ主義ハ即ケ惡事ヲ理由ト
シテ出訴スル權ナシ。裁判ハ不正及ヒ
不法ノ爲ラ理由トシテ出訴スルモノ
ヲ即ケザル故ニ原告ノ陳述及ヒ其他ヨ
リ原告ノ理由トシテ出訴スルモノ
、惡事ヨリ起リ或ハ本邦ノ法律ニ觸
ル、カ如ク現ハル、其ハ裁判ハ原告
一向ヒ助ヲ請求スル權ナキモノト言ハ
ス者ナルヲ以テ當廳モ其張リ被告ヲ
助クルニ非シ氏當原告ハ助ヲ与ヘザルベ

レ故ニ設ヒ原告被告トナリ被告原告トナ
リテ出訴スルトモ同一ノ判決ヲナスベシ
其譯ハ原被告トモニ錯誤ラナシタル
其ハ被告常ニ其理ヲ得ベシ
當裁判所ハ右格言ヲ悉皆採用ナレ之ニ
因テ以テ判決ヲ下ス可シ
當訴訟ヲ法律ニ參照スルハ最モ容易ナ
リ、今回原告ノ訴訟ニ由テ原告ノ不爭物
ヲ管理し並ニ之ヲ保有スル物件ヲ有
スルト主張セントスル旨明瞭ナリ故ニ裁判
所ノ助勢ヲ仰カント欲セハ先ツ裁判官
ニ對シ原告ノ物權ヲ有セザルベシトノ疑ヲ
解カザル可カラス、一般裁判所ハ暫時ノ

差留^令格ヲ發シ眞心ノ權利ヲ補翼ハスルモ
ノナレハ該令ヲ請求スルモノハ自分眞心ノ
權利ヲ有セザルベシトノ疑ヲ氷解セサルベカ
ラズ、原告ハ(原告) 代理人、英國裁判所ノ判
決ヲ引証シテ正シク論弁シタル如ク眞
心ノ物權ヲ有スル一ラ亮然証明スルヲ要
セサルモ該物件ノ有無ニ関シ判決ヲ要
ス可キ亮分ノ理有^由アル一及、原告兩告
向ノ取引等ニ付原告ノ所為ハ一般正直
ナルモノニシテ^其法律ニ觸レサル旨ヲ辨
明セサル可カラズ而シテ原告ハ右二個ノ
要点ヲ下等裁判所ニ於テカ將夕當廳ニ
於テカ弁明シタルヤ決シテ否ラス故ニ下等

裁判所ニ於テ下シタル原告ハ差留令ヲ請
求スヘキ十分ノ理由ヲ弁明セサルノミナラス
其因テ出訴シタル基本ノ法律ニ觸レタル
モノタリトノ疑ヲ起シタルヲ以テ該疑点ヲ
辨明セサル迄ハ差止令ヲ發スルヲ肯セサ
ル旨ノ判決ハ至當ナルモノニシテ原告ハ
該判決ヲ法律ニ違^適セサルノミナラス一般
正道主義ニ及シタルモノナリト不服ヲ主張
シ控訴ナレタリ而シテ當廳ハ控訴審問
後猶ホ一步ヲ進メ原告ノ兩裁判所ニ於
テソ請求ハ法律ニ抵觸スルモノトノ疑ヲ精
密ナル審問ニ仍テ猶ホ一層増加セリト云
ハザル可ラス故ニ當裁判所ハ原告ノ因テ

出訴シタル所ノ被告ノ如何ヲ問ハス
這回ノ情况ニ於テハ原告ノ願望スル所ノ
方法及ヒ其後ノ方法ヲ以テ原告ハ助翼
ヲ与フル一途ハサルナリ

原告代言人ノ具陳シタル一ニ就テ尚ホ更
ニ一二ノ点ヲ論スルヲ要スベシ」原告人ハ
同人ノ論兼書ノ結文ニ至ルマテ抑モ一時
ノ差止ヲ出願スルニハ一目シテ瞭然許訟
ヲ起スヘキ理由ノ充分之レ有ル一ヲ辯
明セサル可カラサルモノト論辯シタリト虽
モ下等裁判所ノ判決ヲ不服トシテ控訴
スルニ當テハ右論辯ハ不要ニ属ス可シ
原告代言人ハ該論辯全收尾ノ款條ニ至

テ而已初メテ下等裁判所ノ下命シタル占ハ
就テ論端ヲ開ケリ即チ原告ノ請求ハ法ニ
觸ルヤ否ノ点ナリ而シテ該條件(他
事ノ外)真正ノ論辯タルヲ得一キモノ一アリ
尤ノ二点ヲ含蓄ス

第一点ハ垢法ノ違反ハ獨リ被告ニ限リ之
ヲ行ヘリ而シテ右ハ唯ニ被告ト其復主
ナル政府ニ関スルノミニシテ原告ニ係ハル答
ナクシテ該許訟ノ法律上及ヒ事實ニ就テ
ハ既ニ十分言ヲ容レタルカ故ニ尚ホ之ニ論
及スルヲ要セスト第二点ニ曰ク被告カ原被
告ノ間ニ取結ヒタル契約等ハ不法ナル等
ノ如キ拒弁ヲ主張セサル上ハ東京裁判所

ハ其中間ニ入りテ之ヲ被告ノ代リニ該拒点
ヲ主張スルハ其職務ニ非ルナリト又原告
代言人ハ之ニ同一ノ論弁ヲ前ニ既ニ該裁
判所ニ於テ演述シタリ曰ク被告代言人ハ此
ノ諸條約適法ノ点ヲ難弁セザリシカ故ニ
右約條ノ結局無効且ツ不正ノモノナリト
証明アルニ非シハ当裁判所ニ之ヲ以テ充分
ノ効力ヲ有シ実ニ正理ニ適應スルモノトシテ
論セサルヲ得サルナリト爰ニ於テ被告ハ悉
皆原告ハ裁判官ヲシテ該点ニ注目セカラ
シムルヲ得ヘキ丈ケ原被告共ニ何故該点
ニ論及セザリシトハ明瞭ナリ然リトモ
原告代言人ニ於テ右ノ如キ論辨ヲ進呈

セシハ裁判所ノ驚愕スル所ナリ其故ハ英律
差止令書中(既ニ原告代言人カ他件ノ
引証トシテ拔示セシ所ニ接近シテ)格例
ノ明詳ニ記載セルモノアルヲ以テナリ曰
ク裁判官ハ被告ノ一点ニ就テ要求ノ有
無ニ関セス其自己ノ為メ法律上真正ノ
權利ハ之ヲ保シ復シテ被告ノ意思ニ
任セ該点ニ付テハ判決ヲ下サ、ルモノナ
リト

「カアル」ノ差止令書二百〇九ノ第十五款第
二十條中「ハルマン」對「ジョーンス」ノ事件
並ニ「クレイグ」及ヒ「フザリツプス」三百〇
一丁又タ「リツグビー」及ヒ「グレート」ウエス

タルン、レイルウエー、コンパニー、セコント、フキリツ
プ、四十九丁ヲ着ヨ

又夕英律ニ於テ格例アリ曰ク原被双方共
不法ノ不為ヲナレタル場合ニ於テハ裁判
ハ該不為ニ付キ原告ヲ補翼スル能ハサル
トノ制規ノ適用スルヤ否ノ試法ハ即チ原
告ニ於テハ被告ト共ニ為シタル不法ノ
ニ因ルニアラスシテ其能ノ理由ヲ以テ出
訴スル十分ノ権利アルヤ否ヲ決定スル是
ナリ

英國女帝裁廳判變レポルト 三百九(三百十
四丁)「コテイロル」對「チエスタ」ノ事件ヲ着ヨ
已上記スル不ノ格例ハ悉ク当訴訟ニ就テ

既ニ東京裁判ニ至ニ當裁判ニ於テ行
フ不ノ裁判ノ道ニ能ク適應スル原告人ハ
同人ノ因ラ出訴スル不ノ起テノ不列ノ不
法ナル性質ヲ露ハサズ併セテ該不列ノ
由ラ出訴スルヲ止ムルニアラサレハ裁判不
ノ補翼ヲ仰ク權ナレ然レモ同人ハ終ニ
右ノ如ク為サザリシレ而シテ此等ハ原告
ノ訴狀面ニ瞭然ナルカ故ニ裁判官ハ其
保護ノ為メニ前記ノ試法ヲ適用シ之ニ從
テ裁判セサルヲ得サルハ素ヨリ必要ノ
職務タリ此ノ其保護ハ為人ニノ語ハ本
件ニ関シテハ兩裁判不ノ不置ノ是非ヲ
決スルニ足ルベシ抑モ裁判官ハ原被間ノ

不法ナル取引ヲ指示スルハ爰シテ被告ヲ利
スルノ爲メナラスシテ唯其裁判所ノ爲ニ
ス其故如何トナレハ兩裁判所ノ職務ハ其
本邦法律ノ効力ヲ維持シ其威權ヲ保
護スルヲ以テナリ而シテ這回ノ如ク現
ニ法律ニ觸レタル取引等ノ裁判官へ
明瞭ナルモ之ヲ捨措ク片ハ裁判官ニ於
テハ司掌スヘキ義務カラム忌リ法律ニ觸
ル、而シテ所爲ヲ黙視スルモノト云ハサル可
カラス

日本現行ノ坑法ヲ遵奉セスシテ這回
原告ノ願望スル所ノ差止令ヲ以テ如何
ナル場合ニ於テモ本邦ニアル礪山ニ就テ

ノ取引等ヲ處置スルノ不法ナルハ他
論ヲ要セスシテ單ニ日本坑法ニ因テ原告
ノ得ル純ハカル所ノ權利ヲ補習ス可キ
裁判ヲ下スハ現ニ當廳ニ於テ不法ノ處
置ヲ爲スモノト云フベシ
當廳ハ前述ノ條々ニ基キ今茲ニ其判決ヲ
下ス

原告控訴ノ旨意変シテ立ザルモノナリ

演說案

原告ノ暫時ソ差止メ控訴願ニ付上等裁判
所ノ判決ニ依レハ現今ノ訴狀ヲ以テ本件ノ
審問ヲ連続スル能ハカルトハ法廷ニ於テ之ヲ
明瞭ナルトス

此判決タルヤソ差止願ニ依リ直接ニ起ルル論
点ノミテラス当法廷ニ提供セシ全件ニ適用
スベキ主義ニ基クモノナリ

是ニ由リ當法廷ハ既ニ示メタル本日ノ審
問ヲ直ニ延期シ以テ原告代理人ヲ以テ将来施
行スベキニカ法ヲ熟考セシメト欲ス其指道ト
シテ法廷ハ該件ニ付今法廷ノ意見ヲ陳述
セシ

原告ニ於テ現今ノ訴状ヲ願下スルハ固ヨリ
自由ニシテ之ヲ願下スル之レカ為メ他ノ異ナル
訴状ヲ提供(若シ要スルハ明日タリト)スルノ權
ヲ妨害セサルヲ固ヨリ明ヤナリ
若シ原告ニ於テ之ヲ提供セント欲シ且ツ現今
ノ訴訟ヲ効テラシムル所ノ坑憑ナキ訟事ヲ法
廷ニ申告シ得ルハ(當法廷ニ於テ原告カ其
請求ノ一部分ニ付如斯申告スル能ハサル
理由ハ何レノ點ニ在ルヤ目今知ラサル所ナリ)
法廷ハ原告ノ為メ延期ヲ防キ且ツ原告被
双方ノ入費ヲ省カシ為メ計算ヲ計算人ニ委ヌ
ルヲニ付既ニ原被間ニ於テ時日ヲ費シ爭論し或
ハ談判シタル原被間ノ計算ノハ無益ニテラサル

様處置スベシ然レモ其審理タルマ(正式ヲ以テ
論スレハ勿論無効ノモノナリ)實際上ニ於テハ此改正
ノ状態ニ依リ法廷ニ於テ必要ナリト思考スル
所ノ更改ヲ加ヘテ既ニ達シタル現場ヨリ更ニ復タ
進行スヘキナリ
若シ原告ニ於テ上等裁判所ノ判決ヲ大審
院ニ上告スルハ當法廷ノ審理ハ終審ノ判決
ニ至ル迄悉ク中止スヘキモノナリ
若シ又之ニ及シ原告ニ於テ現今ノ訴状ヲ願下
サルヲ欲セス又該判決ヲ大審院ニ上告セサルハ
當法廷ニ於テ最新ノ判決ノ權ニ據リ他ノ訴状
ヲ提供スルヲ妨害セスレテ只現今ノ訴状ヲ却下ス
ルナラシ

今法廷ハ直ニ該件ヲ無期迄延スベシ原告代
言人ニ於テ今後何時タリ凡其施行セント歎ス
ル方法ヲ法廷ニ通知スルヲ自由タルヘキナリ

明治十二年三月三日

